

医療分野における研究不正行為に関する意識調査及び心理的要因分析

研究不正事例調査報告書

附録 2

平成 30 年 8 月

――白楽の注記――

次頁以降、白楽ブログ記事からの盗用と思われる引用なしのコピペを、白楽が黄色で示した。

「研究倫理（ネカト）白楽ロックビルのバイオ政治学 <https://haklak.com/>」など、Web上で検索して入手できる情報をもとに、研究不正を行った研究の情報や不正の背景について調査者の視点からまとめた。動機や正当化に関して主観的なコメントを付していることと、表現などの統一がなされていないため、事例のデータベースとしての利用を意図して公開する。

1	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	7件 撤回はないとされる
不正期間	2003年～上記7件のうち1論文の発表が2003年で最新が2014年となっている。
名前	モリス・カーマズィン
経歴	モリス・カーマズィン (Morris Karmazyn) は、カナダのウェスタンオンタリオ大学 (University of Western Ontario) ・教授で、専門は心臓病 (心肥大) だった。数百報の論文を出版し、多数の賞を受賞し、I種・国選研究教授 (Tier 1 Canada Research Chair) に選出された著名な研究者だった。医師ではない。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	カナダ ウェスタンオンタリオ大学教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	心臓病
生年月日	不明
出身国	インド
概要	<p>2014年、モリス・カーマズィン研究室のポスドクのボー・リー (Bo Li、女性) が、カーマズィン教授がねつ造・改ざんしていたと大学に公益通報した。</p> <p>2016年10月、大学は調査を終え、不正と判定し、カーマズィン教授を解雇した。(主に画像問題が7件)</p> <p>しかし、研究室員の嘆願書、本人の不服申し立て、教授協議会会長の嘆願書が出された。嘆願書には、カーマズィン教授の行為は不正ではなく「誠実な間違い」だと主張している。</p>

	<p>大学の報告書:大学の出した報告書の結論には今回の画像に関する duplication (複製) は大学の研究活動規程の MAPP7.0 およびカナダ政府関連の助成による研究に対する定義書である The Try Agency Framework : responsible conduct of research に違反するとして、主要著者の管理下で行われた研究の正確性を監督することができなかったとしている。</p> <p>不正が故意もしくは不誠実だとは立証されていない処分に対して、大学に嘆願書が提出されている。嘆願書には本人ではなく、共著者の単純ミスであることで罰させられることは大学の労働協約もしくは MAPP の一部に違反しており、こういったことはカナダばかりか世界でもないとし、原職復帰を求めている。</p>
	2017年2月1日現在、最終決着はついていない
動機	pressure
	論文を発表してファンドを維持できればすべて良し、とするビジネスライクな研究室である。(告発者)
	調査研究に対する基本的原則が機能していない研究室であった。(告発者)
機会	opportunity
	本人はパソコン操作が得意でない。また研究室では作業しない。(大学の教職員組合の会長)
	望んだ結果が出ない時は教授の怒りを買ひ、研究問題などは研究室以外での口外は禁止されていた。(告発者)
	後に口外してはいけないのはパーソナルな情報のみだと反論。(本人)
正当化	rationalization
	本人のミスではなく、あくまで上級著者が犯した故意以外のいわゆる人為的ミスである honest mistakes ・ technical mistakes として、このミスを認めている。(本人及び当時の担当著者)
	全ての生データは研究室にあり、再現可能、訂正でき、結果が覆る論文はない。(本人及び当時の担当者)
	エラー (不正) とされた箇所はただのエラーでしかなく、第一人者とされる研究者にでも起こる。(大学の教職員組合の会長より)
補足	etc
	この件以前の論文で撤回されたものはなく、修正されたものが一つ (著者序列は最後から二番目) あるとされている。(RW)
	告発者が在籍した間に発表された告発者名がある論文は共著を含めてひとつもない。

	(白楽)
	告発者は研究成果を出せず 2015 年のポストクの更新がされなかった。この解雇通知前後が告発時期 (2014 年 9 月に大学、同年 12 月に関連出版社) だとされている。(RW)
	告発者は現在保険会社で勤務している。(RW)
	ミスを認めた上級著者たちは現在違う大学に勤務 (大学での役職などは不明)。(RW)
	今回は不正ではなく監督不行き届きに似た処分。集団ではなく上司が部下のミスを被ったかたち。

2	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	16 件 論文撤回の他、4 つの修正、部分撤回や疑惑の論文もある。
不正期間	2006 年 原告人による 2006 年以降の助成金関連申請が疑われているため。
名前	エリン・ポッツ＝カント
経歴	エリン・ポッツ＝カント (Erin Nicole Potts-Kant) は、若い女性で、米国・デューク大学 (Duke University in Durham, North Carolina) ・肺疾患研究グループのテクニシャンで、専門は肺疾患生物学だった。医師ではない。マイケル・フォスター教授 (William Michael Foster) の下で研究していた。
性別	女
発覚時の年齢	32
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ デューク大学テクニシャン
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	肺疾患生物学
生年月日	発覚時 (2013 年) 32 歳とされる
出身国	アメリカ (?)
概要	2013 年 (32 歳)、研究費で私物を約 25000 ドル購入した横領罪でポッツ氏が逮捕された。これにより彼女が関連した論文プロジェクトが再調査された。2013 年 (32 歳)、同じ研究グループの教員・ジョセフ・トーマスが調査グループに参加、ねつ造・改ざんを見つけ、大学に通報したが取り合ってくれなかったとされる。2015 年、トーマス氏は大学を被告に裁判を起こした。約 60 件の助成 (2 億ドル) について不正申請で得

	たとされている。不正を知りながら助成申請をした大学と指導教授フォスター氏もポッツ氏と併せて訴えられている。
動機	pressure
	トーマス氏によると 2006 年以降、デューク大学のポッツ氏や所属のフォスター教授のラボは、NIH 関連などの助成を最低でも 49 件、総額 82.8 億ドルを受けていた。これら不正データを使用したその他の関連機関が受けた助成も 15 件推定 120 億ドルにおよぶことから、不正の連鎖を誰も止めることができなかったのではないかと。
機会	opportunity
	不正行為が見逃されていた状況の可能性。捜査が入る以前から研究室のフォスター教授及びスタッフは不正を知っていたと思われる。他の不正調査スタッフ及び関連部署のスタッフはポッツ氏が関わったほぼ全ての実験データが改ざんされていると語ったという。正しく実験されなかった、もしくは実験自体がなされなかった疑いもある。実験はされたがデータを改ざんして仮説に合うように操作したともいわれている。(元同僚の原告)
正当化	rationalization
補足	etc
	横領罪の当事者ポッツ氏の動機に当たるようなコメント、及びフォスター教授などのこの件へのコメントは見当たらない。今後裁判が進め動機がわかるのか。大学側は 2013 年の横領が発覚するまで不正を知らなかったとしている。2013 年 6 月に不正事件を各政府機関に報告し、正式に不正調査を開始している。
	ポッツ氏とともに 13 件の論文を撤回された指導教授のフォスター氏は大学をすでに大学を退職している。撤回された論文 (16) の多くはフォスター氏との共著である。テクニシャンとして雇用された人であり、本当の黒幕は教授の可能性もある。(白楽)

3	
検索入口	
不正の種類	データ改ざん
不正論文数	5 件、撤回が確認されているのは 3 件。「研究不正」 p. 95-96 黒木登志夫著
不正期間	「研究不正」 p. 89 黒木登志夫著によるとノバルティス社の「100B プロジェクト」を立ち上げたのは 2002 年であり、2007 年の慈恵医大がランセット誌に論文を発表したあと、他大学も各ジャーナル誌に論文を発表していく。
名前	白橋伸雄

経歴	事件関与のきっかけとなる2003年当時はノバルティス社の社員であり、大阪市立大学の非常勤講師をしていた。白橋氏の経歴と所属先の認識を大学側がいつしたのかということもこの裁判のポイントの一つになっている。
性別	男
発覚時の年齢	63歳（2014年逮捕時）
発覚時の地位 （所属機関と国）	大阪市立大学非常勤講師
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	工学士。製薬会社のMRであったが、統計解析に秀でていとされている。
生年月日	2016年11月で65歳とされる。
出身国	日本
概要	<p>ディオバン事件（ディオバンじけん）とは、高血圧の治療薬であるディオバン（一般名：バルサルタン）の医師主導臨床研究にノバルティス日本法人のノバルティスファーマ社の社員が統計解析者として関与した利益相反問題（COI: Conflict of Interest）、および、臨床研究の結果を発表した論文のデータに問題があったとして一連の論文が撤回された事件を指す。</p> <p>ディオバンの日本での臨床研究には、5つの大学（京都府立医科大学・東京慈恵会医科大学・滋賀医科大学・千葉大学・名古屋大学）が関わり、それぞれ論文を発表した。尚、これらの大学には総額11億円以上の奨学寄附金がノバルティス社より支払われている。不正調査は各大学にゆだねられており、処分されている教授や撤回された論文もあるが、ないものもある。元社員の白石伸雄氏は2014年に薬事法違反で逮捕、ノバルティスファーマものに起訴され、白橋伸雄氏には懲役2年6か月が、ノバルティス社には罰金400万円を求刑、判決は2017年3月16日予定。</p>
	2017年3月16日、意図的にデータを改ざんしたと認められたが、薬事法で規制された治療薬の購入意欲を高めるための広告にはあたらないとして白橋氏およびノバルティス社の無罪が発表された。
	2017年3月29日、第一審判決を不服として東京地検は控訴。
動機	pressure
	ノバルティスファーマ社の製品ディオバンのセールス拡大の宣伝のためのデータ作りの一環として行った。
	大学側としては巨額の研究費が長期間保証されている。「研究不正」 p. 93-94 黒木登

	志夫著
機会	opportunity
	研究室を率いる当時の教授である松原氏は教授としてのプレッシャーとして、研究助成をノバルティス社に求め、それをまとめる人材まで要求した。
	データアクセスできる人が100人以上、不正が起きても犯人を特定できない状態。
	論文の筆頭著者の名義貸しという習慣が大学のなかにあり、頻繁に行われていた。
	五大学の循環器科内科教授は高血圧の専門家ではなく、臨床研究に造詣が深い研究者でもないという共通点を指摘、狙われたとされている。「研究不正」 p. 94 黒木登志夫著
正当化	rationalization
補足	etc
	依然、大学側の白橋氏主導で不正が行われたという主張と、大学側の無責任な姿勢やデータ管理関与などで争われているところから訴えられている白橋氏およびノバルティス社だけではこの事件はなりたたないのではないかな。
	この事件の記事は m3.com の中で「降圧剤論文問題と研究不正」というシリーズで公判の内容も含め詳しく述べられている。
	m3.com 降圧剤論文問題と研究不正リンク先 loginID:misconduct / PW:usouso800
	本件はあくまでも薬害訴訟ではなく、高血圧治療薬の中で効き目が他の類似薬品よりもよいデータがあるという元薬品会社の社員のデータ改ざんの不正、およびこの不正データを論文に取り入れ、セールスへの広告に使われたとのことで、薬自体に問題があるというのではない。

4	
検索入口	Wiki 白楽が執筆
不正の種類	ねつ造
不正論文数	10件
不正期間	1992-2000
名前	エリック・ポールマン
経歴	1987年、31歳の時、バーモント大学 (UVM) 医学部にポスドクに採用された。その後、助教授、準教授に昇格したが、1993年にボルティモアのメリーランド大学・準教授に転籍した。3年後の1996年、40歳の時、バーモント大学医学部に準教授として戻り、後に教授になった。彼は、20年間にわたる研究で200報を超える論文を書き、

	老化に伴う物質代謝、特に閉経に伴う物質代謝とホルモンの関係について優れた研究業績を上げ、この分野の権威という評判を得た。彼の論文は、肥満の遺伝学、運動の重要性にも及んだ。
性別	男
発覚時の年齢	44
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ バーモント大学医科大学院 教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	内分泌学 (ヒトの肥満と老化の内分泌学)
生年月日	1956 年
出身国	カナダ (?)
概要	<p>2000 年 (44 歳)、研究室のテクニシャンによりデータねつ造・改ざんが発覚した。</p> <p>2002 年 4 月 18 日 (46 歳)、バーモント大学医科大学院・調査委員会はポールマンをクロと判定した。</p> <p>2006 年 (50 歳)、バーモント地方裁判所により、17 件の研究費申請書と 10 報の論文のデータねつ造・改ざんを犯した罪で刑期 1 年 1 日の収監が裁定された。研究不正で収監された世界で最初 (もちろん米国でも最初) の研究者となった。</p> <p>2008 年 (52 歳)、ORI (研究公正局) はポールマンの研究不正に対し、締め出し年数 (debarment) を終身とした。終身の締め出し処分を受けた研究者は、2015 年 12 月 3 日現在、3 人しかいない。</p>
動機	pressure
	本人の研究仮説は長い間状況的証拠で支持されていたものであった。
	大学はお金 (助成) と大学認知度を高めてくれる人材が欲しかった。
機会	opportunity
	データの持ち出しが可能だった。
正当化	rationalization
	研究室のメンバーの生活を守るために多少の不正は称賛に値する。(本人)
	論文の発表そして NIH の研究助成金を運んでくるのがこのコミュニティではステータスになっている状況がそもそもの根源だ。(本人)
補足	etc
	仮説が正しいという発見ではなく、仮説は間違っていたという発見を逃した。(裁判官)

5	
検索入口	白楽ロックビル（現在も調査中）
不正の種類	盗用 ねつ造 改ざん
不正論文数	12 件
不正期間	1997～ PubMed で Saad MJ/retraction で検索して撤回された論文が 11 件あり一番古い論文の発表の年代
名前	マリオ・サード
経歴	マリオ・サード (Mario Saad) は、ブラジル・サンパウロのカンピーナス州立大学 (State University of Campinas) ・内科教授・医師である。専門は糖尿病で、公称は妻と 2 人の娘がいる。「Times Higher Education」の大学ランキングでは、カンピーナス州立大学はブラジル第 2 位の大学である (World University Rankings 2014-15: South America - Times Higher Education)。
性別	男
発覚時の年齢	57 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	ブラジル・サンパウロのカンピーナス州立大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	糖尿病
生年月日	1956 年 9 月 8 日
出身国	ブラジル
概要	2014 年 3 月 (57 歳)、ねつ造・改ざんが発覚した。事件後も研究者を続けた少数例。研究ジャーナル「Diabetes」誌は、米国糖尿病学会 (American Diabetes Association) の看板ジャーナルである。サードの論文にねつ造・改ざんがあるとの疑惑を、最初に公益通報した人物は不明だが、多分、2013 年後半に、研究ジャーナル「Diabetes」誌に通報したと想定される。2014 年 3 月、米国糖尿病学会 (American Diabetes Association) は、サードの 2007 年と 2011 年の「Diabetes」誌の論文にねつ造・改ざんの疑念があるとサードに伝えた。サードは、米国糖尿病学会の問い合わせに、「ねつ造・改ざんはありません」と電子メールで回答したが、ねつ造・改ざん疑惑を払しょくするデータを示さなかった。

	「Diabetes」誌の依頼に応じ、カンピーナス州立大学は調査を実施した。2014年6月、カンピーナス州立大学・調査委員会は、「サードの2007年と2011年の「Diabetes」誌の論文は基本的に正しい。但し、画像の処理と保存に誤り（mistakes）があった」と調査結果を公表した（saadunicamp-investigation-report）。しかし、研究ジャーナル「Diabetes」は、カンピーナス州立大学・調査委員会が「基本的に正しい」とした結論に納得しなかった。調査そのものに疑念を表明し、カンピーナス州立大学に再調査するよう要請した。と同時に、追加要請として、サードの1997年と2006年の論文にも疑念があるので、合わせて調査するよう要請した。
動機	pressure
機会	opportunity
	一つのパソコンで三つの論文研究が同時に行われていたので混乱して起きた間違いであると主張。（本人）
	疑われている論文の発表時期は違うが研究室には使用していたソフトがインストールされたパソコンが一台しかなかった。（共著者）
正当化	rationalization
	「Diabetes」誌はサード側から論文の修正を依頼されたが却下した。（共著者）
	研究が終わって外部のアドバイザーから問題は何も指摘されなかった。ジャーナル誌からの連絡でオリジナルデータを検証し、不適切に収集されたとした。（共著者）
	2015年サード教授はジャーナル誌の論文撤回中止を求め訴訟を起こしたが後に敗訴。
補足	etc
	この事件からサード氏論文撤回数は増えて8件目（2016年9月のRW）。

6	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	10件
不正期間	2002 - 2004年
名前	高橋孝夫
経歴	タカオ・タカハシ、高橋孝夫（Takao Takahashi）は、2002年6月 - 2004年6月（35 - 37歳）、米国のテキサス大学・サウスウェスタン・メディカルセンター（University of Texas Southwestern Medical Center）のアディ・ガズダー（Adi Gazdar）研究室のポスドクだった。元々、岐阜大学の医師で専門は消化器癌外科だった。米国・留学先

	のアディ・ガズダー教授の専門はがんの分子生物学である。
性別	男
発覚時の年齢	35-37歳 ポスドク期間
発覚時の地位 (所属機関と国)	不正だとされる期間はアメリカ テキサス大学 ポスドク。不正発覚時は岐阜大学講師。
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	消化器癌外科
生年月日	1967年(?)
出身国	日本
概要	2012年8月(45歳)、岐阜大学・講師になっていたが、米国のテキサス大学から岐阜大学に、高橋孝夫の米国滞在中の研究成果を基にした論文に研究不正があるとの通報があった。岐阜大学が調査を開始した。2014年12月19日(47歳)、米国・研究公正局は、高橋孝夫の2004-2010年の4論文にデータねつ造・改ざんがあったと発表した。2015年3月20日、岐阜大学は、高橋孝夫を停職6か月の懲戒処分にした。2015年3月、岐阜大学は、調査の結果、2004-2010年に4論文中に、画像の一部を反転したり削除したりするなどの改ざんや画像の使いまわしなど、あわせて12か所にデータねつ造・改ざんがあったと発表した。この時、他の論文にも不正画像を見つけ、調査を進めた。すると、不正実行者は高橋孝夫だけではなく、同時期にガズダー研究室に滞在した日本人研究者(マコト・スズキ、鈴木実(Makoto Suzuki))も不正実行者だったのだ。
	テキサス大学の指導教授であったガズダー教授のもとにスペインの調査官からの問い合わせがあり調査を始めた。(RW)
	4件の論文の不正を認めたが五件目は拒否した。そしてもう一人のポスドク(鈴木氏)が五件目の不正を認めた。
動機	pressure
	「時間がない中で成果を出さねばならないプレッシャーに負けてしまった」と不正を認めている。(本人)
	コントロール実験を実施したがデータを取り紛れさせてしまったので、論文作成時は対応するデータを探し出せず別の実験データを流用したとの本人の証言。しかしのちに生データとなるものも見つからず、コントロール実験の重要性を認識していなかったと指摘されている。

機会	opportunity
	不正仲間の存在、もしくは内部で見逃されていた可能性。この不正発覚で他の不正者も発覚。
正当化	rationalization
	不正行為が見逃されていた場合、行為自体が正当化されていた研究室であった可能性。
補足	同じ研究室にいた日本人留学生も関連不正者の一人とされている。
	鈴木実氏の不正ケース参照

7	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	6件
不正期間	2001-2007 アメリカ滞在期間から論文発表までの期間
名前	鈴木実
経歴	マコト・スズキ、鈴木実 (Makoto Suzuki) は、2001 - 2003 年 (36 - 38 歳)、米国のテキサス大学・サウスウェスタン・メディカルセンター (University of Texas Southwestern Medical Center) のアディ・ガズダー (Adi Gazdar) 研究室のポストドクだった。米国・留学先のアディ・ガズダー教授の専門はがんの分子生物学である。留学前後は、千葉大学の助手・医師で専門は呼吸器外科 (癌) である。研究博士号 (PhD) は論文博士で取得している。 2003 年に日本に帰国し、2011 年 (46 歳) に熊本大学・呼吸器外科・教授になった。
性別	男
発覚時の年齢	36-38 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	不正したとされる期間はアメリカ テキサス大学 ポスドク。不正発覚時は熊本大学 教授。
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	呼吸器外科
生年月日	1965 年 (?)
出身国	日本
概要	2012 年 (47 歳)、テキサス大学が、米国滞在中の研究成果を基にした 2005 - 2007 年の論文にデータねつ造を見つけた。

	<p>2014年12月19日(49歳)、米国・研究公正局は、テキサス大学の調査に独自の調査をした結果、2001 - 2003年(36 - 38歳)の米国滞在中の研究成果を基にした鈴木実の6論文にデータねつ造・改ざんがあったと発表した。高橋孝夫のねつ造・改ざんの発表と同じ日である。</p> <p>2015年5月現在(50歳)、熊本大学は、鈴木実の処分を発表していない。ほぼ同じ不正をした高橋孝夫・岐阜大学・講師は4論文の不正で停職6か月の懲戒処分を受けた。鈴木実は6論文の不正なので、処分はさらに重い可能性がある。</p>
動機	pressure
	時系列により推測すると先に不正をした高橋氏をみて追随したのではないか。(白楽)
機会	opportunity
	留学先での出来事であり日本人同士での仲間意識や秘密を持ちやすい環境があった。
正当化	rationalization
補足	etc
	現在も所属する熊本大学からの処分は発表されていない。
	これら高橋氏・鈴木氏関連の不正論文には多くの日本人名が含まれている。
	高橋孝夫氏の不正ケース参照

8	
検索入口	白楽ロックビルのリストから。白楽の詳細はなし
不正の種類	盗用
不正論文数	3件 もう一件の論文盗用も指摘されている。補足参照
不正期間	2014年 3論文すべてが2014年の発表となっている。
名前	Rajesh Valjibhai Chawda
経歴	整形外科医。MBBS、MS。研究当時はインドのCU Shah Medical College and Hospital 所属とされている。現在本人のホームページは見つかっていない。
性別	男
発覚時の年齢	34歳(?)
発覚時の地位 (所属機関と国)	インド CU Shah Medical College and Hospital 所属となっている。
医師免許の有無	有
博士号の有無	不明
研究分野	整形外科

生年月日	1981年生まれ(?)
出身国	インド
概要	International Journal of Medical Science and Public Health は 2015 年 3 月に論文を 3 件撤回したと発表した。この 3 件の論文の著者は Chawda 氏でありその他の著者 8 人全員をジャーナルから追放するとした。発覚は盗用されたとする一つの論文のある著者からの通報でわかった。ジャーナル誌の内部調査で盗用が明らかとなり、その他 2 論文にも明らかな盗用が判明した。当人に問い合わせたが返答なし。論文はすべて整形外科系の論文。
動機	pressure
機会	opportunity
	筆頭著者を含むすべての著者はインド人のような名前である。重なっているのは Chawda 氏ともう一人で 2 つの論文にいる。共著者も名前で検索したが、それらしき整形外科の研究者が全く見当たらない。存在するのは Chawda 氏のみと思われる。単独で、共著者を捏造しているため盗用を実行しやすいのかもしれない。
	盗用しているとされるオリジナルの論文のタイトルがほぼ同じタイトルである。もちろん盗用する人物が悪いのは当然だが、一度成功したので二度三度と繰り返し同じジャーナルが狙われたのではないか。この International Journal of Medical Science and Public Health というジャーナル誌はオープンアクセスのオンラインで投稿できるインドのジャーナル誌のようだ。Retraction watch によるとこの雑誌は Thomson Reuters web of science の学術データベースには含まれておらず、認知度もレベルも低いかもしれない。盗用した論文を投稿するにはハードルも低く狙われやすいのかもしれない。
正当化	rationalization
補足	etc
	当人の名前を検索するとインドで医師協会の名簿などで最近のものにも検出されることから現在も医師として活動していると思われる。
	動機など情報が少なく見つけられていない。Retraction watch とジャーナル誌以外の検索では確実に本人かの確定ができる情報がみられない。あくまでインドの整形外科医の Chawda 氏らしき人扱い。
	撤回された論文以外に彼の論文は PubMed の中では 1 件も出てこない。撤回された論文以外に公表されたものがない。他の著者の名前も該当しない。単に論文数を増やしたいとか、論文を執筆しなければいけないというストレスとは、違う場所にいる人か

	もしれない。
	もう一件、盗用したとされる論文を retraction watch のニュースのコメント欄に指摘されている。

9	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	盗用
不正論文数	1 件
不正期間	2008 年 (?)
名前	アンドレマー・ソアレス
経歴	アンドレマー・ソアレス (Andreimar M. Soares) は、ブラジル・サンパウロ大学 (University of São Paulo) ・教授で、専門は薬理学だった。医師ではない。
性別	男
発覚時の年齢	36 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	ブラジル サンパウロ大学 教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	薬理学
生年月日	1973 年 (?)
出身国	ブラジル
概要	キャロリーナ・サンタアナ (Carolina Dalqua Sant' Ana) はソアレス研究室で博士号を取得し、その後、研究員になった。2009 年、前年に発表した「2008 年の Biochem Pharmacol.」博士論文の一部 (画像とテキスト) が盗用ではないかと、サンパウロ大学が調査を始めた。2009 年、サンタアナは解雇された、あるいは単に転職した。2011 年 2 月サンパウロ大学は、論文は盗用で、サンタアナが主犯だったと発表した。ソアレスは解雇され、サンタアナの博士号がはく奪された。ソアレスは研究不正で大学を解雇されたが、オズワルド・クルズ財団・研究員として研究を続け、2016 年現在も活発に研究論文を発表している。研究不正で大学教授を解雇されたのちにも研究を続けられている珍しいケースである。
動機	pressure

機会	opportunity
正当化	rationalization
	これは盗用ではなく私の研究室の元大学院生の画像を代用した悪意のないミスであるとした。(本人)
	解雇処分を不公平な処分だと主張している。(本人)
補足	
	共著の中には薬学部長であった Suely Vilela がいたというのが処分されなかった。しかし論文の中にこの名前は見つからない。
	その後教授は他の研究機関で働いていることから本ケースは処分が重すぎるのではないかという意見もあるが、白楽さんは同意しない(白楽)
	この教授と院生の共著は 11 件あるとしている。(白楽)
	この件に関してはキャロリーナ・サンタアナが主犯とされて博士号を取り消されているが、2 件としてではなく処分された教授の 1 件扱いとしている。

10	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	2 件と 1 件の投稿原稿 ORI により不正と認定されたもの以外に疑惑がもう一件(補足#3)
不正期間	2011?–2016 年
名前	アンドリュー・カリネイン
経歴	アンドリュー・カリネイン (Andrew R Cullinane) は、英国のバーミンガム大学で研究博士号 (PhD) を取得し、2010 年米国・NIH (アメリカ研究公正局) のポスドクになった。専門はヒトゲノム学である。医師ではない。現在アメリカハワード大学医学部の助教授。
性別	男
発覚時の年齢	31 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ NIH の NHGRI (National Human Genome Research Institute) ポスドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	有

研究分野	ヒトゲノム学
生年月日	1985年
出身国	イギリス
概要	2016年8月30日(31歳?)、発覚の経緯は不明だが、研究公正局が調査の結果、ねつ造・改ざんと発表した。不正を監視する立場のNIH(アメリカの研究公正局)に所属した間(2010 - 2016)に発表した3件について不正とされ、それを認めている。今後三年間はU.S. Public Health Service (PHS)助成での研究については監視される。上記三件以外の論文は、今回検証はされていない。Pubmedでは2017年2月現在計26件の論文が検索できる。
動機	pressure
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	不正論文の中の一つは第一著者である。この論文を載せた出版社の編集者はこの論文が修正されることを期待しているとのコメント。(RW)
	もう一つの不正論文は第三著者でもう一件は出版されていないものになる。
	上記ORIによって不正とされたもののほかに現在PubPeerのブログに疑わしい論文として一件掲載されている。
	動機などの参考になるものが見つけられていないが、現在も大学で研究を続けている。
	今回対象になった不正論文の調査はNHIの所属の間のもものだけだが、不正癖は大学時代からあるのではないかという意見もある。(白楽)

11	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	改ざん
不正論文数	2件
不正期間	2006 - 2007年
名前	ラオ・アディバトラ
経歴	ラオ・アディバトラ (Rao M. Adibhatla) は、米国・ウィスコンシン大学マディソン校 (University of Wisconsin-Madison) 助教授で、医師ではない。専門は神経科学(中枢神経系の脂質代謝)だった。

性別	男
発覚時の年齢	52 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ ウィスコンシン大学マディソン校 助教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	神経科学
生年月日	1956 年
出身国	インド
概要	<p>事の発端は NHI (アメリカ国立衛生研究所) からアディバトラ氏の助成に関して疑問があるとの報告を大学が受けたとしている。</p> <p>2008 年 (52 歳?) 頃、不正研究が発覚した。所属のウィスコンシン大学マディソン校が調査に入った。ウィスコンシン大学マディソン校の調査報告を受けて、新たに研究公正局が調査を始めた。</p> <p>2013 年 1 月 25 日 (57 歳?)、研究公正局がアディバトラの論文中のウェスタンブロット画像の改ざんなどの不正を発表した。二件の助成による研究論文と三件の研究費申請書。締め出し期間は標準より 1 年少ない 2 年間で科し、論文の撤回を要求された。終身教授職ではなく、その後の更新時期が迫っていたのもあり、契約の更新はされず大学を去る。</p>
動機	pressure
機会	opportunity
正当化	rationalization
	大学の調査に不服があったのか、アディバトラは新たなメンバーによる外部調査を依頼したが、外部調査も大学の当初の見解を支持。この二つの調査の中でもアディバトラは「決して悪いことはしていない」と主張していたとした。その後の ORI の第三調査も大学の見解を支持し、疑いは晴れなかった。その後本人との罰則の交渉があり、従わざるをえなかったとされる。当初三年だった締め出し期間が一年減らされ二年となる。ORI との交渉後、初めて非を認めたとされる。
補足	etc
	今回の不正はアディバトラ以外の研究室のスタッフは関わっていないとした。
	二つの論文の共著者に同じ人物の名前が一人いる。
	非常に慎重に行われた大学内部調査、その後の ORI との面談などの長い期間の調査を

	経ての結果だが、悪いことはしていないというコメントはあるが、なぜ不正をしたのかという動機にあたるコメントは見つからない。インドからアメリカに来て大学の助教授となり、さらにまだ上を目指す必要があったのか。
	白楽は、研究者生活の後期で初めて不正をすることはないので、長期間、不正をしていたのではないかと主張。

12	
検索入口	FCA(False Claim Act-不正請求防止法 国に代わり不正に受給した行為への訴訟制度)関連からサーチ
不正の種類	改ざん データ相違など
不正論文数	不明：助成金申請書への記入の際、虚偽のデータを用いたり、インフォームドコンセントが欠如したりしている。
不正期間	2004年 -
名前	テキサス大学及びダイアナ・マイルウィッチ
経歴	テキサス大学 Mcgovern Medical school の内科遺伝医学部長。
性別	女
発覚時の年齢	48歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ テキサス大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	内科 心血管
生年月日	1956年12月16日
出身国	アメリカ
概要	このケースは原告であるテリ・キング元準教授が2004年、研究室の教授であるマイルウィッチの研究データに相違を見つけたとして教授に問いただしたことで嫌がらせを受け、中傷された評価を下されたとした。2011年にキングは、マイルウィッチがこれらの研究データと結果を偽造して不正に政府助成金を申請し受け取ったとした。この不正行為を大学側が隠匿し、内部告発したキングを嫌い人事考課の評価も下げられ、降格扱いのポジションに異動となり、のちに解雇されたと主張し、FCAを利用して大学を訴えたが国としてはこの件に関しては介入しないとして退けられた。
動機	pressure

機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	不当に解雇されたのは上司の不正を内部告発したからだとして訴訟が始まったが、却下された。
	内部告発によって政府への不正請求の被害を回収できた際に、回収額の15～30%を内部告発者に報奨金として渡すという、ユニークな制度が定められている（不正請求防止法）。内部告発者が政府のために勤務先を裁判所に訴え、告発者側が勝訴すれば、その勤務先は、不正に受け取った金額の3倍を政府に返す義務を負わされる。1億円の不正請求を法廷で立証できれば、3億円が政府に返され、このうち最高9千万円が内部告発者に払われる計算となる。

13	
検索入口	FCA(False Claim Act-不正請求防止法 国に代わり不正に受給した行為への訴訟制度)関連からサーチ
不正の種類	偽造
不正論文数	11件の助成申請書 論文への言及は現在見つけられていない。
不正期間	1991 - 2007年
名前	ロレイン・グダス
経歴	ワイル・コーネル医科大学の薬学部長。抗がん剤の開発
性別	女
発覚時の年齢	58歳(?)
発覚時の地位 (所属機関と国)	ワイル・コーネル医科大学 薬学部長
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	レチノイド、細胞増殖、肝臓がんや糖尿病など4分野
生年月日	1949年5月12日
出身国	アメリカ
概要	元アドミニ職員タリン・リスニク氏がグダス氏の政府関連助成申請書、1991-2007年の間に申請された11件、総額14億ドルに疑惑をもち大学を訴える(FCA)。Weill

	<p>Medical College は裁判へのこれ以上の不要な時間と経費を避けるため 2.6 億ドルおよび弁護士費用と経費を支払うことで和解。しかしながら今後の政府補助金や保健省庁からの賞の対象外とはならず、同大学の詐欺行為であるとされているリスニク氏の申し立てもこれでは実質解決していない。</p> <p>原告であるリスニク氏は 2002 年の夏に退職するまで約 11 年近くグダス氏のもとで働いていた。上記の訴えには含まれてはいないが、どの研究者がどの助成金に関わっているかを偽っていたり、研究のデータ偽造、すでに助成を受けている研究を何度も再申請したとされている。</p>
動機	pressure
	1991 年からの申請書偽造ということであるが、グダス氏の経歴書によると 1991 年はこの大学で働き始めた年でもある。キャリアの最初からということ、大学が和解でこの件を処理したことなどから、資金集めのための不正が頻繁に起こっていたのか。
機会	opportunity
	コーネル大学にはその他不正疑惑や和解に至った訴訟があり、大学の体質に問題がある可能性。
正当化	rationalization
	大学側の和解後のコメント：申請書への誤りは実施された研究自体の価値やメリットに影響はない。政府の主張した疑いの持たれた申請書や年次報告は研究結果自体の科学倫理や質に関係するものではないと主張。
補足	etc
	グダス氏は今も大学に在職であり、処分はされなかったようである。
	PubMed でグダス氏 (Gudas LJ) の論文を検索してみたが撤回されているものが見当たらない。

14	
検索入口	
不正の種類	利益相反 - ゲルシンガー事件
不正論文数	今回は事前の臨床試験のコンセンツフォームが不適切、その他臨床試験成功後の利益相反があったとされる。論文を PubMed で検索するとたくさん出てくるが撤回されているものは見当たらない。
不正期間	事件は 1999 年
名前	ジェームス・ウィルソン (教授)

経歴	事件当時から現在もペンシルベニア大学の教授。遺伝子導入ベクターの開発及び後天性や遺伝性疾患への取り組み。事件前は遺伝子研究の第一人者とされていて、今でもこの研究分野で活躍中。
性別	男
発覚時の年齢	42 - 3?
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ ペンシルベニア大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	遺伝子
生年月日	1955 年?
出身国	アメリカ
概要	<p>ジェシー・ゲルシンガー氏 (1981-1999) はペンシルベニア大学で行われた、オルニシン欠損症の遺伝子治療の臨床試験 4 日後に死亡した。この病気は通常出生時に致死に至る。しかし彼の場合は遺伝性ではなく、受胎後の遺伝子変異のため、重症ではなく、食事療法と特殊な治療を用いて対応できるとされており、臨床試験はあくまでも研究への協力という意味が大きいとされている。</p> <p>1997 年ウィルソン教授及び他のスタッフと共にオルニシン欠損症への臨床試験を開始した。その後治療の副作用として肝毒性を示した。これにより患者への臨床試験同意書は肝毒性の副作用が出ても治療は継続するという内容に変更された。このため投与量も増え、後続の患者にも副作用が見られた。1999 年、ゲルシンガー君のアンモニア血中濃度はこの臨床試験をするには不適合な値を示していた。その後のゲルシンガー氏の家族から民事訴訟で教授、他二名と大学が訴えられた。捜査ではゲルシンガー氏は試験には不適合でありながらも他の治験者の代わりに選ばれたこと、大学は重篤な副作用を示した患者がいたことの報告を怠ったこと、動物実験の段階で危険な症状が出たことを故意に隠したインフォームドコンセントが行われたこととして結論付けられた。ウィルソン氏は 5 年間の臨床試験参加の禁止処分に同意した。2000 年ゲルシンガー氏の家族へは和解金 (金額非公開) が支払われた。アメリカの司法省とも 2005 年に罰金 51.7 万ドルが大学に課された。</p>
動機	pressure
	当時に今の知識があれば、臨床試験を進めはしなかったとミスを認めている。(本人)
機会	opportunity

	<p>毒性症状を発症した場合は試験を中止するという項目が修正された同意書は FDA（アメリカ食品医薬局）には知らされておらず、その後も継続してこの副作用を発症したため FDA には通常の副作用として虚偽の報告がされた。</p>
正当化	rationalization
	<p>2000 年ゲルシンガー氏の家族へは和解金（金額非公開）が支払われ、アメリカの司法省とも 2005 年に罰金 51.7 万ドルが大学に課されたが、大学はこの臨床試験の不正は認めず合法的に行われたとした。</p>
	<p>世の中は遺伝子研究からは手を引こうとしていたけども、ウィルソン氏は事件後も大学の教授として残り、遺伝子の研究を続けている。</p>
	<p>ゲルシンガー氏の死因の解明から始め、臨床試験を始める前にアデノウイルス（フィラデルフィアに来る臨床以前の治療）に侵されていて、その抗体に投与されたウィルスが反応し急激に症状が悪化したとした。</p>
	<p>アデノウイルスの研究を進められ、2013 年にペンシルベニア大学のリリー・ワン助教授により、OTCD（ゲルシンガー氏の病気）へのより安全でより良い効果が期待される AAV8 が使用された。</p>
	<p>検死結果を父親のいるアリゾナまで届けた時、ゲルシンガー氏の父親は教授に（この臨床試験が産む）利益に関心があったかどうかを問われたが否定した。</p>
補足	etc
	<p>Tadataka Tachi Yamada（山田忠孝氏 現在武田薬品工業取締役）</p> <p>死亡事件のあと、ウィルソン教授に遺伝子研究を続けるように後押ししたとされる人物。事件後、スミスクライン・ビーチャム製薬会社（現グラクソ・スミスクライン）からの遺伝子研究の助成を受ける。山田氏は 1996 年にこの会社の取締役となっており橋渡しをしたと推測する。</p>
	<p>ウィルソンのアデノウイルス研究は今では 32 か国以上の 900 の大学及び 3000 人以上の研究者に非商業として共有されている。</p>
	<p>グラクソスミスクラインの助成から離れて、ウィルソン氏が 5% の株を保有する研究支援のベンチャー会社が 2 つある（2015 年）。</p>
	<p>この件は利益相反として名前が挙がる事件ではあるが、ゲルシンガー事件で正式に利益相反として処分されたとされる文献が発見できない。しかし、ウィルソン氏の告白論文（2009）に、研究者が利益相反での争いに巻き込まれる可能性のある状況に身を置くことに対して忠告をしている。治療法を開発している研究者は臨床試験に関わるべきではないと主張。</p>

	ゲルシンガー氏の父親は今でもウィルソン氏の事をビジネスマインドが最優先された人だと評している。
--	---

15	
検索入口	白楽ロックビル 白楽ブログでのアップ内容は2015年が最新となっており2016年度の経緯は他文献より引用する。
不正の種類	ねつ造
不正論文数	7件 うち6件が手術に関する報告書の内容と発表した論文の内容に差異があるとされている。その他インフォームドコンセントなどの不正や助成申請などもある。
不正期間	上記の6件の論文の発表は2011-2104。
名前	パウロ・マッキアリーニ
経歴	パウロ・マッキアリーニ (Paolo Macchiarini、英語でマチアリーニと発音。日本の新聞はマッキアリーニ) は、スイス生まれ、スウェーデン・カロリンスカ医科大学 (カロリンスカ大学はノーベル生理学・医学賞の選考委員会がある由緒ある大学)・教授 (Professor of Regenerative Medicine)・医師で、カロリンスカ医科大学の ACTREM 所長でもある (ACTREM : Advanced Center for Regenerative Medicine)。英国のユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン (University College London, UCL) の名誉教授。専門は幹細胞・移植外科。2008年6月、患者の幹細胞を使った気管移植手術に世界で最初に成功した。この方法は、医学界に革命を起こすほどインパクトがある治療法だった。それで、パウロ・マッキアリーニは人工気管移植手術の世界的権威となったのである。特許もいくつか取得した。
性別	男
発覚時の年齢	53歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	スウェーデン カロリンスカ医科大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	幹細胞 移植外科
生年月日	1958年8月22日
出身国	イタリア
概要	カロリンスカ医科大学に移籍後、2011年にドナーからの気管ではなく人工的に作られた気管に患者の幹細胞を増殖させた気管を移植する手術が行われた。以降2014年まで

	<p>の間、9件の手術が行われて7人が術後それぞれ時差はあるが死亡。2人の人工気管はドナーからの気管に取り換えられている。</p>
	<p>次々と亡くなっていく患者が研究や手術自体を疑問視、マッキヤリーニの手術成功という詐称、論文への情報隠匿、ねつ造につながった。</p>
	<p>2012年（53歳）、元同僚医師・研究者からマッキヤリーニの研究論文に不正があると訴えられた。大学側は外部の調査委員会に依頼し、大学側に提出された医療記録と報告された内容を比較して疑惑の調査を始めた。結果は、2015年5月に発表され、マッキヤリーニが研究の不正を犯したことを示し、見直された7件の論文のうち6件で彼の手術業績の成果を過大に誇張していたとした。カロリンスカ医科大学の副学長はマッキヤリーニからの反論も考慮して、不正の申し立てを却下し擁護した。この論文が出された出版社の The Lancet もマッキヤリーニを擁護する記事を発表した。</p> <p>このスキャンダルが広く注目されてようやく、The Lancet もスウェーデン王立科学アカデミーからの手紙を記載して、調査官の Bengt Gerdin の報告を繰り返した。調査で明らかになった結果から、スウェーデンのMPA（医療製品代理店）と保健社会福祉省は、スウェーデンで実施された3つの手術の費用を押収することを決めた。まだ調査中の段階ではあるが、マッキヤリーニに対する告発は、殺人と傷害であるとしている。カロリンスカ大学が当初調査のために外部から招へいされたウプサラ大学の名誉教授である Bengt Gerdin は、スウェーデンテレビのインタビューでカロリンスカ大学の副学長の擁護を非難した。カロリンスカ大学の学長及びスウェーデン医学協会の会長らにより、この問題に取り組んだ大学への調査がされた。</p>
	<p>不正とされる動物への臨床実験が終わっていない手術であるという事を事前に患者に知らせていなかった。スウェーデンで行われた三件の手術に関してこのインフォームドコンセントが二件実施されていなかった。あとの一件も術後に同意書にサインされたとなっている。</p>
	<p>カロリンスカ大学で行われた移植手術3件に対して、スウェーデン医療審議会長は新しい手術への科学的根拠は弱く、患者への手術前のリスク分析実行を怠り、および必要な倫理承認を得なかったとした調査結果を発表した。</p>
	<p>マッキヤリーニを大学に招へいした Urban Lendahl、擁護した副学長はのちに辞任。マッキヤリーニは不正と告発された後、2013年と2015年の任期は更新されたが、2016年11月以後の任期は更新されなかった。</p>
	<p>2016年に学長であった Lars Leijonborg もマッキヤリーニの件を機に大学の環境を新しくしたいとの理由で、任期をまたず退任した。</p>

	政府によりこの一件に関わったカロリンスカ大学委員会のほぼ全員がそれぞれの役職を解かれるという結末を迎えた。
動機	pressure
	2010年に病院に来た時にはすでに再生医療でのリーダーであり最先端技術を試してみたかった。
	研究成果を医療現場で早く出さなければいけないというプレッシャーがこの由緒ある大学とその病院にはあった。
	この先端技術を行使する医師は技術に固執し、患者への突発的に起こるリスクに対応していないということであり、大学はリクルートの段階で彼の医師としての判断力の問題よりもスタードクターという地位を重要視してしまった。
	臨床試験前の人工気管移植に関する研究は十分にされていたが、一人目の患者の時はまだ試験されていない段階だった。(本人) とのことから手術を先急いだ。
機会	opportunity
	生きるか死ぬか一刻を争う状況の患者と一か八か最先端技術を試したい医師の意思が合致した。
	再生医療は技術の最先端であり、科学の基礎である手法に対して周りが反論するだけの力を持っていなかった。
	一人目の手術のあと、論文への患者の術後良好の記事はその後の試験対象の移植手術を推し進める結果となる。
正当化	rationalization
	論文作成中にいくつかのミスをしてしまったことは認めているが意図的ではない。(本人)
	時間がなく大型動物実験はしなかったと認めた。手術資材が承認を受けてすべての準備が整っていったからだとした。(本人)
	一人目の患者の手術を実行するにあたり、救いたかった。若者が亡くなるのをただ放っておけないという気持ちに基づいているとした。(本人)
	倫理委員会に通していればこれらの手術は却下されていたであろうという報告に対して、倫理委員会への申請の落ち度は病院側にあると反論した。(本人)
	試験への判断力や事務的手続きがこの悲運な出来事を起こしてしまったことへの批判はあるだろうが、これらの患者に関わったすべての者はベストを尽くしたということ。(本人)
補足	etc

	手術をする判断に関わったのは一人ではなく、多様な会議も関わっている。術前術後を含めると専門スタッフは30人以上になる。
	ストックホルムの検察が三件の手術に対する殺人と傷害で起訴するかの調査がされている。
	政府機関である厚生保健省庁からの訴えで二件については警察の捜査対象とされている。
	2017年3月 Kazan Federal University はマキャリーニへの助成資金を打ち切りにした。

16	
検索入口	日本学術振興会 科学研究費補助金に係る研究活動の不正処分リストより
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	19件
不正期間	1997-2011年
名前	岡嶋研二
経歴	1978年、熊本大学医学部卒業。1982年、熊本大学大学院医学研究科修了（医学博士取得）。 その後、日本学術振興会特定国派遣研究員としてウィーン大学医学部への留学、熊本大学医学部助教授、そして名古屋市立大学大学院医学研究科教授を経て、2012年4月より、名古屋 Kクリニックを開院し、院長に就任。
性別	男
発覚時の年齢	57 発覚時
発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 名古屋市立大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	ストレス学、血液凝固線溶学、臨床検査医学
生年月日	1954年（2012年3月解雇時に58歳）
出身国	日本
概要	平成23年3月、名古屋市立大学及び熊本大学に、複数の研究者の研究活動において、画像の流用及び改ざん等が疑われるという申立書が提出された。これを受け、両大学は調査委員会を設置し、協力しながら調査を行った結果、指摘のあった17編の論文

	<p>のうち15編において、画像の流用及び改ざんが認められた。加えて指摘されていない4編においても改ざんが確認された。これら19編の論文における不正行為には、すべての論文において責任著者であった岡嶋元教授の他、複数の研究者が関与していた。また、被申立者1名が、画像の流用及び改ざん等を指摘された論文作成時に大分大学に所属していたため、大分大学においても調査が行われたが、不正は認定されなかった。</p> <p>名古屋市立大学の調査において、岡嶋元教授が責任著者である論文8編（内6編の筆頭著者が原田元准教授であり、残る2編は当時の学生が筆頭著者であった。）について、他の論文からのデータの流用またはねつ造及び改ざんが認められた。岡嶋元教授が名古屋市立大学に異動前に助教授として在籍していた熊本大学の調査においても、岡嶋元教授が責任著者である論文10編（筆頭著者は全て当時の学生）について、データの流用またはねつ造及び改ざんが認められた。岡嶋元教授が不正行為に直接関与した証拠は見つからなかったが、不正論文全てに関与しているのは岡嶋元教授だけであること、さらに岡嶋元教授が責任著者である論文に同一の写真を使うことなどから、不正行為に気付いていないとは考えられないと判断した。</p>
動機	pressure
	<p>自分が筆頭著書でない論文へは無関心であって、倫理意識が薄まり、杜撰な対応をした可能性がある。岡嶋氏は熊本大学より長年原田氏との上司であり、今回の不正対象になった論文のすべての責任著者でもある。名古屋大で調査された論文の筆頭著者は原田氏。それ以前の熊本での論文の筆頭著者はすべて学生とされている。</p>
	<p>名古屋市立大学在籍期間中、銀座の育毛クリニックの外来医師も担当。論文でのデータ結果が宣伝に使っていた。大学退職直後に自身の育毛クリニックを名古屋に開業している。</p>
機会	opportunity
	<p>二人とも認めてはいないが、強固の師弟関係が不正の機会を安定したものにしていただけではないか。原田氏の「機会」も参照。</p>
正当化	rationalization
	<p>本人は最後まで不正のことは知らないとしている。</p>
	<p>知っていたかどうかに関する明白な証拠が見つからなかったようだが、大学側は知らなかったことであっても多数の論文の責任著者としての責任を迫及した。</p>
補足	etc
	<p>責任著書が責任を取らなくてもよいなら意味がない。自身の責任監督下で起こった、</p>

	自分が責任著書である論文が不正疑惑になっているにも関わらず、知らないと言えるならなぜ責任著書になったのか。
	上司である岡嶋氏の不正指示がなく部下である原田氏が単独で不正を主導できるのか。報告も岡嶋氏の直接関与が認められなかった。
	岡嶋氏も原田氏もカプサイシンの研究で有名。育毛などの書籍の執筆やサプリ商品開発（製造元は熊本の会社）などにも関わっていて現在も関わっている。
	現在も上記の会社の育毛広告に研究成果を PR している。 http://www.cosdemysshop.com/store/lp/a8/001/hg/pv/1/

17	
検索入口	引用元 日本学術振興会 科学研究費補助金に係る研究活動の不正処分リストより
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	9 件
不正期間	1997-2011 年
名前	原田 直明
経歴	1992 年、福岡大学医学部卒業。1992 年福岡大学病院救命救急センター勤務。 2003 年、ルードヴィッヒボルツマン研究所（ウィーン市）へ留学。 2007 年、名古屋市立大学大学院医学研究科准教授。
性別	男
発覚時の年齢	44 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 名古屋市立大学 准教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	不明
研究分野	血液学
生年月日	1969 年 (?) 2013 年 3 月解雇時点で 44 歳とされる。
出身国	日本
概要	平成 23 年 3 月、名古屋市立大学及び熊本大学に、複数の研究者の研究活動において、画像の流用及び改ざん等が疑われるという申立書が提出された。これを受け、両大学は調査委員会を設置し、協力しながら調査を行った結果、指摘のあった 17 編の論文のうち 15 編において、画像の流用及び改ざんが認められた。加えて指摘されていない 4 編においても改ざんが確認された。これら 19 編の論文における不正行為に

	<p>は、すべての論文において責任著者であった岡嶋元教授の他、複数の研究者が関与していた。また、被申立者1名が、画像の流用及び改ざん等を指摘された論文作成時に大分大学に所属していたため、大分大学においても調査が行われたが、不正は認定されなかった。</p> <p>名古屋市立大学の調査で、原田氏は名古屋市立大学在籍中に9編（責任著者は全て岡嶋元教授）29項目でねつ造及び改ざんを行っていたと判断された。大学側から懲戒解雇処分相当が出る前に辞職。</p>
動機	pressure
	間違って投稿してしまったとしている。(本人)
	原田氏は常に岡嶋氏の部下的ポジションである。最初の頃は学生の学位論文を手伝った不正だったのが、名古屋市立大で准教授となり、責任著者は岡嶋氏であるが自身が筆頭著者である論文も多くなっている。もう不正行為にお伺いを立てることもなく認めてくれている人がいるので安心して主導していたのかもしれない。
機会	opportunity
	原田氏は名古屋市立大学にくる前の熊本大学で同じ研究室となり、岡嶋氏との共著がどちらの大学でも多数ある。
正当化	rationalization
	国際会議のプレゼン作成中、実際の実験データが出るまでの間、仮に置いたデータを実データと置き換え忘れたまま論文を出版した。(本人)
補足	etc

18	
検索入口	黒木登志夫氏の不正研究論文の論文撤回ワースト10のリストより
不正の種類	ねつ造
不正論文数	183件 上記の黒木氏より。麻酔学会の調査では172件。
不正期間	1993 - 2011年
名前	藤井 善隆
経歴	
性別	男
発覚時の年齢	40歳?(最初の2000年の発表時)
発覚時の地位	日本 筑波大学 講師 2005年以降東邦大学 准教授

(所属機関と国)	
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	麻酔学 手術後の吐き気や嘔吐
生年月日	1960年4月19日
出身国	日本
概要	史上最も多い論文撤回数 183 を記録した。
動機	pressure
	共著者たちは大人数であるが、そのうち三名は特に多数にわたり著者になっている者の業績目的の名義貸しなどが横行。
	論文業績を多方面に利用していたとされている。
機会	opportunity
	2000年にあった論文不正の疑惑の難を逃れたことを意識してか、麻酔学での論文公表は2000年半ばにやめ、眼科学や耳鼻咽喉学にシフトして目立たなくしていった不正を続行していたとされている。
	不正はほぼ単独でされている。その他、単独で行えた理由としてデータを所属機関以外で取ったものと偽り、共著者をたて、共同研究と見せかけて発表した。
	共著者は無関心な人やクレームをつけない人を選択している。
正当化	rationalization
	麻酔学会が行った本人への面接調査が二度行われ、ねつ造はしていないなどの言い訳などが記されている。
	数ある言い訳の中でも、東邦大学を解雇された理由になっている臨床研究の倫理審査の承認を受けていないことにも病院長と口約束があったとしている。
補足	etc
	大学からの処分は不正によるものではなく、大学の在籍中に発表された論文8件の研究は倫理委員会の承認を得ていないとして規約違反とし、論旨退職処分とした。本人はこの事実を認め、論文を撤回。その後、麻酔学会の大規模な不正調査によりねつ造172件と認定された。
	不正論文調査で、藤井氏が報告通りの臨床実験が可能な状態であったかどうかなどが調査される事態で、まるで小説を書くように論文研究を作成したと報告された。200近くの論文不正に対し、罪悪感の欠如というよりもねつ造して論文を書くことに楽しさがあったのか。

	約 40 編近くで共著者となっている斎藤祐司氏も日本麻酔学会より永久追放された。
--	--

19	
検索入口	黒木登志夫氏の不正研究論文の論文撤回ワースト 10 のリストより
不正の種類	ねつ造 データ改ざん及び未承認臨床試験など
不正論文数	96 件
不正期間	1991 - 2011 年
名前	ヨアヒム・ボルト
経歴	<p>ヨハヒム・ボルト (Jochim Boldt) は、ドイツのギーセン大学・教授、シュタット・ルート</p> <p>ヴィヒスハーフェン病院 (Klinikum Ludwigshafen) ・主任麻酔科医で、人工血漿、静脈内輸液のカリスマ専門家として世界的に高い評価を得ていた。手術中に血液量を増やすための輸液コロイド(HES:ヒドロキシエチルでんぷん液)の使用を推奨していた。</p> <p>ところが、2010 年、治験審査委員会に未承認の研究実施、データねつ造論文で有罪と立証され、ギーセン大学・教授を解雇された。1999 年以降に発表した 102 論文の内、88 報が論文撤回となった。</p>
	2015 年の Retraction Watch によると 94 件の論文撤回となっている。
性別	男
発覚時の年齢	56 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	ドイツ ギーセン大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	不明
研究分野	麻酔
生年月日	1954 年 9 月 29 日
出身国	ドイツ
概要	<p>白楽の概要をもとにしているが、相違点はイギリスの医学雑誌 BMJ の記事を引用。</p> <p>2009 年 12 月 4 日 学術誌『Anesthesia & Analgesia』(麻酔と無痛覚) にボルトの論文が出版された。</p> <p>2009 年 12 月 18 日 論文読者から学術誌『Anesthesia & Analgesia』(麻酔と無痛覚) の編集長スティーブン・シェーファー(米国・スタンフォード大学・麻酔学教授) (Steven</p>

	<p>Shafer - Wikipedia, the free encyclopedia) に公益通報の電子メールが届いた。電子メールには「結果は異常にきれいすぎる。血液凝固への効果などは“魔法”だ」とあった。ボルト本人に電話やメールでコンタクトしたが、返事がなかったため 2010 年 5 月、Landesarztekammer Rheinland-Pfalz の医学協会が調査に賛同した。同年 10 月、倫理規範に違反があるとした。倫理委員会の承認を得ていない研究とされた。その後病院との共同調査で論文の公正調査に着手し、患者データやラボデータがないとし、研究自体が行われていた証拠がないとした。その後数回の調査を経て、2012 年 8 月、91 件の論文に対して不完全であり記録が消失しており、10 か所のデータは患者数やデータ収集方法の相違などから不正とした。不治療者からの承諾書を取得していない、および倫理委員会の承認も得ていないなどとして、倫理違反として論文撤回要請を出した。なお、これらの治療者 455 人に死亡例は出ていないとした。</p> <p>治療者に死亡はないが、2 名に副作用の症状を記している。</p>
動機	pressure
	2010 年の調査のあとボルト氏は共著者のサインを偽造したことは認めたとされている。
	明確な動機は不明とされているが、利益供与ではなく、著名な麻酔医としての論文発表のプレッシャーではないかと調査委員の一人は述べている。
	ジャーナル誌の編集者は虚栄心であり、自身の影響力を高めるためであるとしている。
機会	opportunity
	ジャーナル誌に論文を発表してすぐに読者の手紙から発生した不正に対して、ボルト氏の初期対応は沈黙であり、反論している文献はまだ見つかっていないが、著名であることから倫理委員会の承認を得ずに論文を発表しても異論や違反と意義を唱える人がいなかった本人にとって自由な環境だったのか。
	多数の論文を発表しており、月に一本くらいのペースとされている。内容もあまりインパクト大きいものではなく、小規模な研究で興味を引く発見なども含まれており、評価されている麻酔医との共著ばかりで、非常に効率的であったようであるとされている。そのため疑いの目をあまり向けられることがなかったのかもしれない。
正当化	rationalization
補足	etc
	ボイド氏の研究で奨励しているコロイドはクリスタロイドと長年比較対象とされてきている。白楽氏の文献の中で製薬会社からの寄付の話が出ているが、リンク切れとなっており原文は未確認だが、利益相反の疑いもある。

	ボイド氏の出したコロイドのデータを差し引くと、ただの高価で危険なものとして使用中止を求める声もある。
	調査委員会の報告をもとに犯罪捜査として現在調査中とのこと。ボルト氏はドイツを離れ、チェコで麻酔医として働いているのではないかと噂されている。

20	
検索入口	黒木登志夫氏の不正研究論文の論文撤回ワースト 10 のリストより
不正の種類	査読偽装 特定不正行為外
不正論文数	35 件の撤回論文。2012 年 9 月の時点。
不正期間	2005 - 2012 年
名前	ヒョンイン・ムン
経歴	ヒョンイン・ムン（英語：Hyung-In Moon、ハングル：문형인）は、韓国・釜山の私立大学・東亜大学校（Dong-A University）・教授（韓国では、大学を「大学校」と呼ぶ）。所属は、資源科学生命科学部・医薬品バイオテクノロジー学科（College of Natural Resources and Life Science、Department of Medicinal Biotechnology）。韓国・成均館大学校（Sungkyunkwan University：SKKU）で薬学博士号を取得し、専門は薬学である。2012 年、自分が投稿した論文の査読を、別人を装って彼自身が行なう査読偽装が発覚した。最も古い撤回論文は 2005 年の論文である。
性別	男
発覚時の年齢	38 歳 2012 年
発覚時の地位 （所属機関と国）	韓国 東亜大学校（Dong-A University）教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	薬学
生年月日	1974 年？
出身国	韓国
概要	査読偽装。査読するにはかなりの労力がかかるが、24 時間以内で終わらせるということで目立ってしまい、疑惑を抱いたジャーナル誌の編集者がムン氏に問い合わせところあっさりとして自分で査読したことを認めた。著者が査読者を推薦できるので、自身の

	フリーアドレスを著名な査読者のアドレスと偽装し、自分で査読していたとされる。
動機	pressure
	動機の一つとして、中国の Guang-Zhi He が偽メールアドレスを使った査読偽装をまねたのではないかとされている。本物の査読者がする場合と同じように、論文出版に賛成するだけでなく、必ず多少の論文修正要というコメントにしている。しかしこれほど早い査読は不可能である。
	これ以前にも自身で間違いだとして撤回されている論文が 7 件ある。そのうちの論文に名前を使われ、研究場所になっているミシシッピ大学の Avery 氏によると、氏の下で何年もポストクをしていたこの論文の責任著者の Jung 氏を訪ねてモン氏が現れ、二人で韓国に帰った後、大学で行ったとされる研究を勝手に発表したようだと証言している。留学と帰国後の間の研究への監視が曖昧になっている。
機会	opportunity
	著者が査読する人を推薦できるというシステムの脆弱点を利用した、倫理欠如。
正当化	rationalization
	モン氏は友人や同僚を査読者に挙げたことを認めている。しかし査読者の身元をチェックしない雑誌社の落ち度もあるとして、自己の行為を正当化している。(本人)
	自身の落ち度ではないが査読の信用性がないと読者からも信用が得られないという理由で論文撤回に合意したとしている。(本人)
補足	etc
	査読偽装は例え論文が公正であっても撤回されてしまう。この件を契機に調べられた結果、台湾のピーター・チェン氏の名前が挙げた。(彼も論文撤回リストワースト 10 に名を連ねる) 60 の論文において共著者にも査読者にもなっているとして、調査された論文はすべて撤回された。
	査読システムのスクリーニングにも問題があるとしているが、査読推薦者に、自身の同僚や指導するポストク院生、ミドルネームや旧姓などを使ってくる者もいる。
	撤回ワーストのリスト者は、論文が査読審査の目をくぐりぬける道を一度見つけると不正を継続し続ける傾向があるのか。

21	
検索入口	黒木登志夫氏の不正研究論文の論文撤回ワースト 10 のリストより
	Retraction Watch ワースト 30 のリスト者
	juuichi jigen 研究不正ブロガーであり、今回の森氏への不正調査依頼を各大学や文科

	省に正式に申請にした人物
不正の種類	ねつ造
不正論文数	38 件 2013 年の外部調査の不正と認定された件数。撤回数は下記 #7 参照。
不正期間	2000 - 2009 年 最初の大学の調査対象は 2000 年以降、平成 23 年発表の外部調査は 2002 年以降の論文となっている。
名前	森 直樹
経歴	琉球大学大学院医学研究科 微生物学・腫瘍学講座教授。
性別	男
発覚時の年齢	
発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 琉球大学大学院医学研究科 微生物学・腫瘍学講座教授。
医師免許の有無	
博士号の有無	
研究分野	ウイルス学、血液内科学 細胞生物学
生年月日	
出身国	日本
概要	2010 年アメリカのジャーナル誌に載った森氏の論文に明らかな不正疑惑があるとして、大学側に調査を申請し 2000-2009 年の論文が調査された。調査の結果は不正、大学側は解雇処分とした。
	2010 年の大学側の調査結果を受け American Society for Microbiology (ASM) は森氏へ 10 年間の論文投稿禁止処分とした。
	これらの研究の中には科研費で行われた研究もあるとされているが、処分は出ていないようだ。
	2012 年 11 月、琉球大学移籍前に森氏が在籍していた長崎大学は、在籍中に発表した論文 8 件 (1999-2002) に対して不正と認定した。これを受けての追加の処分はなし。処分は琉球大学からの停職処分とアメリカでの投稿もしくは査読禁止処分のみで、科研費関連機関などは処分をしていない。これに申し立てをしているのが上記の不正告発ブロガー。
	Retraction Watch によると現在の撤回数は 32 で第 11 位とされている。日本のブロガーは 40 くらいを疑っている。
動機	pressure
	研究課題の業績に使っていた。森氏本人および、現琉球大学学長の岩政氏。(juuichi

	jigen ブログ)
	Helicobacter pylori に関する論文では共著者に製薬会社所属の者の名前が含まれているとされ、会社からの助成があったのかもしれないともされている。
機会	opportunity
	疑惑の論文のうち 4 件は院生の博士論文とされている。通常、撤回の時点で博士号もはく奪となるが、和解後に博士号を維持することが決まった。これらのうちの一つの論文では賞ももらっているようだ。(2009 年発表 2011 年撤回)。不正の結果、賞までもらったため、誰にも気づかれないという自信をつけてしまった可能性がある。
	正当化と重なるが、共著者とは名義貸し的な存在であり、名の通りの責任著者としての責任はたらい回しにできる雰囲気があったのか。
正当化	rationalization
	2010 年に大学より解雇処分を受けたが、翌年の裁判で和解。停職処分 10 か月になり、原職復帰、論文も執筆している。この時の証言で自身の正当化を下記のように述べている。1) 実験は再現可能であり、ねつ造にはあたらない。2) データ流用とされたのはただの引用元明示の失念である。3) 共著者から研究実験への参加について同意を得ており、改めて論文作成に共著者となる確認・同意を取ることはしないことはよくあること。4) 過去の不正事件の処分比較で自身の解雇は不当だとしている。
	結局はこれらの言い訳が認められた形となり停職処分 10 か月になり現在原職復帰している。
補足	etc
	これらの和解には学長自身が不正疑惑論文の共著者であることで、大いに甘い処分にしたと指摘されている。
	学長は岩政輝男氏。熊本大学医学部卒。
	2017 年 6 月に文科省より本件の不正行為に対する最終報告書がアップされている。不正認定は 41 件とされ、科研費などの返還処置や該当教授への処分、発生要因などが解析されている。

22	
検索入口	白楽ロックビル 特殊な分類から 白楽の記事は 2015 年まで
不正の種類	ねつ造・横領
不正論文数	6 件 (撤回数)
不正期間	2002 - 2012 年 最初の博士論文からすべてとなると 2002 年から 10 年以上が不正論

	文の対象となっている。
名前	ミレーナ・ペンコーワ
経歴	ミレーナ・ペンコーワ Milena Penkowa (神経科学)は、2009年に35歳でコペンハーゲン大学の正教授に就任した。若く美人のデンマークの「イケジョ（医系女子）の星」だった。約100報の査読論文を発表し、デンマーク科学技術イノベーション大臣から称賛され、巨額の研究費を得ていた。真っ赤な高級車に乗り、テレビ、大衆向け雑誌、ラジオにたびたび登場した有名人だった。ところが、2010年(36歳)に不正研究(データねつ造)が発覚し、本人は否定しつつも大学を辞職した(37歳)。デンマークのマスメディアが過熱報道したデンマークの小保方晴子事件である。
性別	女
発覚時の年齢	36歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	デンマーク コペンハーゲン大学 教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	神経科学
生年月日	1973年
出身国	デンマーク
概要	最初の不正疑惑は2002年の博士論文にペンコーワは1,700匹のラットで実験したと主張したが、その数値を不正と判断したコペンハーゲン大学博士論文審査会は博士論文を却下した。コペンハーゲン大学・健康医学部長ラルフ・ヘミングセン (Ralf Hemmingsen) が仲裁に入り、外部の2人の審査委員(ノルウェー人とスウェーデン人)の意見を求めた。外部審査員は博士論文審査会の結論に批判的で、ペンコーワの研究に明確な不正の証拠はないとした。ペンコーワは、「私はこれらの実験動物に関係した必要な情報、研究事実、研究記録を提供しました。そこには非難されるようなことは全くありませんでしたし、今でもありません」と述べている。2004年、ペンコーワは、別の博士論文審査会に博士論文を提出した。今度は、最初の論文に記載したたくさんラットの実験を書かなかった。この時、提出期限を過ぎていたが、母と姉が自動車事故で亡くなり、その対応に忙殺され遅れたと、ウソの言い訳をしている。2005年(31歳)、別の博士論文審査会は全委員一致で、ペンコーワに博士号を授与すべきと判定した。2007年(33歳)、デンマークの週刊誌「Weekendavisen」によれば、ペンコーワの同僚・エリザベス・ボック (Elisabeth Bock)は、ボックの研究室の大学院

生たちがペンコーワの結果を追試できないと学内委員会に訴えた。2008年、学内委員会は、両者の矛盾点を調査し、ペンコーワは潔白だと結論した。

ペンコーワは、「ボックの大学院生は、別の実験室、異なる手法で実験しているので、私たちの結果と全く同じでなくても不思議ではありません。ボックの大学院生たちが研究の追試に必要ななら、自分の実験室を利用してよいと申し出ました」と述べている。

2010年7月に「*Journal of Clinical Oncology*」に投稿した論文原稿に問題が発生した。

週刊誌「*Weekendavisen*」によれば、ペンコーワ研究室の2人の大学院生が、投稿論文

中のリンパ腫患者の組織タンパク質の記載データが自分たちの実験データと合わない

と、神経科学・薬物学科長のアルバート・ギェデ (Albert Gjedde) に訴えた。ペンコーワは、「論文中の結果はそれらの大学院生が行なった実験の後に行なった実験だ」と述べている。なお、その論文原稿はいまだに印刷・公表されていない。また、560

万クローネの研究助成金の一部を不正流用したことも発覚した。2010年12月(37歳)、ペンコーワは、研究不正、研究費不正を否定しつつも、教授職を辞職した。コペンハーゲン大学は200万クローネを助成機関に返還した。2012年7月23日、5人の研究者からなるコペンハーゲン大学の国際調査委員会が、「綿密に仕組まれた不正研究(慎重な研究過誤)の疑念がペンコーワの15論文に見つかった」という最終調査結果を公表した(2012年最終調査結果、50ページ。「*Investigation into the research of Milena Penkowa*」)。

コペンハーゲン大学は、この15論文の評価をデンマーク学術不正委員会 (Danish Committees on Scientific Dishonesty) に依頼した。

ペンコーワは、「人間は誰も完璧ではありません。私も例外ではありません。私が1993年に研究所で働き始めてから、予見できない間違いはしていたかもしれません。それについては、私は深く謝罪します。しかし、「慎重な研究過誤」は別です。私は決して「慎重な研究過誤」を行なっておりません。私の研究が詐欺だと、最近、マスコミが報道していますが、私は、私の研究が詐欺だと推論するのは非合理的で、妥当だとは思いません」と述べている。

2013年、デンマーク学術不正委員会 (Danish Committees on Scientific Dishonesty) はペンコーワが不正研究をしたと結論した。同時にペンコーワと共著で論文を発表していたベンテ・クラールンド・ペダーセン教授 (Bente Klarlund Pedersen) も不正研究で有罪とした。ペンコーワの不正研究を検出できなかったこととペンコーワの不正画像操作に対処できなかったのが有罪の理由である。(ここまでの文章は白楽のサイトから引用。リンクはこの文章内容の引用先となっている文献)



	2015年2月18日、デンマーク裁判所は、有罪の結論をひっくり返し、ペダーセン教授を無罪とした。
	2016年9月8日、デンマーク高等裁判所はペンコーワ氏の懲役9か月、執行猶予2年の判決を却下した。ペンコーワ氏の不正は認めつつも重大でないとの理由。
動機	pressure
機会	opportunity
	ペンコーワ氏の擁護者として、親密な関係が噂されている当時の大学総長やデンマークの科学技術省の大臣などの擁護があったとうわさされている。
正当化	rationalization
	大学からの停職処分を受けた時に辞職したが、理由は不正を認めたわけではなく研究に集中するため。そして自身の研究に対する疑惑に対応する静かな環境が必要だとした。
	博士論文疑惑の際に、ペンコーワ氏はすべての研究資料は提出したとした。
	同僚の Bock 氏の研究室の生徒がペンコーワ氏の研究を再現できないとして訴えたが、違うラボで同じ環境でないためと主張、のちにこの訴えも退けられ、反対にペンコーワ氏が研究再現に自身のラボを提供してもよいと発言。
補足	etc
	2012年の外部団体による不正調査は約100のペンコーワ氏の論文すべてが対象とされたけども、膨大な量の研究資料により、事前に選択した論文に集中して調査したと報告もしている。
	外部調査の中で、膨大な量の研究資料はある意味、研究に費やされた努力を表すものともとれ、外部との共同研究の中には疑いのない研究もあることがうかがえる。しかしながら、見つからない資料に対して、なぜ見つからないのかが説明できないものもある。ラットの購入領収書しかみつかっていない。
	2010年12月、最初の博士論文の評価委員を務めた同大学教授以下58人のデンマーク科学者から大学へ、ペンコーワ氏の不正疑惑についてさらに調査をするように要請がある（のちに大学はすでに外部団体が調査しているということで却下）。
	2010年に大学を辞めてからは、ドッグセラピーの研究などコンサルタントや講演など行っている。
	2017年には論文活動も開始して、共著者もいる。長い抑留から解放された気分だと語っている。
	最初の博士論文の不正疑惑から約10年もかかって不正の有罪判決がでた。そして最終

	<p>的には重大な不正ではないとして懲役刑は却下。この 10 年間に何度も議論や調査がなされている。最初の論文は明らかな問題があったとしても、いくら擁護されていたとしても常に疑惑の目を向けられての研究でずっと不正は続けられるのか。必要以上の厳しい目が向けられていた中にやっかみなどはあったのか。論文は 100 以上発表され、そのうち撤回が 6 件。6 パーセントの不正なのか 6 パーセントの間違いなのか、本人は不正を認めていない。</p>
	<p>動機と思われる文献が見つけれられていないが、博士論文から不正が疑われていたにも関わらず、10 年余りコペンハーゲン大学でスター的な存在でもあった。決して屈せず、自分を押し通すことができる強い性格の持ち主である。</p>

23	
検索入口	白楽ロックビル 林正男氏 は当時アメリカの研究室に在籍、日本に最初にこのニュースを報道したとしている。
	事件のコーネル大学の研究室の不正を指摘した Vogt 氏の回録
不正の種類	ねつ造・経歴詐称
不正論文数	研究室在学中に教授と共著で 6 件の論文があるが撤回は 1 件のみ。他の文献を読むと撤回を申請しているとなっているが現在は 1 件。
不正期間	1980-1981 年
名前	マーク・スペクター
経歴	マーク・スペクター (Mark Spector) は米国・コーネル大学の大学院生。専門は、がんの生化学・細胞生物学。コーネル大学の院生として迎えられたが、その前の大学での修士論文も不正だったとされている。
性別	男
発覚時の年齢	24 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ コーネル大学 院生
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	生化学
生年月日	1956 年 (?) 1980 年時 24 歳とされている。
出身国	アメリカ
概要	コーネル大学の大学院生マーク・スペクター (Mark Spector) は、ガン発生のメカニ

	ズムについて新発見をしたと発表。指導教授エフレイン・ラッカー (Efraim Racker) の指導の下スペクターは次から次へと成果を挙げたものの、実験データの不自然さと追試が成功しなかったことから実験データの捏造が発覚。論文が撤回されたばかりか経歴詐称までも判明し、スペクターは退学処分となった。
動機	pressure
	論文不正だけでなく経歴詐称でその後の人生のすべてが騙しを生業にする詐欺のようだが、周りのプロフェッショナルを欺くことができる天才。指導教授の信じる仮説を見事に実証して信頼を勝ち取った。天国から地獄へ突き落された事件発覚後、この教授はその後スペクター氏の発見の再現を試みたようである。とりえず長い間解明されなかった教授の仮説を解いて教授を喜ばせたかったのか。
機会	opportunity
	手先が器用であり、研究室にきてからすぐに実験手法を覚えて周りの信用をすぐ得たこと。
正当化	rationalization
	疑惑になっている点については説明できない。不正はしておらず、研究の成果が再現され、自分が発見したことが正しいと証明されると信じていると語った。
補足	etc
	論文不正によって得た名声は経歴詐称にもなっているが、当時第一人者として有名だった教授の研究室で皆を欺くだけの素晴らしい能力があったことに驚く。普通の人が若き天才科学者にはなりきれない。その後周りから優秀とされる医師として働いていたという。こちらも医師免許は偽造だったらしい。
	この不正はプロの詐欺師のようなものであり、最初から仕組まれたものであり、研究途中でデータをよく見せるための不正行為とは全く異質なものである。
	残されたスペクター氏のノートから不正の正体として安価で手に入れることのできるタンパク質の購入記録が見つかった。

24	
検索入口	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	下記の不正案件に関する論文が 2 件あるようだが、撤回にはなっていない。
不正期間	1967 - 1974 年？ 研究所に移籍した 1973 年の 6 年前から移植の拒絶反応の研究をしていたとされる。

名前	ウィリアム・サマリン
経歴	米国・スローン・ケタリング記念癌研究所の研究者・医師である。専門は免疫学で皮膚移植の研究を行っていた。
性別	男
発覚時の年齢	36歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ スローン・ケタリング
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	免疫学
生年月日	1938年
出身国	アメリカ
概要	サマリン事件とは、1974年、ニューヨークのスローン・ケタリング記念癌研究所で勤務するウィリアム・サマリン（William Summerlin、博士）が、自分が行なっている遺伝的に関係のない組織を特別に培養させたあと移植すると免疫反応を防ぐというに仮説に基づいて行っていた白マウスと黒マウスの皮膚移植の実験が上手く進んでいないにもかかわらず、白いネズミの体の一部を黒色のマーカーペンで塗り、あたかも黒い皮膚の移植がされ、それが成功したかのように見せかけたこと、およびそれが発覚し事件となった。指導教授は当時免疫学で著名なロバート・グッド氏でスローン・ケタリングに移動になるミネソタ大学の時からの共同研究であった。
動機	presuure
	不正発覚はサマリンの定説（ドナーから提供された器官を移植する前にある期間組織培養すると移植手術で起こる免疫反応を防ぐことができる）が再現できないという苦情が内外部から上がった。そしてこの件の弁明のために実験中のマウスを持って上司であるグッド氏との面談に臨んだ。途中とっさに白色マウスを黒のマーカーで塗ってしまったと告白。当時グッドマン氏はこの事実に気づかず、この黒塗りされたマウスをラボに持ち帰り助手に手渡して黒塗りが発覚された。この突発的な不正行為のちに認めているところをみると仮説を実証しなければいけないというプレッシャーがあった。
	自身ものに精神的にも肉体的にもかなりの疲労があり、研究の負担が重く、良い結果を求められていたことが起因としている。
	長期間に渡るサマリン氏のこれら行動は責任のある通常の科学者では考えられず、精

	神的に病んでいる印象からすると病気休養をすることを勧告するとされた。たくさん のプレッシャーを抱え込んでしまった結果だ。しかし無責任な行為が引き起こした科 学界への責任から逃れることはできない。
機会	opportunity
	このサマリンの不正案件は著名な上司の下で働く有望な部下が犯した不正の凡例とし て有名である。著名な上司に可愛がられる部下には優遇されている研究環境があり、 上司同様に不正を疑う人は少ないのかもしれない。
正当化	rationalization
	マウスの不正に加えてウサギの目の角膜移植でも不正が見つかった。培養した角膜を 成功、してない角膜の移植を不成功として長年発表してきたが、実は移植は片方の目 だけにしかされてなかった。突発的なひとつの不正かと思われたが不正常習犯との判 断が下された。ウサギの角膜移植の実験においての不正の相違を問われて、どのウサ ギが手順通りに培養された角膜とそうでない角膜の両方を移植したのかを把握してい なかった、知る立場になかったと主張が変わっているが、基本的に不正を認めている ので強く正当化を主張していたとされる文献は見つかっていない。
補足	etc
	事件後はルイジアナに移り、開業医になっている。
	上司であるグッド氏は不正には関係はないとされた。この上司にはお咎めなしという のは著名な上司の下で働いていた部下の不正案件の特徴の一つとされている。

26	
検索入口	Retraction Watch ワースト 30 リスト 25 位
	ウェブサイトのニュースはリンクがすでに外れているものが多く、白楽 HP にある自 殺した研究者たちも 2 チャンネルの文献などを採用して調査している。
不正の種類	改ざん・ねつ造
不正論文数	2008 年の報告書では 14 論文で不正、松山氏と同大学の准教授に戒告処分が出ている。
不正期間	2004 - 2007 年 PubMed で鹿児島大学所属時の論文が 52 件、そのうち撤回数は 15 件見つかった論文で期間を判定。2017 年 7 月現在
名前	松山 航 (大学助教授)
経歴	鹿児島大学助教授、呼吸器内科学、分子生物学
性別	男
発覚時の年齢	38 歳 2007 年時

発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 鹿児島大学 助教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	不明
研究分野	呼吸器内科学、分子生物学
生年月日	1969年?
出身国	日本
概要	2006年3月に American Journal of Pathology で発表された松山氏の論文に読者が異議を唱え、出版社が松山氏に連絡を取ったが解決せず、松山氏その他共著者全員が所属する鹿児島大学病院長以下大学関係者に調査を依頼した。大学が調査委員会を設置、疑惑の論文に不正があったという結果を出した。7人の患者のうちの5人のデータを改ざんしたとしている。これらは松山氏の単独行為であり論文は撤回された。
	2007年11月1日、自宅で謹慎中の松山氏は自殺している。
	最終的な不正調査は松山氏の英語での51論文を対象で3件が不正と指摘された。その他9件は元データがなく不正な疑問点をサポートできないとしている。
動機	pressure
	思ったようなデータが得られず改ざんしたとして不正を認めている。(本人)
機会	opportunity
	共犯はいないとされているが、pubmedで松山氏と当時准教授とされている有村氏などその他納氏などの同大学での共著になっている論文が37-38もあることから不正のしやすい環境があったかもしれない。
正当化	rationalization
補足	etc
	自殺は本格的な調査が始まる前に起こっている。
	たとえ松山氏が筆頭著者でない論文でも元データを持っていたのは松山氏だけだったとされて不正の判定ができないので不正とされている論文もある。

27	
検索入口	ORI case summary 2010
	白楽ロックビル
不正の種類	改ざん
不正論文数	2010年に出されたORIの処分結果からは論文や助成申請を含む15の不正が発表され

	た。その内出版されたジャーナル誌が 8 誌挙がっている。
不正期間	1999 - 2002? 上記の論文の発表時期から。
名前	スコット・プロディ (大学助教授)
経歴	ワシントン大学卒業後、ワシントン州立大学で獣医の博士号、コロラド州立大学で感染症の博士号、ハーバード大学で講師を務めたあと、1996 年ワシントン大学の Corey 教授の誘いでレトロウイルス研究所を任されることになった。エイズウイルスの研究。
性別	男
発覚時の年齢	2002 年
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ ワシントン大学 助教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	HIV・ウイルス学
生年月日	不明
出身国	アメリカ
概要	ライバルとされる研究者がプロディ氏が発表した論文に異なる点を見つけ、ORI に通報した。そして 2002 年 8 月に大学に知らされ、翌月大学教授とセキュリティチームによる強硬な差し押さえが始まった。ラボのパソコン 9 台、ハードドライブやディスク、および研究ノートやファイル、さらにプロディ氏の自宅コンピュータまでもが押収された。その後自宅待機となり証拠となるものすべてが隔離されてから大学の入室が許可された。2003 年 6 月プロディ氏は辞職した。大学の調査結果が出たのは同年 12 月。
	15 の出版されていないのも含めた論文や助成申請書などの不正が報告された。出版された論文の画像改ざんは意図的なものであり、単なる間違いではなくとしている。
	不正にはプロディ氏の単独とされて、氏の同僚などは関わっていないとされている。
動機	pressure
	今回の調査に当たった大学の Liggitt 氏によるとエイズ関連研究は誰もが注目している分野は競争も激しい。助成も減少気味である。成果を論文にして次の助成金を狙っている者は多い。訴えられたきっかけになったのはライバルとされる研究者であることからしても成果が求められているプレッシャーもあったのか。
機会	opportunity
	研究所のトップという立場だったため、不正が見つかりにくかった可能性がある。

正当化	rationalization
	調査の面談で不正を否定、不注意で誤った表示をしてしまった。その責任は研究室のテクニシャンにあるとしたり、重要な元データは部屋の移動時に失くしたと主張。
	ORI からの処分は 2010 年から 7 年間の政府助成関連研究への参加などが禁止されたが、それに対する異議を訴えた。一回ではなく何度も訴えた。
	大学の調査時に自身のラップトップを取り上げられ、オリジナルデータと不正とされたデータの照合ができなかったとしてまたも訴訟を起こした。そして 2013 年の訴えも退けられた。
補足	ect
	白楽も感想で述べているが、これだけ処分に反抗した人はいないとしている。
	ブロディ氏は不正調査の開示を求める新聞社や大学さえも訴えた。この訴えも棄却。
	現在は米国東海岸にて働いているとされる。

28	
検索入口	Wikipedia English の国別不正リスト カナダ
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	不正が疑われているのは 10 件だとされている。
不正期間	1989 - 2002 年? Retraction watch の時系列から問題になっている論文の発表時の年代から。
名前	ランジート・チャンドラ
経歴	<p>ランジート・チャンドラ (Ranjit Chandra) は 1938 年 2 月 2 日インドで生まれ、インドで医師免許取得後、英国に留学した。1974 年 (36 歳)、カナダのニューファンドランド・メモリアル大学 (Memorial University of Newfoundland) ・教授に就任し、栄養免疫学で大活躍し、世界的権威になった。2 回もノーベル賞候補になり、200 報以上の原著論文、22 冊の著書、世界中から 120 以上の受賞。WHO、Health Canada、米国 NIH、米国・科学アカデミー、インド医学研究カOUNシルなどのコンサルタント、1997 年モントリオールで開催の国際栄養学会の会長、など錚々たる研究業績・受賞歴・役職・肩書がある (出典 : Dr. R.K. Chandra)。</p> <p>1989 年 (51 歳)、カナダで最高位の勲章であるカナダ勲章・「Officer of the Order of Canada」を受賞した (毎年最大 64 名受賞)。</p>

性別	男
発覚時の年齢	54 歳 1992 年の告発時
発覚時の地位 (所属機関と国)	カナダ ニューファンドランド大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	栄養免疫学
生年月日	1938 年 2 月 2 日
出身国	インド
概要	1992 年チャンドラ氏の下で働いていたリサーチナースのマリリン・ハーヴェイ氏がシャンドラ氏の不正を訴える。告発は 1989 年とする文献もある。
	ロス・ファーマシューティカルの粉ミルクが乳児のアレルギーを抑える効果があるという研究を依頼された。その後粉ミルクのライバル会社、ミードとネスレからも同じような研究依頼が来た。この時に協力してくれているアレルギー持ちの乳児は必要な人数もデータも出ていないにも関わらずミードとネスレは効果がみられるがロスにはみられないという結果を論文にした。その上 5 年の追跡調査の契約をネスレと結んでいた。アシスタントがこの不正を目のあたりにして大学に訴えて極秘調査もしたが不正が認められるにも関わらず、1994 年結果も処分も発表しなかった。
	分な証拠がなかったという大学からの報告が各ジャーナル出版社にも伝わり、ネスレ社のミルクに関する論文は発表された。
	2002 年の春にマルチビタミンの摂取で老人の記憶力がアップするという論文をイギリスの BMJ に提出、しかし編集者及び査読者から元データを提出するように言われた。この論文は翌年 Nutrition に運よく出版された。この研究成果は New York Times などで報道され注目を集めた。注目は一般人だけではなく研究者からも注目を浴びることとなり、この論文が論争をよぶことになる。
	2003 年、大学から疑惑の論文の元データの提出を求められたが、旅に出る予定だったと辞職した。
	再度大学が Nutrition に掲載された論文を調査、結果不正な点が 41 か所もあったが、公表はされなかった、のちの 2009 年になるまでこの結果は伏せられた。
動機	pressure
	お金とされている。ネスレ社から十分な研究をするだけのお金はいただいていないと言ったとされる。すでに著名であり、仕事も早く結果もだしてくれるとあって企業が

	結果を求めて寄ってくる。
	上記の発言はロス社にしたとしているが、実体のない研究調査の追跡調査の契約をネスレ者としたとされることから、お金だけもらってそのまま論文ねつ造する予定だったとも考えられる。
機会	opportunity
	1994年、大学の調査でチャンドラ氏は不正だと認定されたが、正式に発表されなかった。その後の調査結果も長い間伏せられていた。理由としてチャンドラ氏が反対に大学を訴えると脅していることや、大学の副学長はチャンドラ氏の研究不正はアカデミアの中では重罪であるとしながら、人の命や死に関わるようながんの治療ではなかったと述べている。
正当化	rationalization
	1992年のランセットへの論文や2002年のビタミンの論文をサポートするような論文を出版したが、一つは実体のない名前を使っており自作自演が疑われる。
補足	etc
	2015年、チャンドラ氏は2006年にCBSで放送されたチャンドラ氏のドキュメンタリー番組を名誉棄損で訴えたが敗訴、CBSの訴訟費用約160万ドルの支払いを命ぜられている。
	その後数々の論文が撤回、カナダ勲章もはく奪された。
	正当化ということになると、元データを求められた大学には、大学が失くしたと言ったとされる。なぜか子供染みた言い訳や行動がある。
	2016年、オンタリオで週一回の診察をしていたとされるチャンドラ氏は不正請求で訴えられている。その後はインドへ帰国したようだ。

29	
検索入口	Wikipedia English の国別不正リスト イラン
不正の種類	概要（盗用、オーサーシップ、査読偽装）
不正論文数	58件 他49件が調査中のものがあるとされている。
不正期間	2013 - 2016年の間にオンライン投稿されている。
名前	イラン人科学者 約200名 主に Javad Javanbakht、 Aram Mokarizadeh、 Emad Yahaghi
経歴	

性別	
発覚時の年齢	
発覚時の地位 (所属機関と国)	
医師免許の有無	
博士号の有無	
研究分野	今回の雑誌は病理学やがんや腫瘍をテーマにしたジャーナル誌であった。
生年月日	
出身国	イラン
概要	2016年11月、Springer and BioMed Central社は同系列7つのジャーナル誌に掲載された58論文に対しての撤回を発表した。調査の結果、盗用、査読やオーサーシップが論文発表システム自体を破壊するような操作が行われているとした。著書名を含めた撤回論文リストも発表されたが、グループでの不正行為とされている。その他、現在も上記の撤回に加えてBioMedが40以上、Springerも9以上の論文も調査の対象になっていると報告された。
動機	pressure 出版社の論文申請システムの盲点を狙って次々と論文を発表しているので、とにかく論文発表数を増やすためだけの理由は明らかである。
機会	opportunity このジャーナル誌は過去にも大量の撤回案件が2015年3月(43件—ほぼ中国人によるものと報告されている)、同年8月(64件—中国人名の著者)が発表されたにもかかわらず、今回も大量のイラン人による論文撤回が報告された。このジャーナル誌の脆弱な点が狙われている。論文翻訳や論文提出を補助する第三者機関の関与も疑われる。
正当化	rationalization
補足	etc Springer社のTumor Biologyは2017年4月に100件の撤回論文を発表した。こちらも中国人。 出版社は今後このグループからの論文からは受け付けないとし、オーサーシップ規約を改定している。 最近の不正調査は所属機関からのメールアドレスではないものや、タイトル、著名の操作により内容が同じでないかの査読調査段階での不正発見ができるように編集規約

	を改定している。
	イランのテヘラン大学の前には論文を売り買いするビジネスが堂々と広告を出している。ラボワークがいらぬ論文なら 600 ドル 400 ドルで自身の名前で出版することもできる。ビジネスは非倫理的だが、現在合法とされている。イラン議会で禁止する動きがでていますが、いつになるかはまだわからないとしている。オイルマネーの国では買えないものはないという思考があり、イラクのサイエンス界のイメージ悪化が懸念される。

30	
検索入口	Wikipedia English の国別不正リスト シンガポール
	白楽ロックビル
不正の種類	改ざん
不正論文数	21 件 大学の調査結果から。
不正期間	2001 年から 2009 年までシンガポールナショナル大学に在籍、しかし 2007 年以降はイギリスの大学にも在籍。その間に発表した論文が対象とされている。
名前	アリリオ・メレンデス (大学教授)
経歴	アリリオ・メレンデス (Alirio J. Melendez) は、ロシアのモスクワ大学で医学を学び、英国・グラスゴー大学で研究博士号 (PhD) を取得し、シンガポールのシンガポール・ナショナル大学 (National University of Singapore) ・教授になった。専門は免疫学で、免疫細胞の細胞内情報伝達を研究していた。その後グラスゴー大学、リバプール大学に在籍。
性別	男
発覚時の年齢	41 歳 2011 年
発覚時の地位 (所属機関と国)	イギリス リバプール大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	免疫学
生年月日	1960 年
出身国	シンガポール
概要	2011 年 3 月 (41 歳)、メレンデスがリバプール大学在籍中、シンガポール・ナショナル

	<p>ル大学在籍時の約 70 論文に研究ネカトがあると、匿名の公益通報があった。シンガポール・ナショナル大学 (National University of Singapore) は調査を開始した。</p> <p>2011 年 7 月、2011 年 2 月の「Nature Immunology」のオンライン論文が撤回された。これが最初の撤回論文である。その後、次々と論文が撤回され、この文章を書いている時点では、撤回論文は 14 論文に及んでいる。2012 年 12 月 19 日、シンガポール・ナショナル大学 (National University of Singapore) は 1 年 7 か月の調査を終え、メレンデスの 21 論文にねつ造・改ざん・盗用があったと結論した。これらの不正に、共著者や同僚など他の人は関与しておらず、メレンデスの単独犯とした。ただ、どの論文が研究不正だったかを公表しなかった。また、調査報告書も公表しなかった。</p>
動機	pressure
	自身の関与は否定しながらも自身の研究室で起きたことには責任があるとしている。
機会	opportunity
正当化	rationalization
	2013 年 10 月、メレンデス氏はシンガポール大学の調査結果で不正とされたが、証拠もなく不正の罪を着せられたとインターネットで身の潔白を訴えた。たとえ研究室の監督者として不正を行ったことはなく、もし不正があったとしても範疇ではないとしている。特に不正とされたうちの 7 論文に対しては自身の研究室で行われたものでもなく、試薬などのアドバイスをしたのみで責任を取る必要もないと主張している。
	上記主張に加えて、自身の不正への関与はきっぱりと否定。しかし研究室の誰かが不正に関与したということも示唆した。しかしそこには隠べいがあり、自身だけが不正の犠牲となり、自身以外の者は全員が不正した証拠が見つからなかったとされた。
	大学の調査は私への面談も実施されなく、書面での説明も送ったが、大学側からの返答はなく最終報告に持ち込まれたとし、報告された不正を認めないとして、今後もそうだとした。
	また、インターネットで大学側の不正内容を公表しないとした姿勢も非難した。自身の潔白を証明するためには大学にある研究室のデータにアクセスする必要があるともしている。今回は不正とされた論文それぞれにコメントを付けている。客観的に不正であると認めるコメントもあるが自身の関与は否定している。
補足	etc
	白楽のコメントでメレンデス氏が博士論文を書いた時の指導教授が要職を辞任したとした。白楽はこの事件と関連があるとしている。
	メレンデス氏自身も強く不正行為を否定しており疑惑の論文を自身でも解析して公表

	している。もし本当に故意で不正していてもこのような反論ができるのか。
--	------------------------------------

31	
検索入口	Wikipedia English の国別不正リスト 南アフリカ
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造 改ざん
不正論文数	9件? 不正とされた1995年の論文は撤回。その他8件の疑惑論文があるとされる。
不正期間	1995年 この論文発表時
名前	ウェルナー・ベズウォーダ (大学教授)
経歴	ウェルナー・ベズウォーダ (Werner Bezwoda) は、南アフリカ共和国・ヨハネスブルグのウィットウォーターズランド大学 (University of Witwatersrand) 教授・がん学者・医師で、乳癌の化学療法で著名だった。
性別	男
発覚時の年齢	不明 1995年時
発覚時の地位 (所属機関と国)	南アフリカ ウィットウォーターズ大学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	乳がん
生年月日	不明
出身国	南アフリカ共和国
概要	<p>1995年、ベズウォーダは、乳癌患者への高用量化学療法+骨髄移植法(抗癌剤の量を増やすことで癌細胞を殺し、一方、副作用で死ぬ白血球を患者の骨髄を使うことで減少を押さえる)の臨床試験が良い結果をもたらしているという研究論文を「Journal of Clinical Oncology」誌に発表した。2000年3月、米国・ジョージタウン大学のレイモンド・ワイズ教授の現場監査チームが、ベズウォーダの論文に重大なデータねつ造を見つけたと「ランセット」誌に発表した。1995年の論文は撤回され、ベズウォーダは解雇された。</p> <p>主な不正として、研究が始まって9年してプロトコルが作られた。1995年の報告ではこの治療での死亡はゼロとされていたが、三名が死亡しているとされている。90名に対して治療が試されたとしているが、29名の記録がない。その他記録が不十分な患者や発表されたとおりの治療をされていない患者も含まれている。その他8件の論文に</p>

	正確でない情報が含まれているとした。
動機	pressure
	愚かな欲望により、プレゼンがより良く受け入れられるものであったかとしている。 (本人)
機会	opportunity
	コンセントフォームが見つからない理由として、アパルトヘイト時代の 1990 年から 1995 年に臨床試験の場であった Hillbrow hospital の患者はほとんどが貧しい黒人だったことから、勝手に操作していた可能性がある。国を超えるとそこがどういう状況かを把握するのは難しい。
	ベズウォーダ氏は大学の血液学免疫学の部長であり、がんのスペシャリストであったことから周りからの監視力はあまりなかったのではないかと主張している。
正当化	rationalization
	大学の調査で、ベズウォーダ氏は発表していた化学療法の薬とは違うのを使ったことは認めたが、大学が面目を保つために濡れ衣を着せられたとも主張している。
補足	etc
	1995年に発表された好結果をもたらした高用量化学療法+骨髄移植法は約3万人の乳がん患者を平均10万ドルもするこの治療法に踊らされたとされている。初期段階で最低でも10~20%の患者がこの治療を受けて亡くなったのではないかとされている。新治療を待ち望んでいる重症の患者とこの治療に支払った保険会社を巻き込んだ事件だが、刑事事件にはなっていないようだ。
	不正論文（在りもしない効果）が引き起こした人の生命を左右する一件。

32	
検索入口	Wikipedia English 国別不正リスト イギリス
不正の種類	ねつ造、利益相反
不正論文数	3件 wikiによると問題の論文は一部修正のあと2010年に撤回になり、関連の動物への臨床試験や問題論文のデータが含まれた論文が撤回。
不正期間	1998年 疑惑の論文発表年
名前	アンドリュー・ウェイクフィールド（医師）
経歴	（1957年生まれ、英: Andrew Jeremy Wakefield）は、英国の医師で生物医学研究者。 1998年に「新三種混合ワクチン予防接種で自閉症になる」という論文を『ランセット』

	誌に発表した。この論文は科学的に間違っているとされ2010年に撤回されたのだが、ワクチン接種を嫌う人々の英雄的な医師として崇められ、各国で新三種混合ワクチンの接種率の大幅な低下を招いた。その後、世界の多くの子供が麻疹（ましん、はしか）に感染した。ウェイクフィールドの医師免許が剥奪される懲戒処分を受けた。
性別	男
発覚時の年齢	40歳 1998年論文発表時
発覚時の地位 (所属機関と国)	イギリス ロイヤル・フリー・ホスピタル 医師
医師免許の有無	2010年にイギリスでの医師免許はく奪。
博士号の有無	有
研究分野	消化器病
生年月日	1957年
出身国	イギリス
概要	<p>1998年2月28日、ウェイクフィールドは、『ランセット』誌に新三種混合ワクチンと自閉症との関係を示唆する論文を出版した。12人の子供の患者を対象に研究し、「腸疾患」と「自閉症」と「三種混合ワクチン」が関連した新しい病気「自閉症的全腸炎 (autistic enterocolitis)」を発見したと報告した。</p> <p>論文発表の前に記者会見し、「新三種混合ワクチン予防接種で自閉症になる」と述べ、ワクチン接種を否定し、ワクチン接種が自閉症の原因だとした。その後他の研究者が仮説を再現できないとして論文はすぐに大きな論争になった。</p> <p>2004年2月、『ランセット』編集長のリチャード・ホートンは、ウェイクフィールドが『ランセット』に開示していなかった重大な利益相反(conflict of interest)があったと、同論文の一部を撤回した (Lancet 2004;363:750)。</p> <p>ウェイクフィールドの論文内容は科学的にも問題点が指摘され、2010年1月、英国の医事委員会 (General Medical Council) は、新三種混合ワクチンと自閉症の関連性を否定した。そして2010年に論文全体が撤回された。</p> <p>しかし、その間、及びその後も、ウェイクフィールド論文を信じた英国、フランス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの人々は子供に予防接種するのを避けた。そのために、多くの子供が麻疹（ましん、はしか）に感染した。</p> <p>2015年にはイギリスの裁判所はMMRワクチンと自閉症が関連しているという仮説を支える十分な根拠が現在ないとした。</p>
動機	pressure

	2004年にランセットに掲載された論争になっている論文の研究費用はMMRの製造会社との訴訟を控える弁護士が、病院に5.5万ポンドが病院に支払われたとのレポートをSunday Timesに発表した。その後これらの弁護士からウェイクフィールド氏に40万ポンドが渡ったとした。これを受けてランセットは論文を撤回した。
	ランセットへの論文が発表される前年に単独型の麻疹ワクチンの特許を申請していたことが判明。その申請書にはまだ結果の出ていない研究なのに、MMRワクチンと自閉症の関係を示していた。
機会	opportunity
	ウェイクフィールド氏は以前から麻疹ワクチンがクローン症候群を引き起こすのではないかという研究をしていた。これらをまとめた仮説がランセットで発表されたが、1998年、他の研究者によってはしかおよびMMRワクチンともにクローン病との関連性は確認されなかったが、ウェイクフィールド氏は、自閉症と腸の異常を訴える子供を診察したことをきっかけに関連性の研究に傾倒していったとされる。
正当化	rationalization
	MMRワクチンと自閉症の関連性は薄いとされる報告や、12人の治験者の不正データが次々に出てくるのにも関わらず、世の反ワクチン信望者をバックに今だワクチンと自閉症の関係は正しいと主張。もちろんこの説をサポートする団体も人物も今も多く、まだまだ今後の研究に結果を委ねざるえないもの事実だと思われる。
補足	etc
	2001年に病院を退職。その後アメリカに渡った。医師免許ははく奪されているので、現在は自閉症の医療機関のディレクターとされている。
	日本の三種混合ワクチンの使用はおたふくかぜワクチンによる髄膜炎の発症が高くなり中止となった。日本の横浜市港北区の三種ワクチン廃止後の自閉症発症率のレポートがワクチンと自閉症との関連はみられないという意見を支持する報告が出ている。

33	
検索入口	ORI の case summary より
不正の種類	改ざん・ねつ造
不正論文数	7件 ORI の調査結果より
不正期間	2000 - 2006年 上記の論文発表期間
名前	イゴール・ジューラ
経歴	バンダービルト大学のバイオメディカル学部のシニアリサーチアソシエイト、その後、

	SUNY Upstate Medical University に在籍したあと、Novartis に移った。しかし Novartis はジューラ氏の履歴に不正のデータが含まれた論文があったため不正が発表されたあと解雇したと発表した。自身の HP には National Kiev University で修士号を取得、バンダービルト大学はポスドクからスタートから 8 年間在籍となっている。現在は ReproSource, Inc in Woburn, MA で研究しているとなっている。
性別	男
発覚時の年齢	41 歳 2014 年
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ バンダービルト大学 シニアリサーチアソシエイト
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	生物医学工学
生年月日	1973 年? 2014 年で 41 歳とある。
出身国	ウクライナ
概要	ORI によると、バンダービルト大学在籍中、コンピュータファイルを複製して、画像を改ざんして実験の数を大きく増やした。7 論文と 3 件の助成申請書に 69 の画像が改ざん、使用されていた。ジューラ氏は ORI に意図的にねつ造と改ざんしたことを認めており、7 論文の撤回もしくは修正、そして三年間の助成関連研究および委員会などへの参加が禁止された。
動機	pressure
	ジューラ氏は改ざんねつ造を認めている。
	ジューラ氏の事件について意見しているブログを見つけた。これらの論文が発表されたのはバンダービルト大学でのポスドク時代だ。不正となった 6 つの論文の引用回数は Google Scholar によると 700 回を超えている。この事実はジューラ氏および責任著者であるアンダーソン教授以下研究室員すべてのキャリアとなってきたはずであろう。最初の不正とされた論文ではほんの少しの画像を誤魔化した。しかし引用回数は 250 回だ。モラルは投げ捨て、この研究室の上司、将来の就職先をアピールしないといけないというプレッシャーがあったのではとも予想している。
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	ジューラ氏をネットで検索すると、自身を褒めるようなサイトへの投稿が多数ある。

	過去の不正をカバーするようなイメージだが、不正したあとも研究者として生きていくためのアピールするための一つの手段だろう。
--	--

34	
検索入口	ORI case summary
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	2件
不正期間	2012 - 2013年
名前	マリア・セラエツ
経歴	<p>マルティエ (マリア)・セラエツ (Maartje “Maria” C.P. Geraedts) は、オランダで研究博士号 (PhD) を取得し、米国・メリーランド大学医科大学院 (University of Maryland School of Medicine) ・ポスドクになった。専門は味覚生理学である。医師ではない。</p> <p>2015年11月16日 (35歳?)、研究公正局がセラエツのねつ造・改ざんを発表し、3年間の締め出し処分を科した。</p> <p>セラエツは、研究を辞め、オランダに帰国し、科学ライターに転身した。</p>
性別	女
発覚時の年齢	34歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ メリーランド大学医科大学院 ポスドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	味覚生理学
生年月日	1980年?
出身国	オランダ
概要	<p>2010年4月 (30歳?)、オランダのマーストリヒト大学 (University of Maastricht) で研究博士号 (PhD) 取得したセラエツは、2010年8月 (30歳?)、米国・メリーランド大学医科大学院 (University of Maryland School of Medicine) のスティーヴィン・マンガー (Steven D. Munger、写真出典) 研究室のポスドクになった。</p> <p>2014年2月 (34歳?)、2012年と2013年にメリーランド大学医科大学院で発表した論文の研究ネカトが発覚し、解雇された (?)。</p>

	2015年11月16日(35歳?)、研究公正局は、セラエツの2 出版論文(以下)にデータねつ造・改ざんがあったと発表した。2 論文とも撤回された。
動機	pressure
	公表されている CV によると現在は科学ライターとして会社を経営。研究に嫌気がさした。それよりもサイエンスを一般に向けて発表するほうが向いているとしている。
	この撤回された論文の不正 2 つは棒グラフを改ざんしたとある。どちらも求める結果に合うようにとのこと、本当の結果では論文を発表できないというプレッシャーがあったのだろう。
	責任著者である教授は大学の調査結果、研究室の不正論文関連メンバー以外での検証で、再現は失敗に終わっていることでこれ以上この研究の結果を確認できなくなったので撤回するとした。これに対するグライツ氏はコメントしない、教授のコメントがすべてとした。
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	現在アメリカの PHS (公衆衛生局) 関連の研究には従事しておらず、将来についてもその意向はなく、ORI の調査結果について認めることもなく否定もしていない。今回の和解には、当人の自白は義務ではないとされている。

35	
検索入口	ORI case summary
不正の種類	改ざん・ねつ造
不正論文数	2 件
不正期間	2014 年
名前	ピーター・リトルフィールド (ポスドク)
経歴	Western Washington University でバイオケミストリーを専攻、その後リサーチサイエンティストとして 2 年間は働いたあと、カルフォルニア大学サンフランシスコ校の博士課程に進む。事件発覚後、現在は大学を休学してサイエンスの家庭教師をしている。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位	アメリカ カルフォルニア大学サンフランシスコ校 ポスドク

(所属機関と国)	
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	バイオケミストリー
生年月日	不明
出身国	アメリカ
概要	ORI がカルフォルニア大学サンフランシスコ校の大学院生の不正を公表した。2つの論文に対して実験的仮説の裏付けのデータ改ざんおよびねつ造を行ったとした。3年間の政府助成関連プログラムへの参加禁止の和解処分となった。
	論文は撤回されていないようである。二つのうちの一つの論文についての再実験で、計算が間違っており結論を覆すものではないと判明により撤回ではなく訂正された。
	大学の発表によると、もう一つの論文は結論に影響するものであり、撤回されるか修正されるかはまだわかっていないとしている。現在もまだ結論は出ていないようだ。
	今回の事件の不正発見は本人の自白であるとされている。研究室の責任者である Jura 氏がリトルフィールド氏から不正行為を告白され、大学に通報後 ORI に知らされた。
動機	pressure
	概要から察すると、訂正出来る内容でありながら自ら不正を自白。調査内容からもラボ内で修正できる内容かなどが検討されており、学校側の処分があったようでもなく休学扱いである。
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	本人の自白がきっかけとされている。調査にも協力的だったとされるが、動機となるような文献はまだ見つかっていない。一つは計算間違いで修正できるものであったし、二つの論文の責任著書である助教授のプロフィールには今も論文リストに載ったままである。研究室でのプライベートなイベントでのリトルフィールド氏の写真は今も見る事ができる。解雇されたとはなっておらず、休学扱いである。
	リトラクションウォッチからコメントを求められていたが、何もないとしている。

36	
検索入口	白楽ロックビル
	Retraction Watch

不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	12 件
不正期間	2005 - 2012 年
名前	サンドラ・ダン (大学准教授)
経歴	サンドラ・ダン (Sandra E. Dunn) は、カナダのブリティッシュコロンビア大学 (University of British Columbia in Vancouver) ・医学部・准教授で、専門は乳がん生物学だった。医師ではない。約 80 報の論文を出版し、70 人の学生を育て、2 つの国際特許を持つ著名ながん研究者である
性別	女
発覚時の年齢	2013 年
発覚時の地位 (所属機関と国)	カナダ ブリティッシュコロンビア大学 准教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	乳がん生物学
生年月日	不明
出身国	アメリカ
概要	<p>2013 年初頭、カナダの大学のある研究室は、出版した論文に不正疑惑が発生し、論文の再現実験をしたが、再現できなかった。</p> <p>2014 年、ブリティッシュコロンビア大学は調査の結果、その研究室の論文に 29 個の異常なデータを見つけた。内、16 個はねつ造・改ざんを含む悪質なものであった。</p> <p>2005 - 2012 年に 6 学術誌に発表した 12 論文で、10 件以上の政府や民間のグラントの助成を受けていた。</p> <p>事件を知る研究者は大いに落胆したのだが、ブリティッシュコロンビア大学は調査結果を公表しなかったばかりか、不正研究者の名前も公表しなかった。</p> <p>そうこうしているうちに不正研究者は大学を辞めてしまった。</p> <p>カナダでは、大学と研究助成機関は不正者の名前を公表する義務はない。</p> <p>ブリティッシュコロンビア大学は、明白に公共な利益でない限り個人情報を開示することを禁じるブリティッシュコロンビア州の個人情報保護法に縛られている。</p>
動機	
機会	
正当化	

	過去から現在にかけてダン氏の研究をサポートしてきた団体は15。連絡するとそのうちの10団体が返答。このブリティッシュコロンビア大学の調査の事について知っていたのは1団体のみだった。大学からの連絡はないが、ダン氏の研究を何年にも渡って支援してきた団体もあり、彼女の業績を認めているコメントをした。
	大学の調査の結果が明らかになっていないため、どの論文が不正なのかは明らかにされていないが、いくつかの出版社は大学の調査によって論文に疑義があることを発表した。
	ダン氏はインタビューで、大学の予備調査は早まって研究結果を再現できないとして、元々の研究に重大なエラーがあるという結論を出したと非難した。
	UBC（ブリティッシュコロンビア大学）では研究のデータは5年間保存するというルールがあるが、その義務を研究室で14年間の保存されたデータの中から足りない情報を大学側に何度も提供してきた。
	大学の再調査の対象になった論文は多くの学生の努力の賜物であり、それを守るのは自身の義務であると述べている。
	最終的にはこの件はジャーナル誌の結論に委ねられているし、事実どの論文も未だ撤回されていない。本当に疑いがあるのであれば、大学からの連絡があった2014年の時点で訂正されていたはず。今のところ訂正の依頼がきているのは1社からであるとしている。
	ダン氏がCEOを務めているPhoenix Molecular Designsは現在Small Business BC Awardsにトップ10ファイナリストに残っているが、組織委員会ではこの賞を決めるのは一般市民からの投票によって決められるのでノミネートに影響することはないとしている。
補足	

37	
検索入口	Retraction Watch 最も引用された論文トップテンの第一位
	wiki 大阪大学医学部論文不正事件
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	2件
不正期間	2004 - 2005年 上記の論文発表時期より
名前	福原淳範（当時大阪大学院生）
経歴	大阪大学内科学代謝内科学研究室で肥満脂肪細胞の病態に関する研究をしている。

性別	男
発覚時の年齢	25 - 6 歳？
発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 大阪大学医学部 大学院生
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	代謝内科学
生年月日	不明 平成 6 年に医学部卒業？
出身国	日本
概要	<p>大学内の研究者からデータがおかしいとの告発があり内部調査に入った。</p> <p>2005 年 5 月、大阪大学医学研究科の調査委員会（委員長は遠山正彌研究科長）による調査により、大阪大学医学部で研究不正が発覚した事件を端緒とする。2005 年 6 月に、実験データの不適切な掲載を理由として、大阪大学医学部の下村伊一郎教授（内分泌・代謝内科）や竹田潤二教授（発生工学）らが 当時医学部生を筆頭著者として発表していた米医学誌「ネイチャー メディシン (Nature Medicine)」誌の論文 (Nat Med. 2004 Nov;10(11):1208-15.) が撤回された。さらに、撤回されたネイチャー メディシン誌の論文の筆頭著者が執筆していた別の「カンサー サイエンス (Cancer Science)」誌での筆頭著者論文 (Cancer Sci. 2005 Jun;96(6):377.) も、不適切なデータが掲載されていたとして撤回された[4]大阪大学医学部の調査委員会による研究不正に関する調査報告書は、「ネイチャー メディシン誌の論文などでの捏造・改竄データは筆頭著者の医学部学生によって作成されたものである。」「下村・竹田両教授による医学部学生に対する研究指導、共同指導および監督は不十分であった。」「両教授が研究者・教育者として適切な対応を取っていれば、データ捏造に気付くチャンスは十分にあった。」と結論した。</p>
動機	pressure
	一流の雑誌で論文を発表したかった。学生でありながら、大学と教授に合計 600 万円を寄付したとされる。教授の配慮で出版できたものと推測される。さらに学生の父親は大学の名誉教授となっている。
機会	opportunity
	一流誌への論文出版という既定路線が教授および院生にあったのでそれに見合うデータを作る環境が設けられた。動機に述べているように父親が同大学の名誉教授であり寄付金もしている。

正当化	rationalization
	福原氏は事件発覚当初は不正行為を認めた。
	のちに否定し、罪をなすりつけられたと教授を裁判で訴えたが棄却された。
補足	etc
	Retraction watch で撤回された論文で引用数が多いナンバーワンの論文とされている。不正発覚後が特に多い理由として、Ferric Fang 氏の不正研究論文によると、多くの科学者は、アポサイトキンとしてのビスファチンの最初の同定のために、福原氏の論文を引用し続けている。
	今回の事件の処分対象となった教授以下、元院生も大阪大学の内分泌科に在籍している

38	
検索入口	Retraction Watch recent news より 現在も調査中につき撤回数は増えている。
不正の種類	改ざん・盗用・その他不正助成申請
不正論文数	疑いは 30 件以上? 撤回、修正および警告は 20 件以上 (NY Times より)。2017 年 4 月 3 日の Retraction watch では 6 件の撤回を数えている。
不正期間	2003 - 2016 年? 最新の Retraction watch で公表されている疑惑論文の発表期間より推測。
名前	カルロ・クローチェ (大学教授)
経歴	オハイオ州立大学がん遺伝学での著名な教授であり学部長である。医師ではあるが博士号は持っていない。ヒトゲノムに関するがん研究者であり 60 以上受賞歴もあり、政府助成だけでもトータルで 8.6 千万ドルを超える支援を受けており、日本癌学会の名誉会員でもある。
性別	男
発覚時の年齢	69 歳? 2013 年時
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ オハイオ州立大学 学部長 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	無
研究分野	腫瘍学
生年月日	1944 年 12 月 17 日
出身国	イタリア

概要	<p>2013年、オハイオ州立大学と政府関連に匿名でクローチェ氏の30以上の論文にデータ偽装の疑いがあると通報があった。2014年にはPurdue Universityのウイルス学教授のDavid A. Sandaersからジャーナル誌に直接データ偽造と盗用の疑いがあるのではという連絡があった。2013年以前はほんの一握りの警告だったが、訂正、撤回や編集者からの警告は最低でも30以上に膨れ上がっている。これらの不正はいわゆるウェスタンブロットティング法の不正操作によるものだ。</p>
	<p>今のところ、クローチェ氏はこれらの不正疑惑で処分は受けていない。サンダース氏からの疑惑に対しては未だ関知してないものの大学は外部調査を依頼している。不正の証拠や問題が見つかったからの始動ではないとしている。</p>
動機	pressure
	<p>クローチェ氏はすべての不正を否定している。標的にされるのは第一人者であるからであろうとしている。部下や協力者が起こした問題をすべて私の責任に負わせようとしている。(本人)</p>
	<p>ノーベル受賞者のSharp氏によると、クローチェ氏ががんの分子的原因に大いに貢献があることを認めながらも、いい加減なところがあるともしている。</p>
	<p>クローチェ氏は従来の考え方に従わない科学者には我慢できないとされている。自分の考え方に従わない者にも同じことがいえるのかもしれない。</p>
機会	opportunity
	<p>クローチェ氏がオハイオ州立大学にもたらした政府助成2900万ドル余りの予算のうち870万ドルは大学の経費の足しになっていると指摘されており、大学の調査の甘さに影響しているのかもしれない。</p>
正当化	rationalization
	<p>弁護士を通じてクローチェ氏は論文の準備段階で図表などでのエラーは起こることも事実であるとしているが、図表のミスは誠実な間違いであり、加えて盗用を容赦しているわけではなかったが、スタッフが出してくるデータを信頼しないとイケない。</p>
	<p>2013年の匿名(Clare Francis)からの不正指摘に対しての調査は二つの論文に絞られ、一つは若い研究室の部下の誠実な間違いのミスとした。もう一つは情報が少なすぎて調査にならないとして打ち切り、これが認められた。</p>
	<p>サンダース博士からの告発に対して、クローチェ氏はジャーナル誌に対して、不正指摘に同意できないとしたが、違う雑誌には不確かながら間違いが起きた可能性があるとした。しかしながら成果に影響があるわけではないとした。</p>
補足	etc

	上記の問題のほかに、二重申請や不正に経費を使ったなど長年にわたる疑惑がある。
	訂正した論文を再発表するか撤回するかを選択時、クローチェ氏は、検閲されることには慣れてないから撤回するという選択をした。

39	
検索入口	白楽ロックビルを参照したが、主な引用は the next generation
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	1件 白楽によるとその他 15 件も調査の対象とされる。
不正期間	2012 年 上記の論文発表時
名前	ピエロ・アンバーサ (大学教授)
経歴	ピエロ・アンバーサ (Piero Anversa) は、イタリアで生まれ、イタリアのパルマ大学 (University of Parma) で医師免許を取得し、渡米の後、米国・ハーバード大学医学部の基幹病院であるブリガム・アンド・ウィメンズ病院 (Brigham and Women's Hospital) の麻酔・医学講座・教授になった。専門は心筋の幹細胞で、世界的な権威である。316 報以上の査読論文がある。
性別	男
発覚時の年齢	75 歳 2014 年時
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ ハーバード大学 ブリガムアンドウイメンズ病院 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	幹細胞学
生年月日	1938 年 9 月 11 日
出身国	イタリア
概要	2014 年 4 月 (75 歳)、2012 年 10 月号掲載の『Circulation』誌の論文が撤回された。その後、2011 年『Lancet』誌に掲載された論文に警告が出された。撤回理由の詳細は調査中として公表されていないが、データねつ造・改ざんがあったと思われる。ハーバード大学が調査を開始し、研究公正局も調査に加わっているが調査結果は公表されていない。 アンバーサ氏の革命的な仮説によると、これまで心臓は生まれた時点で細胞分裂は止まり、再生することはないとされてきたが、心臓は傷ついた皮膚のように一生のうち

	<p>に何度も再生できると主張した。1998年に発見された幹細胞胚を使って柔軟な新しい心筋細胞を作り、心ポンプ機能が修復される道筋ができたとされた。心筋梗塞から心不全に陥る患者にとって心臓移植以外での助かる非常に画期的な説で次々と論文を発表していた。</p> <p>その後国内外の会議で熱い論争が繰り返し行われた。論争だけではなく、アンバーサ氏の仮説を実証？否定するために、膨大な資金と労力が注がれることになって、2004年に発表した論文でアンバーサ氏のこれまでの仮説は再現できない。骨髄細胞が心筋細胞に代わるという証拠は見つからなかったとした。アンバーサ氏はこれを無視して反論に反論で応戦していくが、反対に再現できない可能性がアンバーサ氏のその他の論文にも及んだ。ハーバード大学およびブリガム・アンド・ウィメンズ病院は内部調査に乗り出して、2014年、10年にも及ぶ論争に終止符を打ち、仮説は実証できなかったとした。その後大学から論文が撤回された。</p>
動機	pressure
	<p>アンバーサ氏は自身の仮説を強く信じることで研究を押し進める一方、疑うという気持ちや反論の意見に耳を傾けることができなかつたため、自身の仮説を否定するデータは間違っているとされ、仮説を否定するような結果を生む実験は決して行われることはなかつた。反論者は実際処分されていた。独裁的になってしまった。</p>
機会	opportunity
	<p>外部での論争を招く前に内部でもこのような論争があることが健康的であるとされるがそれが欠けていた。事実、内部で仮説に煩勞するものがいればバカ呼ばわりされていたし、職を失う事態に陥る。(内部告白者)</p>
	<p>研究室での情報の保守は厳密で、伝達は下から上の一方通行のみである。実際にデータ収集した者であっても、それがどのように研究に貢献しているかを見る機会は論文や助成申請書の段階までない。同じ研究室でありながらもグループ外の会話はしないようにされており、禁止状態だった。</p>
	<p>特に多くの留学生は技術的や学術的にも疎く立場的弱いとされ、雇い主である研究室から解雇されるということはアメリカでの労働ビザを失うことである。反論することには研究室を去るという恐怖がつきまとっていた。</p>
正当化	rationalization
	<p>2014年にアンバーサ氏は大学と病院及び院長を相手に手続きのにも法的にも誤った調査をしているとして訴えたが後に棄却された。</p>
補足	etc

	今回の件は、当初から公の場で仮説への論争が行われるという科学研究の健康的な様相のように見えるが、アンバーサ氏の研究室での日常が内部告発により明らかになると、少し違った見方ができた。アンバーサ氏の自身の仮説を強く信じることはすばらしいが、疑うという気持ちを持っていれば起こらなかった。故意の不正という区別を用いるなら故意ではないかもしれない。一度信じた宗教を熱狂的に支持した結果なのかもしれない。
	一つの仮説を生むことと同様に否定することの実証に多額の助成金が使われている。
	後報。大学と病院はアンバーサ研究室での不正に取得した助成金の件に関して NIH に和解金 1000 万ドルを払うことで合意。

40	
検索入口	Retraction Watch
不正の種類	改ざん
不正論文数	1 件
不正期間	2016 年 上記の論文発表年
名前	セルジオ・ゴンザレス (ポスドク)
経歴	フランスのインスティテュート・デ・ニューロサイエンス・モンペリエ (Institute for Neurosciences of Montpellier (INSERM)のポスドク。脳科学。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	フランス インスティテュート・デ・ニューロサイエンス・モンペリエ ポスドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	脳科学
生年月日	不明
出身国	フランス
概要	2015 年末に「 Journal of Clinical Investigation」にゴンザレス氏の論文が発表された。その後バブピアでのコメントで同じ画像を回転させて使っているのではないかと指摘される。当初はコメントに対して論文の責任著者である Nicolas Tricaud 氏が間違いを訂正するコメントで返したが、その後も同じようなミスをコメントで指摘される。この間ジャーナル誌からの疑惑は訂正、警告、そして大学の内部調査と進み撤回

	<p>が決定された。現在ゴンザレス氏との連絡は取れず、学界から脱落したとされている</p> <p>ジャーナル誌は画像の複製およびデータの間違ひは禁止として撤回したが、故意の不正とは認定されていない。</p>
動機	pressure
	<p>フランスの研究者として安定したポジションを獲得するためには「concours」と呼ばれる年に一度の審査にパスしないといけないというプレッシャーがあった。この審査にパスするには最低でもトップ 10 ジャーナル誌に筆頭著者として一つの論文を掲載したという経歴が必要とされていた。この審査申請の締め切りにゴンザレス氏の論文は間に合ったとされている。</p>
	<p>論文の撤回内容でも示されているが、ゴンザレス氏のデータの扱いが雑だったとされている。</p>
	<p>責任著者である Tricaud 氏はゴンザレス氏の論文をすべてチェックできていなかったと責任を認めている。</p>
機会	opportunity
正当化	rationalization
	<p>Tricaud 氏もゴンザレス氏が concours に向けて二年間、研究にまじめに取り組んだと評している。</p>
補足	etc
	<p>正しいデータは確かにあったようだが対応が遅れた。論文出版への推敲などが時間とのプレッシャーで足りなかったよう。同じミス・不正であっても、意図的なものではないとの結論があるのは珍しい。これは文章を担当した責任著者である上司がパブピアなどのコメントにきちんと対応していたからではないか。</p>
	<p>膨大な量のデータ管理ソフトが出現してから増えたミスの一つであり、ソフト自体を批判しているコメントもある。</p>

41	
検索入口	Retraction Watch
不正の種類	データ改ざん
不正論文数	1件 とりあえずこの撤回された論文が1件あるが、他にも疑惑が指摘されている。
不正期間	2006-8年?
名前	ボリス・ジボトフスキー&クラウス・ウィマン (大学教授)
経歴	ボリス・ジボトフスキー&クラウス・ウィマン (Boris Zhivotovsky & Klas Wiman)

	<p>の両名はスウェーデン・カロリンスカ医科大学大学上級教授と教授。カロリンスカ大学はスウェーデンのノーベル賞委員会がある大学である。最近もパブロ・マッキヤリーニの不正事件を扱った。</p> <p>ジボトフスキー氏の専門は毒物学、細胞死の細胞メカニズムの研究。</p> <p>ウィマン氏は分子細胞と腫瘍学</p>
性別	男
発覚時の年齢	共に不明 2015 年
発覚時の地位 (所属機関と国)	スウェーデン カロリンスカ医科大学 上級教授&教授
医師免許の有無	無・有
博士号の有無	有・有
研究分野	毒物学と細胞死の細胞メカニズム&分子細胞と腫瘍学
生年月日	共に不明
出身国	ロシア・スウェーデン
概要	<p>2015 年にパブピアで、2008 年の二人の論文の中に同じく二人と他著者との 2006 年の論文で使われているデータの重複を指摘された。これらの指摘を受け、元データに戻って訂正するとした。</p> <p>元データを使って訂正した？新たに実験して訂正した？ということだったが、2016 年に訂正した論文にも疑惑が持ち上がり、結局は撤回することを発表した。9 年前の論文のデータがないという理由も添えられており、元論文も訂正論文も補足できなかった。</p> <p>これらの論文には二人の他に共通の著者である Helin Vakifahmetoglu-Norberg 氏がおり、2006 年では筆頭著者、2008 年では二番目の著者である。</p>
動機	pressure
	間違いを指摘されても淡々と対応している。誠実にも見える。本当に間違いかもしれないが、間違いが直せなかったら撤回するだけのことであるという風な気質がある。
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	Retraction Watch から上記の二人の記事を見つけた後、カロリンスカ医科大学はこの二人を含めた 9 人のシニア研究者がパブピアで同様のデータ偽造の疑いがかけられていることで、これらの指摘に対して訂正できるのかどうかを 2016 年 11 月 26 日まで

	に回答するよう大学の弁護士からの通知を受けている。
	ジボトフスキー氏はパプピアで 2002 年の論文についてデータ偽造の疑いがかけられており、正誤を問われている。最近同じようなデータ偽造の問題が 2008 年の論文であることをパプピアで指摘されて撤回したばかりとされている。
	ウィマン氏は自身の研究室で行われた Bykov 氏の論文での正誤を問われている。すでにウィマン氏他がパプピアで補足コメントをしているが、最後のコメントはジャーナル誌と相談するとなっているので結果はよくなさそうだ。
	データ改ざんやねつ造では、ウェスタンプロッキングでの間違いが非常に多い。膨大なデータを管理するのが難しいのか、加工がしやすいのか。データが回転してようが反転してようがデータのタイトルが間違っようが、データの管理が不十分である。パプピアで指摘されるのは出版後、出版前の段階でこういった論議ができる場が研究室にはないのか。

42	
検索入口	Neuroskeptic (online Discover にブログ掲載)という匿名ブロガーが盗用検索ソフトを使って発見したレビュー論文盗用事件 30 件をジャーナル誌に報告したが、ほとんどの出版社からの反応はなく 2 件 (Food Chemistry と Translational Lung Cancer Research)の論文が撤回に至り、1 件 (immune system and cancer)の論文がジャーナル誌から消えた。今回はそのうちの Food Chemistry 誌の 1 件を扱う。
不正の種類	盗用
不正論文数	1 件
不正期間	2016 年
名前	Andrei A. Bunaciu/Hassan Y. Aboul-Enein/Vu Dang Hoang
経歴	Andrei A. Bunaciu はルーマニアの器機分析の研究センター付属の SCIENT という会社に所属でシニアリサーチャーで薬学およびバイオメディカル分野での分光光学。 Hassan Y. Aboul-Enein はエジプトのナショナル・リサーチ・センター所属で、分析化学、電子化学や分光光学 Vu Dang Hoang はベトナム、ハノイ大学薬学部所属でナノテクノロジー、電子化学、分析化学分野
性別	全員男
発覚時の年齢	全員不明
発覚時の地位	Andrei A. Bunaciu はルーマニアの器機分析の研究センター付属の SCIENT という

(所属機関と国)	う会社に所属でシニアリサーチャー。 Hassan Y. Aboul-Enein はエジプトのナショナル・リサーチ・センター所属、名誉教授。 Vu Dang Hoang はベトナム、ハノイ大学薬学部所属。
医師免許の有無	不明・不明・不明だが専攻から無と思われる
博士号の有無	有・有・不明
研究分野	主に分光光学、電子化学や分析化学
生年月日	不明・1943年・不明
出身国	ルーマニア・エジプト・ベトナム
概要	Neuroskeptic のブロガーにより「Food Chemistry」誌に上記三名により 2015 年 10 月に掲載されたレビュー論文に盗用の疑いがあるとして報告。論文は全体の 72% が様々なリソースと重複しており、引用明示されていないものがある。著者からの反応はなく、重複している箇所は単なる見落としとは言えず、編集者により発表から半年後に撤回された。
動機	pressure
	この論文の筆頭著者は Bunaciu 氏である。それぞれの名前でも他に疑いのある論文がパブピアに出ているか調べたがないよう。誰が主犯であるかの特定も難しく、全員の可能性もある。疑いに対して反論もしておらず、72%の重複はいずれにしても悪気もなく手抜きで気軽に一論文を簡単に仕上げたように見える。
機会	opportunity
	この三名による論文は他にもパブピアで 4 件、 Bunaciu 氏と Aboul-Enein 氏の二名の名前を連ねる論文は 17 件もある。事件後も関係は続いているとみられ、その後の共同論文もある。
正当化	rationalization
補足	etc
	今もそれぞれの所属で働いているようで、今回の撤回による処分はされていないようである。ジャーナル誌も告発から撤回までは 6 か月と迅速に対応したが、撤回理由は盗用ではなく、引用が正確にされていないとしている。国がそれぞれ離れているので自国では他人事の事件のように扱われているのか、いないのか。
	引用が正確にされていればこの論文自体に問題はない。そういう意味では、レビュー論文は盗用とはされにくい、盗用が多いのかもしれない (ブロガーの意見)。

43	
検索入口	Neuroskeptic (online Discover にブログ掲載)という匿名ブロガーが盗用検索ソフトを使って発見したレビュー論文盗用事件 30 件をジャーナル誌に報告したが、ほとんどの出版社からの反応はなく 2 件 (Food Chemistry と Translational Lung Cancer Research)の論文が撤回に至り、1 件 (immune system and cancer)の論文がジャーナル誌から消えた。今回はそのうちの Translational Lung Cancer Research
不正の種類	盗用
不正論文数	1 件
不正期間	2015 年
名前	Niki Karachaliou/ Sara Pilotto/ Emilio Bria/Rafael Rosell
経歴	筆頭著者の Niki Karachaliou 氏はこのジャーナル誌の編集委員である。スペインの腫瘍学の医師で、肺がんのレベル 1 & 2 間のトランスレーショナル医療の研究をしている。 責任著者の Rafael Rosell 氏はこのジャーナル誌のチーフ編集委員の一人であり、2013 年にはヨーロッパでもっとも権威のある肺がん研究者であると Lancet が報告した。Rosell 氏は スペインの Catalan Institute of Oncology のがん生物学と高精度医療プログラムのディレクターであり、受賞歴も多くその他多数の肩書を持つ。
性別	女・男
発覚時の年齢	不明・67 歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	Karachaliou 氏と Rosell 氏の二人は Quirón Dexeus University Hospital の同じ Rosell 氏の胸部腫瘍学研究室所属で師弟関係にもある。 Karachaliou 氏は研究室のシニアスタッフ。 Rosell 氏は教授であり研究所の所長。
医師免許の有無	有・有
博士号の有無	有・有
研究分野	腫瘍学 肺がん
生年月日	不明・1949 年 3 月 9 日
出身国	ギリシャ・スペイン
概要	2016 年 1 月に 2015 年 12 月に「Translational Lung Cancer Research」に発表された論文の 54%は重複されているとして匿名ブロガーの Neuroskeptic 氏は盗用検索ソフトの結果報告をジャーナル誌に報告した。論文の半分以上がオリジナルでなく、引

	用明記されていないところがあり、文章の 14 パーセントを占める引用部分が明記されていない。この論文の筆頭著者と責任著者は掲載ジャーナル誌の編集委員を務める立場でもある。ジャーナル誌は 2016 年 4 月、盗用ではなく文章に誤りがあるとして撤回した。
動機	pressure
	専門ジャーナル誌を編集する立場の人も専門家であり論文を発表している。責任著者である Rosell 氏は 2006 年、他誌掲載の論文でも同じような重複があるとして撤回されている。しかも自身が同じく責任著者の一人で他二名も同年先に他のジャーナル誌から発表された論文の多くの文章が重複していると指摘されている。自身の文章は引用しなくても使っているとの認識が強く出ている。使いまわし？自身が関わっているジャーナル誌の編集委員ということで自身の論文を自身で直接検証したかは定かではないが、この著者グループは少し手を加えて再利用しているように思える。
機会	opportunity
	4 名の著者がいるがそのうちの主要な二人が関わっているジャーナル誌に出版するというあえてハードルの低い選択をしたことで自分の有利になる論文出版は職権乱用にもみえる。
正当化	rationalization
補足	etc

43	
検索入口	Neuroskeptic (online Discover にブログ掲載)という匿名ブロガーが盗用検索ソフトを使って発見したレビュー論文盗用事件 30 件をジャーナル誌に報告したが、ほとんどの出版社からの反応はなく 2 件 (Food Chemistry と Translational Lung Cancer Research) の論文が撤回に至り、1 件 (immune system and cancer) の論文がジャーナル誌から消えた。今回はそのうちの immune system and cancer 誌の 1 件を扱う。
不正の種類	盗用 査読不正
不正論文数	1 件
不正期間	2011 年
名前	Srabani Nayak Swati/Kadali Sridevi / Srinubabu Gedela (ジャーナル誌 CEO、院生だと思われる。) 今回は Gedela 氏に注目。
経歴	Srinubabu Gedela 氏はオープンアクセスジャーナル誌、OMICS Internatinonal の CEO を務めている。この会社のジャーナルは 700 以上あり 5 万以上の論文を毎年発表

	しているとされる。その他国際会議などを開催しているとされている。本人は南インド出身で Andhra University でバイオテクノロジーの専攻。スタンフォード大学でポスドクをしたとされる。
性別	男
発覚時の年齢	34 歳？2016 年時
発覚時の地位 (所属機関と国)	OMICS Internatinal CEO。もともとは研究者でもあったが自身でオープンアクセスのジャーナル誌の会社を設立。
医師免許の有無	不明
博士号の有無	有
研究分野	バイオテクノロジー
生年月日	1982 年。2007 年に 25 歳となっているので。
出身国	インド
概要	2. 匿名ブロガーの Neuroskeptic 氏が 2011 年に「Journal of Clinical & Experimenal Cardiology」に発表された論文の 74% が盗用されているのではないかという報告をジャーナル誌に送った。返事はなく、3 度目のコンタクトをした後、撤回報告もなく突然論文は消えたとされている。
動機	pressure
	たくさんの論文を発表することがステータスの条件となっている時代を逆手に取ったビジネスである。現在訴訟中という事もあり、大きな動機は今後出てくるかもしれないが、お金を払ってでも論文を出版したい学会で発表し、研究者としての経歴を輝かしたいものにしてほしいと思っている人がいる限り、こういったオンラインビジネスはこの会社以外にも今後たくさんあり問題になりそうである。
機会	opportunity
正当化	rationalization
	責任著者でありこのジャーナル誌の CEO を務める Gedela 氏はこの論文を出版するつもりなどなかったもので、撤回されたことは信じられないとしている。2009 年から 11 年に 100 人以上の院生を対象としたプロジェクトワークのガイダンスをしたが、それらの出版に関しては全く関知していないが、全てのプロジェクトワークの責任著者は自分であるとしている。
補足	etc
	この OMICS という巨大なジャーナル出版会社は、ほとんどの論文が査読されず出版している、承諾も得ず編集委員にならされている、その他出版が決まってから出版費

	用を要求している、一旦論文申請すると取り下げさせないなど、論文の出版基準から逸脱している行為が多く指摘されており、2016年8月にFTC（アメリカ連邦取引委員会）から告発されている。
	Web of Science 大手のオンライン学術データベース会社はこのジャーナル誌を登録はしていないとして正式なジャーナルとは認めていない。
	OMICS にニセの論文をわざと提出した人物によると OMICS から出版許可が出たが、949ドルを請求された。値引き交渉などもしたが、請求額は払っていないとしている。しかし論文は出版された。その後、自身の論文にコメントでこれはニセ論文であり、アリストテレスを振った最初から最後まで意味のないものだとした。このことから、査読などせず論文を出版する、あわよくば出版料を搾取するジャーナル誌であることを証明できたなどと語っている。
	Scopus という論文データベース会社も OMICS を含めた 300 ジャーナル誌を 2013 年以降扱わないとしている。OMICS に関しては出版問題があるためとしている。
	コンピュータサイエンティストの Beal 氏は一流ジャーナル誌などが入稿ソフトとして採用している Aries 社の Editorial Manager が疑惑の渦中にある OMICS 社と同じソフトを納入することに警告を促している。

44	
検索入口	Reraction watch「Plagiarism」で検索
不正の種類	盗用
不正論文数	6件
不正期間	2016年
名前	6論文計21名の研究者 1名（ Weiping Bi ）のみ2論文にわたる。
経歴	中国の山東省にある the Wendeng Central Hospital of Weihai に所属。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 （所属機関と国）	中国の山東省にある the Wendeng Central Hospital of Weihai に所属。
医師免許の有無	不明
博士号の有無	不明
研究分野	腫瘍学？
生年月日	不明

出身国	中国
概要	GMR (Genetics and Molecular Research)は2002年ブラジルで設立されたジャーナル誌。GMRは2016年9月30日に同年4月から5月にかけて発表された論文6件の撤回を発表した。ジャーナル誌によると査読プロセスの落度でいずれも盗用が理由とされる。そしてこれら論文の著者は全員が中国在住の中国人研究者のようだ。この件は著者および所属機関に報告されているとしている。
	GMRは疑わしいジャーナル誌をリストにした Beall's list に載っているジャーナル誌でもある。(現在このリストは無効になっている。)
	この中で2回名前が出てくる Bi WP 氏の論文数はパブメドによると4論文で発表は2014年から2017年であるからまだ若い研究者であると思われる。その4論文のうちの2論文が今回撤回となった。
動機	pressure
	撤回された6論文の発表の日付と著者、盗用された論文の日付と著者をそれぞれみると、下記の4論文は関係があることがみえる。 論文 A 2016年4月4日発表 Aは2015年に別の出版社から出された中国人の論文(2015年12月発表)の盗用とされる。 論文 B 2016年5月13日発表 Bは論文Aを盗用したとされる。 論文 C 2016年5月23日発表 Cは論文Aを盗用したとされる。 論文 D 2016年5月25日発表 Dは論文Bを盗用したとされる。 Bi WP氏は上記の論文AとDの著者である。この事実からこの4つの論文に関わった著者は所属機関が違う者もいるが全員が意図的に盗用に参加したと思われる。これほどの短い間に簡単に同じジャーナルから4つも論文を発表するとはジャーナル誌の査読精度が低いということを知っての行為ではないかとも思われる。
機会	opportunity
	盗用は論文作成前の最初から不正をするという認識があるので、最初に盗用された論文の発表から短期間の間に4論文作成を同時にしたと思われる。実験などが行われている可能性はないので、文章を変えるだけの作業だとパソコン上でできる。各論文の著者も3名から4名であり、盗用仲間のようなサークルがあるのではないかと。
正当化	rationalization
補足	etc
	中国所属の中国人の記事を英語で検索しても論文にのる名前くらいであり情報収集は難しいのでこの件を個人名で取り上げるのはやめた。

	撤回論文すべてが偶然にも中国である。盗用が多い国の一つとされるがジャーナル誌が今回中国を狙って調査したのかはわからない。
	全員ではないが、その他の著者の何名かをPubMedでみたが、撤回されている論文は今のところなさそうである。

45	
検索入口	Retraction Watch
不正の種類	改ざん 特定外不正オーサーシップ
不正論文数	1件
不正期間	2013年
名前	ウィリアム・ハート
経歴	アラバマ大学助教授。社会心理学。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ アラバマ大学 助教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	社会心理学
生年月日	不明
出身国	アメリカ
概要	2013年に「Psychological Science」に掲載されたハート氏の論文がアラバマ大学の調査をもとに2017年3月に撤回された。ハート氏の研究室の元院生が意図的にデータを改ざんしたことが発覚し、元院生もデータ改ざんを認めている。しかし、元院生はデータ収集のみで論文執筆には関わっていないとしてこの論文の著者ではない。著者はハート氏のみである。ハート氏は論文が出版された時点ではデータが改ざんされたことには気づいておらず、データ改ざんに関わったのは元院生のみとした。元院生の名前は公表されていない。
	不正は院生が筆頭著者でハート氏と他一名が作成した別の論文が社会心理学研究の再現性を実証する RRR (Registered Replication Report)に参加した研究者(Rolf Zwaan)から疑問が挙げられたことが発端になった。この RRR は別の研究者が既存研究報告を再現、もしくはより大きな規模のメタ分析で再現実験をすることで仮説の信頼性を高め

	<p>る。この検証結果には既存研究をした著者がその報告に対してコメントで参加する。しかしそして Zwaan 氏によると、今回は仮説と再現報告には相違があり、これに対する反論を求めたことから元院生の不正が発覚した。</p> <p>今後も撤回論文が増える可能性があるとしている。</p>
動機	pressure
	Zwaan 氏によると、最初の間違いの指摘に対して元院生から、責任は他ではなく自身にあるとメールで告白されたとしている。
	Tullet 氏にこの論文以外のデータにも不正をしたことを告白している。
	Tullet 氏は本人が初めてデータ操作をした時のことを説明してくれたとして、あるデータセットを分析した時、結果が良くなかった。データを複製や削除をして良い結果 (P-value が 0.5 以下) になるようにした。これは彼のそして関係者への功績になることに気づいた。科学的疑問の追求や正しい実験手法の遂行ではなく、良い結果のみが功績になり皆が喜ぶ。研究自体はやがて些細で取るに足らないものであり、学位や経歴を優先するようになったと告白しているとした。
機会	opportunity
正当化	rationalization
	同じ研究室で働いているスタッフの Tullet 氏によると、元院生は信頼でき善行な生徒であったとして最初は間違いではないかと思ったとしている。
補足	etc
	匿名ブロガー Neuroskeptic 氏はこの事件について、論文著者に名を連ねられなかったが、不正をしたとされる元院生の論文へのデータ収集の貢献度について疑問を呈している。同時に今回、著者でなかったから匿名とされ、著者であった場合は研究者としてのキャリアはなかっただろうとしている。元院生や大学としては良かったのか？サイエンス界にとっても良かったのかはわからないとしている。
	元院生が関わった 2013 年発表の論文の提出の日付 (2011 年 12 月、6 年が経っている) から、学部生だった時から研究室に関わっている。本当にこの生徒なのかという疑問も出ており、大学の報告がオープンにされることを望んでいるコメントもある。

46	
検索入口	Retraction Watch
	ORI case summary
	白楽ロックビル

不正の種類	改ざん
不正論文数	3件
不正期間	2015年
名前	メレディス・フォーブス
経歴	アルバート・アインシュタイン・カレッジ・オブ・メディシンの院生。ゼブラフィッシュの生殖細胞の研究。
性別	女
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ アルバート・アインシュタイン・カレッジ・オブ・メディシン ポスドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	生殖細胞
生年月日	不明
出身国	アメリカ
概要	2016年6月、ORIからフォーブス氏が政府助成による研究で、データを故意に改ざんし、3論文および4つのプレゼンで発表したとした。フォーブス氏の告白と追加調査をもとに3年間の政府助成関連研究などへの参加が禁止される和解が合意されたとしている。
	フォーブス氏は2016年に自身の博士論文を主任研究員のMarlow氏と一緒にreview中にデータを改ざんしたことを告白したとしている。不正の疑いからとか、強制ではなく自発的にしたようだ。
	論文2つが撤回、1つが訂正となった。
動機	pressure
	白楽も語っているように院生にして論文が6つ（うち2つ撤回）あるのは優秀な学生であろうと推測。
	医学への純粋な情熱を失って、例えばお金をくらました結果ではないか。そして優秀な学生にとって落ちこぼれることや失敗することは嘘つきになることよりも怖いのではないか？もし他人に認められることによって自分を正当化することに価値を置かなければ、人は喜んで失敗もするだろう。そして世界も受け入れてくれるなら起こらなかったかもしれないとこの事件に対する意見をブログで発表している現役大学生もいる。

機会	opportunity
	一度ではなく何度もやっているようなので、院生を指導する立場のチェックが甘い。
正当化	rationalization
補足	etc
	自発的に不正を告白することはまれなようだ。(白楽)

47	
検索入口	Retraction watch
不正の種類	改ざん
不正論文数	2件 2010年の不正関与を否定している論文も含めての撤回数。
不正期間	2005 - 2010年
名前	鈴木絵里子
経歴	1981年生まれ。慶応義塾大学理工学部卒業その後、細胞生物学で博士課程中、2007年にアメリカのUCLAに留学中に発表した博士論文が2014年、不正の指摘をうけ、鈴木氏本人がコメントで大量のデータの中で取り扱いミスがあったことを認めた。博士号も取り消されるかもしれないと言っているが、現在博士号は取り消されていない。東京農工大学で助教授。癌や脂質代謝異常症、脳梗塞などの疾患を対象とした血栓溶解剤などの創薬開発を目標に研究を行っている
性別	女
発覚時の年齢	33歳 2014年時
発覚時の地位 (所属機関と国)	2014年時の不正発覚時は日本 東京農工大学大学院農学研究院応用生命化学部門 助教授 不正論文制作時はアメリカ UCLA でポスドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	細胞生物学
生年月日	1981年
出身国	日本
概要	2014年、pubpeerで2007年「Oncogene」に発表した論文の画像が改ざんされているのを指摘され、本人がコメント欄でミスを認めた。正式に撤回されたのは2016年の6月。 UCLAのこの鈴木氏が所属した Bonavida 博士の研究室の論文2件が2014年に学内

	調査により不正を指摘され「The Journal of Immunology」誌に撤回を申し入れた。 その内の 2008 年に発表した一論文に鈴木氏も第二著者として名を連ねている。
動機	pressure
	この論文の関連データは博士論文にも使われているとのことで、プレッシャーのかかった論文だったと思われる。現職も学位も無くなる可能性を示唆していたが現在も維持。
	大量のデータを取り間違えてしまったとの理由を示して悪意のないミスを強調しているが、そのミスは複数個所に見られると指摘されている。本人はこれに対しては反論していない。やはり故意にってしまったように見える。
機会	opportunity
	2017年 UCLA の内部調査でまた新たな画像不正が見つかって 2011 年発表の論文が撤回される。2007 年の鈴木氏の論文からすべてに名を連ねている Bonavida 博士の撤回数は 4 件となっている。
正当化	rationalization
	よく似た大量の JPEG データを間違えて張り付けてしまったとのこと。論文の結論に影響するため撤回を申し入れるとしている。
	2008 年の論文の不正部分については自身の関与を日本の不正ブロガーのコメント欄で否定している。
	Bonavida 博士も鈴木氏の 2008 年の論文への貢献度はほんのわずかとしているが、今回のことは非常に残念だとしている。
補足	etc

48	
検索入口	Retraction watch
不正の種類	利益相反・改ざん
不正論文数	2 件 関連論文は 2012 年と 2014 年に発表
不正期間	2009—2016 年 この臨床実験期間を参照。
名前	宮本聖也
経歴	1990 年に山口大学医学部卒業、2008 年から聖マリアンナ医科大学の講師その後同大准教授となっている。
性別	男
発覚時の年齢	不明 50 歳前後？2015 年時

発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 聖マリアンナ医科大学 准教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	一般精神医学、統合失調症
生年月日	不明 1966 年頃?
出身国	日本
概要	<p>今回は 2015 年の聖マリアンナ医科大学の神経精神科の精神保健指定医資格不正取得に端を発し、資格の不正取得に際して臨床試験データが使いまわされたとの報道からひとりの治験参加者からデータ削除の問い合わせがあった。原データが存在するもデータは削除されたとした虚偽の対応を不審に思ったこの元患者が、当該臨床試験をもとに発表された論文を独自に研究し実施計画書どおりの試験がなされなかったとして、問題が発覚。マスコミにも取り上げられたことから大学内外からの委員で構成する調査委員会が結成された。宮本医師を中心として行われた抗統合失調症薬の 2 つの比較試験への経緯が示されたこの元患者のカルテも開示されることから、カルテも改ざんした事実が明らかになる。当初 2 つの薬がランダムに投与されるとされていた計画が、2011 年までの患者には 1 つの薬しか投与されていない事実も発覚。その他治験参加者へのインフォームドコンセントにも不備や症例数の不一致が見つかり、結果的にこれらのデータをもとに発表された論文 2 件ものに撤回された。この一方の薬の製薬会社から 250 万くらいのコンサルティング委託費や講演費等の名目の金額を受け取っている。</p> <p>精神保健指定医は重い精神障害がある患者の強制入院が必要かどうかなどを診断するために必要な資格で、厚労相が指定。資格を得るには一定期間の実務経験に加え、診察した入院患者 8 例以上のレポートを提出する。3 人は同病院に勤務する指導医で、長田賢一、宮本聖也両准教授と丸田智子講師。厚労省によると、3 人は資格取得を申請した医師のレポートをチェックする立場にあったが、申請者が十分に治療に関わっていないのにレポート提出に必要な署名をするなど管理監督を怠った。</p>
動機	pressure
	利益相反の事実はないとされているが、この製薬会社から受け取った金額をみると何もなかったということが考えにくい。
	元患者からのカルテ開示の際に丁寧に書き換えたとしているが、書き換えた記録が残るとは思っていなかったという発言が意図的な行為として映っている。

機会	opportunity
	聖マリアンナ医科大学では利益相反に関しては自主申告となっているが、今回、宮本氏は報告していない。
	2015年に日本神経精神薬理学会のガイドラインに作成に携わっており、この薬の効能を述べている。学会の中でも宮本氏は重要な役職にいた。
正当化	rationalization
	計画通りに実施しなかった理由として①プロナンセリン 1 例目が劇的に効果をあげたため、科学的興味がわいてプロナンセリン投与群に組み入れた。②大学院生がおり、学位論文を仕上げなければならなかったのでプロナンセリン投与群に偏ってしまったとしているが、①の理由は調査委員会で劇的な効果は認められなかったと否定されている。

49	
検索入口	Retraction watch
不正の種類	盗用・改ざん・オーサiership
不正論文数	14 件 現在の撤回数であるが現在 30 件以上が疑わしいとされている。
不正期間	1997-2013 年 上記論文の発表時より
名前	佐藤能啓
経歴	2016 年 3 月までは見立病院副院長、以前の経歴は 2003 年 3 月まで弘前大学教授とされている。
性別	男
発覚時の年齢	2015 年に 50 歳代とされている。
発覚時の地位 (所属機関と国)	日本 見立病院 医師
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	神経内科
生年月日	不明
出身国	日本
概要	2015 年、2005 年に佐藤氏を筆頭著者として WileyOnlineLibrary に発表した論文が同じく佐藤氏が筆頭著者で 2011 年にジャーナル誌の JBMR に発表した論文が似ているという読者からの自己盗用の指摘があり、調査の結果、科学的妥当性に疑問が生じた

	<p>として撤回された。その際に佐藤氏はその他の共著者全員を名誉共著者としており、今回の問題には関わっていないとした。</p> <p>翌年の2016年にはJAMAがデータ改ざんの疑惑から調査の結果、佐藤氏の論文を撤回した。佐藤氏から疑惑を否定するだけの回答が得られなかったとした。ここでも共著者全員を名誉共著者としている。</p> <p>これらの共著者メンバーの名前で出した論文はその後にも自主的に自己盗用や不正、共著者問題があったとしてとしてジャーナル誌に撤回を申し出たり、撤回された論文が続く。すべて佐藤氏のみが不正に関与し、その他の共著者は論文自体の存在さえ知らない時もあったとされる。</p>
動機	pressure
	<p>全ての論文の共著者を名誉著者として他のメンバーの不正関与は否定。この部分だけは一貫しているし、メンバーも否定。メンバーの協力なしに次々と論文を発表することの労力で得るものが何だったのか、動機のようなコメントが見当たらず。</p>
機会	opportunity
	<p>自己盗用や改ざんで同じ共著者メンバー（ほとんどが名誉著者）での不正とされている。しかし不正に関与したのは佐藤氏本人のみ。ローカルな病院勤務であり、佐藤氏の研究を近くで監視するような人もいなかった。不正論文作成パターンがあったのか。</p>
正当化	rationalization
	<p>佐藤氏は Retraction watch に対して、メタ分析によって疑問とされた同じような合併症の患者が数多くサンプルできた理由は地域には神経系の患者を扱う医師が少ないことや病院の受け入れ患者の特徴が条件に合っていることや、ランダム化比較試験の基準、好結果の原因などを文書で反論している。</p> <p>共著者として多くの撤回論文に名を連ねている弘前大学学長は論文への関与を否定し、調査しないとしたこと疑問をもっているブログもある。</p>
補足	etc
	<p>不名誉なことに佐藤氏のランダム化比較テストを使用した論文に使われている臨床実験参加者のサンプリング方法が疑わしいとして Bolland 氏のメタ分析や Carlisle 氏による新しい分析法によって臨床試験結果の正当性を再評価した結果、不正ではないかという結果を新たな論文にされている。もちろん最終的な決断やさらなる調査をしないと不正とは判断できないとしている。ジャーナル誌もこれらの論文結果を重くみており、調査中であるとするジャーナル誌があることから論文撤回数は伸びていくと予想されている。</p>

	<p>同じような研究をした他国の研究者の論文では佐藤氏とは違う結果を出しているものがある。研究者が違う結果になることは常々あることだが、薬の効能を比較テストしてその結果を参考にする人がいることを考えれば今回の不正は重大な罪である。</p>
--	---

50	
検索入口	Retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造・改ざん・盗用・オーサーシップ
不正論文数	3件
不正期間	2011 - 2013年
名前	キャロライン・バーウッド
経歴	2011年にクイーンズランド大学のブルース・マードック教授の研究室で博士号を取得する。その後教授と同様にパーキンソン病の研究を進めていたが、今回の不正事件で2013年に大学を辞職、現在の職業は speech pathologist となっている。
性別	女
発覚時の年齢	28歳 2013年
発覚時の地位 (所属機関と国)	オーストラリア クイーンズランド大学 研究員
医師免許の有無	不明
博士号の有無	有
研究分野	神経科学 パーキンソン病
生年月日	1985年?
出身国	オーストラリア
概要	<p>2013年に内部告発によりクイーンズランド大学のブルース・マードック教授とキャロライン・バーウッド研究員の2011年発表の論文がねつ造であると大学の調査結果を発表した。大学の調査で、実験自体が行われたというデータが見つからないとして論文が掲載された European Journal of Neurology に撤回を申し入れた。この論文へは助成金20000ドルが使われていたが、それもすでに大学が返金したとしている。大学はこの件をクイーンズランド州の不正疑惑委員会に報告し、刑事事件となる。その後二人は大学を辞職した。</p>
	<p>2014年には大学のその後の調査で2007年からの92論文が調査の対象となり、マードック教授が長年編集員を務めていた Aphasiology で2013年に発表した二人が共著</p>

	<p>の論文での臨床試験数の水増しが発見され、ジャーナル誌に撤回を申し入れた。</p> <p>同年4月、2013年に International Journal of Speech-Language Pathology で発表した二人の論文に撤回を申し入れた。オーサーシップと知的所有権の問題とされている。</p> <p>同じ研究をしている Ms.Dique の未発表の論文を勝手にローインパクトファクターのジャーナルにマードック氏と自身の名前を入れ、Ms.Doque を第三筆者にして発表していた。Ms.Doque によるとバーウッド氏がこの論文に名前が載る関わりは全くないとしている。</p> <p>バーウッド氏は当初から罪状を否定しており、2014年11月5日、バーウッド氏は保釈となる。2016年10月マードック氏から遅れること半年、執行猶予二年の有罪判決を受ける。</p>
動機	pressure
	<p>マードック氏は不正への関与を否定し、裁判での罪状も否認。反対にマードック氏からの今回の件に関する反論が見つかっていない上、罪状を認めてあっさり罪を受け入れている。あくまで想像だが、下記の正当化のところでも述べているように共著に含めてもらえることには喜びを感じていたという事で、マードック氏は著名な教授からのプレゼントを受け取るような感覚で、不正論文の共著を受け入れていったのか。</p>
機会	opportunity
	<p>大学当初の調査ではマードック教授との恋愛関係は認めていなかったが、関係を否定しかねるメールが明らかになり2011年から親密な関係にあったことを認めた。今回問われている罪状はすべて2011年から2013年の間で起こったものである。大学の調査もマードック氏関連の92論文まで広げていたが、マードック氏のキャリア前半では不正が見当たらないとされている。この二人の関係が不正するきっかけの一つであることはまちがいなさそうである。</p>
正当化	rationalization
	<p>バーウッド氏は個人的なマードック氏への感情は別にして、自身の名誉の回復のためにこの裁判にしている。2013年夏の調査面談では、臨床試験への関与を否定し、分析のみに関わったと発言した。振り返ってみるとその臨床試験が行われたという事実はそんなになかったとも発言。この発言はマードック氏が不正を主導していたという証言にもなる。しかし論文への関与は非常に少ないながら、共著者に含まれることに関しては喜んでい。共著者になりたかったわけではなく、自身が主導してはいないと主張している。</p>
	<p>バーウッド氏はここでもオリジナルの論文（多分最初に疑われた論文の事）への関与</p>

	は全くなかったと否定している。
補足	etc

51	
検索入口	Retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造・改ざん・盗用・オーサーシップ
不正論文数	4件
不正期間	2011 - 2013年
名前	ブルース・マードック
経歴	著名な教授で、13冊の著書があり、380報の査読論文を出版していた。クイーンズランド大学・健康リハビリ科学部長（School of Health and Rehabilitation Sciences）を1999年1月～2009年12月の10年間務め、クイーンズランド大学・神経性コミュニケーション障害研究センター（Centre for Neurogenic Communication Disorders Research）の創設者でもあった。今回の不正事件で2013年に大学を辞職。
性別	男
発覚時の年齢	63歳 2013年
発覚時の地位 （所属機関と国）	オーストラリア クイーンズランド大学 教授
医師免許の有無	不明
博士号の有無	有
研究分野	神経科学 パーキンソン病
生年月日	1940年？
出身国	オーストラリア
概要	<p>2013年に内部告発によりクイーンズランド大学のブルース・マードック教授とキャロライン・バーウッド研究員の2011年発表の論文がねつ造であると大学の調査結果を発表した。大学の調査で、実験自体が行われたというデータが見つからないとして論文が掲載された European Journal of Neurology に撤回を申し入れた。この論文へは助成金20000ドルが使われていたが、それもすでに大学が返金したとしている。大学はこの件をクイーンズランド州の不正疑惑委員会に報告し、刑事事件となる。その後二人は大学を辞職した。</p> <p>2014年には大学のその後の調査で2007年からの92論文が調査の対象となり、マー</p>

	<p>ドック教授が長年編集員を務めていた Aphasiology で 2013 年に発表した二人が共著の論文での臨床試験数の水増しが発見され、ジャーナル誌に撤回を申し入れた。</p> <p>同年 4 月、2013 年に International Journal of Speech-Language Pathology で発表した二人の論文に撤回を申し入れた。オーサーシップと知的所有権の問題とされているが、二人以外に著者がいない知的所有権は盗用の疑いがある。</p> <p>2016 年 3 月に 17 の罪状を認め、2 年の執行猶予が言い渡されたマードック氏の 4 件目の論文撤回は、他人の博士論文を自分のが研究したように違うジャーナル誌に先行して発表したようだ。今回はバーウッド氏の名前は共著者にはない。この論文の研究者の承諾もなく勝手に共著者になっている。オリジナルの論文に問題はなくそのまま撤回にはならないようだ。</p>
	<p>マードック氏は罪状を素直に認めているようであり、2016 年 3 月、バーウッド氏よりも早く二年の執行猶予の判決を受けている。</p>
動機	pressure
	<p>2011 年以前のマードック氏の論文からは不正な論文や助成金申請などが見つからないことから、恋人となった自身の研究室のポストドク生を喜ばせたくて、彼女を共著に加えた論文を次々と簡単に発表していったのかもしれない。PubMed によると 2011 年から 2013 年の間に二人の名前が共著になっている論文は 12 もある。共著になっているというか、バーウッド氏の論文の全てにマードック氏がいる。</p>
	<p>最初はバーウッド氏のために不正していたのかもしれないが、上記 4 にも述べたように自身のポストドク生の一人の論文であろうと思われるものも簡単に自分のものとして発表しだしたようだ。一度不正が見つからないと思うと繰り返してしまい、遂には自分のためにもしてしまったのか。</p>
機会	opportunity
	<p>バーウッド氏との不正が発生する以前からすでに著名な研究者であり、自身の研究所も持っており力のある教授であった。論文も多数あり、助成金もたくさん受けており、自分の名前を使えば簡単に論文も助成金も簡単に手に入ることを知っていた。</p>
正当化	rationalization
補足	etc
	<p>この事件の被害の余波として、大学とある留学生との間に問題が起こった。大学の処分としてマードック氏の研究室が閉鎖となり、研究室に所属していた台湾からの留学生の研究が中止され学位が取得できなくなってしまった。大学側と留学生の間で何度か話し合いが持たれたそうだが、お互いの言い分が合わず、最終的には留学費用や学</p>

	費などの弁償問題に発展している模様。研究不正によって周囲の人間も被害を被る。
--	--

52	
検索入口	世界変動展望
不正の種類	盗用
不正論文数	1件
不正期間	2014年
名前	大町福美
経歴	2001年佛敎大学の社会学部卒業後、2005年に国際医療福祉大学院の看護分野の修士課程修了。1995年から2015年まで聖マリア学院短期大学助産学の助手から准教授までを務め、2015年四月から徳島文理大学の教授となる。
性別	女
発覚時の年齢	58歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	徳島文理大学看護学科 教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	助産学
生年月日	1957年
出身国	日本
概要	2015年12月聖マリア学院短期大学在職中に2014年度の紀要に投稿された大町氏の論文は盗用したものだという外部からの通報で大学側が調査に入った。調べた結果、論文は川崎市立看護短期大学の2005年の紀要に載っていた別人の論文の大半を盗用したことがわかった。不正が判明した時点で、大町氏は聖マリア学院から徳島文理大学の教授になっており、文理大学は自主退職したようだ。大学側は不正の事実はあとで知ったとしており、わかっていたら雇用していなかったとしている。聖マリア学院とは継続して非常勤の雇用関係があったが解除された。
動機	pressure
	聖マリア学院大学の紀要は年度末の三月下旬に発行されているようだ。年度末で聖マリア学院を退職し、新年度から教授として徳島文理大学に行くことはこの時点では決まっていたと思われる。転職時期などで多忙だったのか？紀要発行から約9か月後に外部通報により盗用発覚となる。紀要に掲載された「育児支援に関する研究の動向と

	課題」という題名からもわかるように、自身の研究結果報告というよりはどんな研究論文が最近出ているかの情報をまとめたもの。そんなに活発に論文が出ている分野とも思えないので、2005年の動向が約10年後の2014年でまとめても不正が分かりにくいと判断したのか。しかし、読者も限られている分野だけに不正が発覚してしまったのか。
	本人も不正を認めているが、これといった動機への供述はみつかっていない。
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	2001年の大学卒業の経歴から察すると元々は看護師だったところからキャリアがスタートしたようにみえる。
	紀要投稿は推薦もあるのかもしれないが聖マリア学院では応募制になっており、未発表のものとしている。

53	
検索入口	概要と経歴は wiki から
不正の種類	ねつ造 利益相反
不正論文数	25 件
不正期間	1996 - 2008 年
名前	スコット・ルーベン
経歴	米国・コロンビア大学を卒業し、1985年（27歳）ニューヨーク州立大学バッファロー校の医学研究科で医師になり、シカゴのマウント・サイナイ医療センター(en:Mount Sinai Medical Center)で麻酔科の研修医を勤めた。1991年（33歳）、タフツ大学医学部関連病院であるベイステイト医学センター(en:Baystate Medical Center)病院の疼痛科に移籍し、後に主任となった。ルーベンス氏は、現在、手術後鎮痛、特に整形外科で主に使用されている多様式鎮痛(multimodal analgesia)を使用することの提唱者だった。この使用法に影響を受けたものは多数いる。
性別	男
発覚時の年齢	50歳 2008年
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ タフツ大学医学部 麻酔学 教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有

研究分野	麻酔学
生年月日	1958年
出身国	アメリカ
概要	<p>2007年ころから、数人の麻酔科学研究者は、ルーベン氏の研究が否定的な結果を示さないことから、疑念を抱き、監視を始めていた。</p> <p>2008年5月、ベイスティト医学センター病院の定例監査で、病院の「研究週間」にルーベン氏が発表するつもりだった2つの研究が病院の承認を得ていないことが発覚した。2009年3月10日、ベイスティト医学センター病院のスポークスウーマンであるジェーン・アルバート (Jane Albert) は、ルーベン氏 (51歳) がいくつかの論文に記載している臨床試験を、ルーベン氏は実際には、実施しておらず、少なくとも1996年以降の21論文で研究データを捏造していたと発表した。ファイザー製薬は2002年から2007年の間、多くの臨床研究に投資している。</p>
	<p>ルーベン氏は、タフツ大学を解雇され、マサチューセッツ医師登録委員会から医師免許が永久にはく奪された</p>
	<p>2010年1月7日、ルーベン氏 (52歳) は医療詐欺 (Health care fraud) の1つについて有罪を認めた。検察官は、ルーベン氏が実施していない研究で数千ドルの研究費を得たと主張した。2010年2月21日、彼は、裁判官・マイケル・ポンソー (en:Michael Ponsor) の前で正式に有罪を認めた。</p> <p>2010年5月24日、ポンソーは、6か月禁固刑、3年間の監視下保釈、製薬会社に5,000ドルの罰金の支払、政府に5万ドル没収、製薬会社に36万ドル賠償、の刑罰を彼に言い渡した。司法取引で、生涯、医者にならないとした。</p>
動機	pressure
	<p>検察によるとルーベン氏は2001年まではこの分野 (麻酔学) では権威者であることから、自ら製薬会社へ研究を提案して、助成金を受け取ったとしている。そしてその製薬会社の望む結果をねつ造して論文にして一流紙で出版したとされる。今回は製薬会社へのお咎めはないようなので、動機はお金と言ってもいいかもしれない。</p>
	<p>2002年から2007年にファイザー製薬から受け取ったはずのお金の記録が所属する大学のベイスレイト病院にはなく、いくら金額が直接ルーベン氏や研究室に渡ったかはわからないと大学側が証言。</p>
機会	opportunity
	<p>今回約15年の長きに渡り、不正が発覚しなかったのはジャーナル誌の複数のサイエンティストによる査読システムが機能していなかったことにあるとされている。一流ジ</p>

	ジャーナル誌であっても全く機能していないのが現状であるとヘルス関連ニュースのエディターの意見。
正当化	rationalization
補足	etc
	ジャーナル誌は今回の不正にねつ造された論文のすべての共著者についての共犯を否定している。中には論文の共著者になっていることも知らなかったとされる。
	2015年になってまだ撤回の報告があった。ジャーナル誌は撤回し忘れていたとした。しかし、ルーベン氏が起こしたこの不正論文の引用は今もあるとされ、まだまだ影響が響いているとされている。

54	
検索入口	Retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	改ざん
不正論文数	12件?
不正期間	2006 - 2013年?
名前	ロバート・ライアン
経歴	アイルランドの微生物学者であり、嚢胞性線維症への新しい治療法を推進する若きスター研究者だった。アイルランドのコルク大学(UCC)植物病原体研究者 Maxwell Dow 氏の研究室での輝かしいポストドク時代を経てライアン氏は科学基金アイルランド・スターティング・インベスターギア賞とウェルカム・トラストの支援を受けて、2010年には自身の研究室の主任研究員となる。2013年、ライアンはダンディー大学で教職員の地位を取得し、彼の給料と研究はウェルカム・トラスト・シニア・フェローシップによって5年間サポートされていた。他にもたくさんの賞と助成金も獲得している。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	イギリス ダンディー大学
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	微生物学
生年月日	不明

出身国	アイルランド
概要	2016年8月、ライアン氏は所属のダンディ大学から不正調査中に停職処分になっている。ライアン氏は同じものではないと反論したようだがいくつかの論文に画像の使いまわしが確認されたという。中には画像が反転したり回転したりしていることから意図的に不正したとみられるということだ。不正の範囲はこの時点では不明であるが、前所属のUCC（コルク大学）の頃より数年、一流ジャーナル誌も含まれているとされた。
	その後11月に、大学側はライアン氏からの反論もあったが、調査委員会の結果を支持、ライアン氏が辞職したことを内部メールでスタッフに伝えられたとした。臨床データの誤りや重複、その他画像不正が12論文にみられたとした。ライアン氏以外の大学のスタッフが不正に関わった形跡は見られなかったとしてライアン氏のみが処分の対象になったようだ。反論の詳細の内容は明らかにされていない。12論文の詳細も明らかにはされていないがRetraction watchは2件の訂正論文やパブピアでの疑惑の論文数件を確認しているとした。
	問題の発端となった2016年のパブピアでの疑惑の論文のやり取りで、ライアン氏のコルク大学での教授でメンターでもあるDow氏が共著者を代表して問題のあるところには訂正なりの適切な対応をしていくと返答している。
動機	pressure
	ライアン氏は正当化にもあるようにあくまで故意ではなくエラーであるとしている。
機会	opportunity
正当化	rationalization
	この問題はあくまでも大学側からの正式発表はなく、パブピアのコメントや不正問題調査中などの大学側のコメントや内部メールによって明らかにされた。2017年4月にRetraction watchでの2012年の論文の撤回がジャーナル誌Molecular Microbiologyより発表された。この2012年発表の論文に使われた画像はほぼ全員が同著者の2010年PNAS発表の論文に使われた画像が使われていたという。これらは電子画像のラベル誤表示のエラーであるとし、共著者が撤回に同意したとのこと。
	この時のライアン氏の以下のコメントがある。撤回陳述やパブピアでの説明したことが真実である。パブピアでの疑惑が上がる以前にジャーナル誌には元データを提供して誤表示のエラー3つを報告していたとしている。しかし、共著者は訂正して再発表するよりも撤回を望んだとされる。不正が発覚したのは2013年以降所属のダンディ大学在職中だったが、問題とされる論文は2013年以前のものばかりのようである。2013

	年以前のライアン氏の所属はコルク大学である。ダンディ大学ではライアン氏以外の誰も処分されなかったのはある意味当然であるように思えるが、コルク大学での責任教授である Dow 氏およびその他の共著者は処分されなかったのは不思議である。
	2011 年発表の論文が 2017 年 4 月に <i>Journal of Bacteriology</i> から発表された。データ誤表示となっている。ここでもパブピアで疑惑になる前にジャーナル誌に元データと共に誤表示のエラーの報告をしたとした。必要であれば外部団体に依頼して再検証してもかまわないとしているが、第一著者であり実際に実験を実行したイボンヌ・マッカーシー氏が訂正を支持しなかったとした。そして自身はこれらの問題を訂正して論文が再発表されることを望むとしている。なぜかライアン氏以外の共著者は消極的だ。
	2017 年 8 月に 3 件目の論文撤回が発表された。これに対するコメントもライアン氏からある。第一著者であるがこの間違っただデータの作成には関与していないとしている。撤回陳述の中でも、Tang 教授のエラーであるとしている。しかし著者のひとりとしての責任があり撤回は避けられなかった模様。一方で、この論文の正当性として、ある外部団体がこれらの実験を再検証して同じような結果を生んでいると強調。今回も他の撤回された論文と同じように訂正して再発表するよりも撤回することを共著者は望んだ。ライアン氏はすでに外部団体に情報を提供し論文の再発表を計画している。あくまで不正には全く同意していないようだ。
補足	etc
	上記の正当性のように撤回されたのは修正可能な論文だったようで、ライアン氏のみが処分され注目を集めてしまっている。他の共著者はライアン氏を擁護していない。

55	
検索入口	Retraction Watch
不正の種類	改ざん？ 間違い？利益相反？
不正論文数	撤回論文 1 件。その他訂正や疑惑などが数件ある。
不正期間	2009 年 上記論文の発表。
名前	ソニア・メロ
経歴	2005 年ポルト大学バイオケミストリー学科卒業。その後 PhD リサーチを Spanish National Institute of Health や Institut d'Investigacio Biomedica de Bellvitge で行い、ポスドク 4 年間でハーバードメディカルスクールや MD アンダーソン癌センターで過ごし、2014 年にポルト大学の分子病理学および免疫学の研究所である IPATIMUP でがん細胞の遺伝研究の主任研究員になる。2015 年 12 月には若い優秀な科学者をサ

	ポートする EMBO を受賞していたが、申請に使われた論文が撤回となり 2016 年 2 月に EMBO の奨学金も取り消しとなった。
性別	女
発覚時の年齢	34 - 5? 歳 2016 年時
発覚時の地位 (所属機関と国)	ポルトガル ポルト大学 主任研究員
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	癌細胞
生年月日	不明
出身国	ポルトガル
概要	2016 年、2009 年に Nature Genetics で発表された論文が撤回になったと発表された。使用された画像が重複しているとされた。この論文は 2010 年に一度訂正されている。 第一著者であるソニア・メロ氏はこの論文を使用して EMBO の奨学金を申請していたため、奨学金が取り消されたが、現職のまま活躍している。
動機	pressure 単なる間違いも重ねてしまうと不正になる？
機会	opportunity 一流とされるジャーナルに掲載するような論文にしては軽率すぎる間違いをすることに不満を覚えるとするコメントや、ジャーナル編集者や査読段階で見つけられない出版側への問題を指摘する声も見られる。間違いが見つかったら後から訂正すればいいという人と故意に不正をする人との差別化が一段と難しくなる。
正当化	rationalization 今回の論文が撤回になって、Retraction watch でオープンにコメントしている。今回重複されていた画像があったとされたが、2010 年に訂正版が出る前のオリジナルでは重複されてなかった。訂正版の編集時に画像が重複してしまった。研究ノートに記されている元データもあり、できれば近いうちに再発表したいとしている。第一著者として間違いを最終的に見つけられなかったことに対しては、本当に恥ずかしいミステイクだと思つて述べている。
補足	etc 加えて、パブピアで疑問視されている点については、匿名者とは議論しないとするスタイルをとるとした。質問があるなら直接コンタクトを取って応えたいとしている。

	<p>2016年4月に2003年に Journal of Cell Science より発表した論文の訂正が発表された。誤った箇所が論文の結論には影響がないとされている。この論文は566回引用されている。上記の撤回された論文は引用が238回とされて非常に世間から注目されている論文であるだけに訂正や撤回の反響は大きい。</p>
	<p>一方で利益相反を疑う声も上がっている。不正問題を扱う有名なブロガーLeonid Schneiderによると、2015年にメロ氏、上記撤回論文でも責任著者である Raghu Kalluri 氏（ポストドク時代のボスであり、アメリカテキサスのMD アンダーソン癌センター教授）が新しいバイオマーカー-glypican 1 を発見したことを Nature 誌に論文発表した。この論文をもとにした初期の乳がんのバイオマーカーの商品は再現できなく、製薬会社もすぐに製造をやめてしまった。このメロ氏と Kalluri 氏のペアはパブピアでも論文への不正疑惑を見つけることができる。</p>
	<p>しかし、2017年にプレプリントサーバーで新しい抗体での glypican 1 を別の製薬会社から発売することになったことを発表した。glycan 1 は新たに GPC1 と生まれ変わっているらしいが、中身は変わっていないとこのブロガーは主張している。Kalluri 氏の所属のテキサス大学のがんセンターは不正に関する調査どころか、Kalluri 氏が創立者の一人として名を連ねるバイオ製薬会社に8億ドルの投資をしているという。このバイオ会社が GPC 1 を製造することになっている。</p>

56	
検索入口	Retraction watch
不正の種類	ねつ造
不正論文数	11 件
不正期間	2000-2015 年
名前	ロニー・シーガー
経歴	<p>イスラエルの Weizmann Institute of Science の教授であり、生体調節学部の学部長である。修士も博士もこの Weizmann Institute of Science で取得。MAPK に取り組んでおり、現在は主に MAPK 構成要素の細胞内局在、特に核移行のメカニズムの制御に取り組んでいる。主要なジャーナルに200以上の論文を発表し、70人以上の研究学生とポストドクターのフェローを指導、多くの賞を受賞している。</p>
性別	男
発覚時の年齢	61 歳 2017 年時
発覚時の地位	イスラエル Weizmann Institute of Science 教授

(所属機関と国)	
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	分子生物学 癌細胞
生年月日	1956年6月26日
出身国	イスラエル
概要	2017年4月27日、Journal of Biological Chemistry から同時に9件の論文の撤回が発表された。画像改ざんである。イスラエルの Weizmann Institute of Science の副学長 Michel Neeman 氏によると、すべての論文の第一著者もしくは責任著者は大学の教授であり学部長のロニー・シーガー氏であるとした。古くは2000年からの論文まで含まれている。ジャーナル誌は読者からの報告で不正の疑惑が見られるとして論文著者の同意を経て撤回したとした、そして今後の撤回論文の予定はないとした。
	しかし9件すべての撤回陳述には論文の結論を覆すようなものではなく、訂正して再現できると記されている。
	副学長の Neeman 氏によると、今回の不正の責任の所在がつかめていないとしているが、最終的な責任は研究室の長であるシーガー氏であり、頻繁にこんなことが起こる研究室の環境が大学院生にいいとはいえないので、この研究室には大学院生を置かないとした。
	現在シーガー氏は研究室に残ったテクニシャンと共に過去の論文の再現に努めている。それまでは大学に残るようだ。
動機	pressure
	撤回論文11件のうち結論が妥当ではないとされたのが1件。主な撤回理由は画像改ざんとされている。これはエラーであるとしている。
機会	opportunity
正当化	rationalization
	上記概要でも示したように現在、シーガー氏は研究室の責任者として過去の研究の再現や訂正に時間を費やしている。研究の知見には自信を持っており、元データをもとに論文の結論に間違いがないことを証明できるとしている。
	前年、パブピアでの疑問にシーガー氏以外の著者が問題点をミスイクだと返答している。
	上記の9件以前に2015年に2件の論文撤回がある。撤回が決まった時の第一著者である Moshe Oren 氏は、重複出版はミスであり非常に恥ずかしいとしている。この時

	は講演を伴っており混乱していたとしている。
補足	etc

57	
検索入口	Retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	19件 撤回件数。他訂正など。
不正期間	2002 - 2015年? 15年とするものがあるが、撤回論文19件を参照。
名前	ジン・チェン
経歴	中国の Beijing Capital Medical University で医師免許を取得し、Paris University 13 で博士号、ポストドクをアメリカのフィラデルフィアの Fox Chase Cancer Center で過ごした後、1997年にサウスフロリダ大学の Moffitt Cancer Center で働き始めた。JBC より論文19件が撤回されたと発表される以前に大学を退職しているとしている。今回の撤回が原因かは不明とされている。
性別	男
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ サウスフロリダ大学 客員研究員
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	卵巣がん
生年月日	不明
出身国	中国
概要	2016年10月、Journal of Biological Chemistry からジン・チェン氏の論文の19件の論文撤回と訂正論文1件が発表された。すべては画像の重複であるとして著者が撤回を要請したとしている。しかし、画像の重複は認めているが、論文の知見、結論に影響はないと著者が協調しているとしている。
	チェン氏はNHIからも数百万ドルの研究費を得ている。この発表の以前に大学を退職している。
	事の発端は、チェン氏が2015年4月にJBCに対して2010年発表の論文を訂正したいと申し出たことであった。ジャーナル誌からすぐに元データを提供するようにとの

	返事があったにもかかわらず、約一年の間応答しなかった。そして 2016 年 5 月、ジャーナル側からチェン氏が著者に含まれる 20 の論文の元データを追加要求されることになった。
	この後、話が過去 2002 年からの論文 20 件に及ぶことから、チェン氏及び大学側も交えて返答の遅れた理由や古いデータの回収が困難であるとして 2010 年から 2015 年の論文 6 件のみのデータ提供しかできない、(しかも全て揃っていない) などのやり取りが行われたが、ジャーナル誌側から画像の重複使用の指摘は JBC の規定違反になるとして論文を取り下げるように要求され、それに従ったかたちになった。ただし、チェン氏は論文の結論への影響はないとの見解は変えなかった。
動機	pressure
	結論には影響がないが画像操作はしてしまった。結果を象徴する画像の美しさなど、理想の形に添わないと少し手を加えてみたくなるのか。
機会	opportunity
正当化	rationalization
	最初の訂正を要求した論文の知見には自信をもっており、チェン氏のラボのメンバーと再現試験したが、よく似た結果が得られたとしている。他の論文についても引用先での実験でも知見の結果が指示できるとしている。元データを提供することが難しい研究の再実験をしてもいいとまで言っている。
補足	etc
	パブピアではこのジャーナル誌以外で発表した論文にも疑問があがっている。
	大学側も内部調査に入っているとのことだが、共著者は所属だった大学からの数名を含めて 10 数名にも及ぶが彼らに処分が広がるかは不明としている。

58	
検索入口	Science
不正の種類	改ざん・ねつ造
不正論文数	5 件
不正期間	2008 - 2015 年
名前	渡邊 嘉典
経歴	1984 年東京大学理学部生物化学科卒業後、1989 年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、日本学術振興会特別研究員、東京大学大学院理学系研究科助手、英国王立がん研究所 (ICRF) 客員研究員、東京大学大学院理学系研究科助教授を経て、2004

	年5月より分子細胞生物学研究所教授を務めており、染色体の動態研究をしているほか、各受賞歴も多数ある。
性別	男
発覚時の年齢	55歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	東京大学 分子細胞生物学研究所 教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	染色体動態
生年月日	1960年8月7日
出身国	日本
概要	2016年8月「Ordinary_researchers」と名乗る匿名から東京大学、政府機関及びマスコミなどに医学部および分子細胞生物学の6つの研究室から発表された22の論文に不自然な点があるとして不正告発された。大学側は調査委員会を設けて本格的な調査を始めると発表した。その中の一人で元東京大学病院長の門脇教授の疑惑の7件の論文について、これは根拠のない虚偽の告発であり、我々のデータには絶対的な自信があると語った。
	翌年の2017年6月、上記のうちの一つの研究室の渡邊教授は7つの論文のうち5つの論文に問題があることを指摘されていると自身のホームページで発表。すでに修正できる問題点までも公表し、ジャーナル誌のEMBOからは論文の結論に影響のないことや画像の異常は規定の中では一番低い問題レベルであることなどから訂正されることが決まっていたとした。現在も他のジャーナル誌と調整中であるとした。ほとんどの間違いは故意ではないとしても主張しているが大学の規定では改ざんねつ造ということだ。
	2017年8月、東京大学は正式に渡邊教授と同研究室の元助教授の丹野悠司氏の二名が不正行為をしたと発表。5論文の実際にはなかった実験をあたかもあったようなグラフに起こしてのねつ造6件や画像の改ざんなどが10件あった。今後も渡邊教授の他の論文についても追加調査が行われることが決定した一方で、他の医学部の研究室からは不正はなかったという疑問が残る結果となった。
動機	pressure
	調査報告書では今回の不正問題の原因として渡邊教授の研究室ではノートの作成や保存の必要性についての教育がなかったことをあげ、教授自らが画像の加工を不適切に

	行い、「論文のメッセージ性を高めるために加工は積極的に行わなければならない」といった教育があったこととしている。論文の見栄えをよくすることは大事といった考え方があったようだ。
機会	opportunity
	渡邊教授と共に不正認定された丹野氏について責任は逃れられないとしても「渡邊教授の誤った教育・指導による犠牲者」の側面もあるとしているように、教授の言いなりになりがちな研究室であったことがわかる。
正当化	rationalization
	大学の正式な調査発表の前に自身のホームページで指摘されている問題点を訂正したデータも含めて発表している。あくまで論文の結論には影響がないので、故意の不正ではないという姿勢が見える。
補足	etc
	不正ではなく不適切な操作は訂正すればよいのか。訂正を認めたジャーナル誌がすでにあり、今後も訂正していく構えのようだ。その他のジャーナル誌は Nature と Science といった一流紙である。

59	
検索入口	Retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	改ざん・ねつ造
不正論文数	8件
不正期間	1995-2011年
名前	フランク・ザウアー
経歴	ドイツ生まれ。2003年からアメリカのカリフォルニア大学リバーサイド校に所属。以来ドイツのフォルクスワーゲン DFG や NHI などからの資金を得ている。
性別	男
発覚時の年齢	
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ カリフォルニア大学リバーサイド校 準教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	生化学 エピジェネティクス

生年月日	不明
出身国	ドイツ
	2011年10月3日、匿名のEメールがあり、16年間の間に発表された8つの論文に故意に改ざんされた図が含まれているという内容だった。この論文すべてに共通する人物がザウアー氏だった。大学側は調査委員会を設け、ジャーナル誌からの疑問点も含め33の問題点を挙げた。2011年から約一年間にわたり行われた調査は、外部団体のcalorensicsによるパソコンや研究室のコンピュータも解析に含められている。詳細によると33の問題点のうち6つの論文の20点についての不正を認めた。他の13点については不正の証拠が見つからなかったもしくは証拠データが合法的でなかったとされる。
	大学側からの処分は解雇ではなかった。代わりに5年間の論文出版禁止。研究倫理のワークショップへの出席。このワークショップでの理解度を見るとして、大学で最低でも三年の研究倫理コースを指揮することという処分が下された。いつの時点であるかは不明だが、ザウアー氏はすでに大学を退職している。
概要	ジャーナル誌のサインエンスは2014年5月ザウアー氏の2004年と2006年の論文2件の撤回を発表した。画像操作により論文の知見の信憑性がなくなったとした。大学の不正調査の結果を参考に撤回されたが、ザウアー氏以外の者の関与はなかったとしている。
	2015年Natureがザウアー氏の返事を待たずに2002年の論文を撤回すると発表した。Retraction watchによるとこの論文が上記の撤回論文2件、そしてMolecular Cell誌の撤回1件と併せて4件目の撤回となる。この論文は220回の引用がある。追記。ザウアー氏は1996年にCellに発表した論文が撤回になっており5件目となる。
	2017年6月、大学の内部調査結果からすでに時間がたっているが、2015年のNSHの5年間の締め出し処分、そしてORIからも2020年までの締め出し処分が決まった。
動機	pressure
	テネシー大学の物理化学者であり研究倫理学者でもあるKovac氏によると、ザウアー氏の初期の不正の時期、彼の雇用はまだ不安定なものであった。若いスタッフで特にバイオケミストリー分野の論文を出版して資金を得るプレッシャーは相当なものであり、これが安易な方法に走って論文を脚色する原因になりえるとしている。
機会	opportunity
	長年にわたり不正が発見されなかったのは、読者が詳しく画像操作を見ることがなかったからだろうとされる。

正当化	rationalization
	ザウアー氏は 2016 年に聴聞会の要求の際にドイツ語の手紙を翻訳したものを提出した。そこには「目には目を。歯には歯を。私も仕事をなくした、そしてあなたも」と書かれていたとされる。ザウアー氏によると、ある Mr. Rune Dreser と名乗る人物からのサイバー攻撃にあつてコンピューターがハッキングされ、画像を改ざん、データをねつ造されたとしている。
補足	etc
	2013 年の大学の調査の時はノート及び元データは過去に盗まれてしまったと発言して証拠がないということは不正の事実もないということになったという記録もあるらしいが、いきなりの陰の存在 MR.Rune Dreser の登場は一流ジャーナル誌へ投稿していた研究者の陰も無くなった印象。

60	
検索入口	retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造
不正論文数	0 件
不正期間	14 日間
名前	アレック・ミルチャンダニ
経歴	ペンシルベニア大学の生物学卒業。2015 年フロリダアトランティック大学の大学院に入学しロバート・バーツ教授の院生での研究助手になった。2017 年に大学を退学となっている。一年半在学したようだが、実質は一年もない。学部生のころから旅行業「Escapes In the Sun」で働いていて社長補佐にもなっていた。
性別	男
発覚時の年齢	20 代
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ フロリダアトランティック大学 研究助手 大学院生
医師免許の有無	無
博士号の有無	無
研究分野	行動神経科学
生年月日	不明
出身国	アメリカ

概要	<p>2016年フロリダアトランティック大学の教授の Vertes 氏によると、研究助手のミルチャンダニ氏が提出してくるデータがおかしいと思い始めたという。ネズミでの実験が正しくおこなわれていないようであった。ミルチャンダニ氏の動物実験室の入退室記録と実験日時が合わないことを発見。ネズミにエサもやっていないことや全く出勤していないことが明らかになった。その他、過去のノートの記録を書き写していたりしていたこともあり、彼の関わったネズミのデータは研究から除外された。</p>
	<p>この実験が発表論文への影響も助成への申請書への影響もないが、NIMH の助成を受けていた研究の一部であったこともあり、2017年6月、ORI から二年以内に研究をするなら一年間の監視がつくなどの処分が発表された。</p>
動機	pressure
	<p>ミルチャンダニ氏がどれほど研究熱心だったかはこれらの資料からではわからないが、副業のフロリダリゾートの旅行業などの経歴をみると、結果を出そうと追い込まれて犯した不正というよりは、実験するのが面倒であったという印象だ。</p>
機会	opportunity
正当化	rationalization
補足	etc
	<p>今までの不正事件に比べても、些細な事件である。不正には重いものや軽いものはないという表れかもしれない。白楽も教授が大学院生をここまで厳しく処分するより、不正を正して育てるのが教授の役割だとしているが、教授をここまで怒らせるような気で研究する気もない能力のないいい加減な態度の学生だったのかもしれない。</p>

61	
検索入口	Retraction watch
不正の種類	ねつ造
不正論文数	9件。その他訂正論文もあり。
不正期間	2006 - 2009年 上記撤回論文期間に添う。
名前	アニル・ポティ
経歴	<p>1995年インドのクリスチャンメディカルカレッジを卒業、1999年ノースダコタ大学の医学部でインターンシップを終え、2006年にデューク大学での腫瘍学とヘマトロジーの研修。その後同大学で遺伝子によってどの化学療法が肺がん患者に合うかがわかるという画期的な発見をして一流ジャーナル誌にも発表し、特許を申請し、臨床試験に応用していた。しかし、この論文結果を追試できないとして疑問が上がり臨床試験</p>

	も中止。その後再開されたが、やはり再現できないとして中止。2010年ポティ氏の経歴にも詐称があるなどの問題もあり、同年辞職。現在ノースダコタ州のがんセンターで医師として働いている。
性別	男
発覚時の年齢	38歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ デューク大学 准教授
医師免許の有無	有
博士号の有無	有
研究分野	腫瘍学
生年月日	1972年5月10日
出身国	インド
概要	<p>デューク大学でポティ氏は Joseph Nevins 教授の研究室で遺伝子によってどの化学療法が肺がんもしくは乳がんや卵巣がん患者に合うかがわかるという画期的な発見をして一流ジャーナル誌にも発表した。特許も申請し、臨床試験に応用していた。しかし、この論文結果を追試できないとして疑問が上がり、一時は中止されていた臨床試験が再開されたが、やはり再現できないとして中止。2010年ポティ氏の経歴にも詐称があるなどの問題もあり、同年辞職。論文も撤回されていきデューク大学は臨床試験の患者からも訴訟を起こされる結果となった。</p> <p>2012年、ポティ氏の上司である Nevins 氏も偶然では説明できない操作されたデータがあるのは明らかだとしてポティ氏を批判。論文も撤回されていきデューク大学は臨床試験の患者からも訴訟を起こされる結果となった。2015年 ORI から不正を認定され 2020年までの締め出し処分となった。しかしこの認定を本人が否定も承認もしているわけではなく、これ以上の時間と資金をこの問題に費やすのを止めるということを前提に成立した結果となった。</p>
動機	pressure
	内部告発をした Pelez 氏は自身が筆頭著者になっていた。この研究室で使われている方法は確証されていないことについて疑問を唱えたが、ポティ氏は聞く耳を持たなかったとしている。交差検証でもこの研究室は知見に合わないサンプルを切り捨てていたと証言。このことからポティ氏も含めて研究室の研究の作法が強引だったことがうかがえる。
機会	opportunity

	ポティ氏の知見に疑問を唱えていた研究者の他に、2008年4月の臨床試験が始まる頃、医学部3年に在学していた Bradford Perez 氏はポティ氏の研究に疑問をもっており内部告発した。しかし大学側は深入りせず、ポティ氏の研究はがんセンターの広告塔となっていくた。もし事の時に内部告発に対応していればこの確証されていない研究が臨床試験に持ち込まれることは防げたかもしれない。
正当化	rationalization
	治験患者からの訴訟裁判で、ポティ氏は誤っているもしくは不適切なデータなどが研究に含まれていることに気づいてなかったと発言した。これらの裁判はすでに非公開の和解が成立している。
補足	etc
	こんなにも大掛かりな臨床試験に何百人の関係者がいるのにも関わらず、大学側はポティ氏によって皆騙されたと声明。最終的に処分されたのはポティ氏のみなのが不思議な事案である。

62	
検索入口	Retraction watch
	白楽ロックビル
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	2件。撤回は1件、訂正は数件、疑いは14件。2017年に一件の撤回が追加
不正期間	2002 - 2014年
名前	カトリン・メドラー
経歴	オーストリアのウィーン大学で薬学を修め、スイスのチューリッヒ大学院で博士号取得。アメリカ、カルフォルニア大学ロサンゼルス校のポストドクの後、ドイツ、ブレーメン大学生体分子相互作用センターの教授となった。糖尿病の細胞生物学が専門でたくさんの賞を受賞しドイツでは著名な研究者である。現在もブレーメン大学所属。
性別	女
発覚時の年齢	42歳
発覚時の地位 (所属機関と国)	ドイツ、ブレーメン大学 教授
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	糖尿病学

生年月日	1971年11月9日
出身国	ドイツ
概要	2014年、パプピアにメドラー氏の関わった論文のうちの14論文に疑問があがった。古くは2002年のメドラー氏の博士論文から2014年までの論文である。主に画像操作や二重出版である。
	すでに2002年の博士論文は当時所属のスイスのチューリッヒ大学から不正とは認定するだけの証拠もないとして不正調査終了。
	2016年10月ドイツ、ブレーメン大学も重複した写真を掲載していたケースもいくつか確認、長期間にわたり繰り返されたことはきちんと注意を払い精査することを怠った。また、元データを耐久性のある安全な記憶媒体に保存することも出来ていなかったという調査結果を発表した。しかし意図的もしくは極めて重大な過失が認められないとした。処分としては今後研究の結果を発表するときは特に注意を払い、二度とこのようなエラーを起こさないよう警告が出された。現在も同大学に所属している。
	2014年にメドラー氏はドイツ研究振興協会から名誉あるハイゼンブルグ教授職を与えられたが、大学の調査結果の発表から1か月後、研究室のメンバーの監督責任を怠ったことが研究不正行為につながっており共同責任があるとした。もはやハイゼンブルグ教授職のハイスタンダードには見合わないとしてはく奪した。
動機	pressure
	論文のすべての責任は自身にあるとして、研究論文の役割などは公表していないようである。不正部分を自身が担当したという記述もないが、今後研究室のデータ保存、プレゼンテーションや論文作成へのルールを改善しミスを犯さないようにすると宣言。大学側の調査結果を参考にすると原因は概要4でもあるようにデータ管理や研究室員の管理ができてないということか。
機会	opportunity
	単純ミスが長年続くという環境は論文を出版する前の内部での校正推敲などのチェック機能が厳しい環境で研究キャリアを始めてないため。補足でのDonath氏のような単純ミスを大目にみる意見を持っている仲間がいたことや、博士論文を出したスイスの大学も不正認定をしていないことから推測できる。そして現在所属の大学も同じく単純ミスを大目にみるという環境で研究を続けていることが長期にわたりミスを犯し続けたのかもしれない。
正当化	rationalization
	結論に影響を受けることがないとしてメドラー氏は一貫して故意ではなく不注意によ

	る間違いを強調している。そして撤回した出版社を非難している。
	疑惑の中で訂正となった論文の責任著者であった Marc.Y.Donath 氏は単純ミスは誰にでもあるもの。論文間の研究で入違った図表などは同じコードネームを付けてしまったために適切なフォルダーに保存されてなかっただけとし、訂正できる単純ミスは認めるべきという発言をした。
	撤回が発表されるやいなや、パブリシアや Retraction Watch などの不正問題を取り扱うオンラインに匿名のコメンテーターにコピペされ拡がる。たとえ研究結果データが外部団体での追試で問題がなくとも訂正できる画像問題があると、悪意のあるキャンペーンが始まり攻撃のターゲットにされると現在の読者を非難。
補足	etc
	大学側の寛大な処置で不正とは認定されなかったもので、その後に見つかる論文の不適切な画像扱いは訂正が進んでいるようだが、大学側の訂正を推薦するもまれに却下される。2008年に American Diabetes Association 社の Diabetes 誌から発表された論文に 2014年に正誤表、2016年に懸念が次々と発表され、所属大学の調査を要求して訂正が勧められたが出版社側は COPE の規定に従って、不正行為もしくは悪意のない誤りによって研究への信頼性をなくしたとして撤回した。
	ウェスタンブロットィングの取り扱いミスは非常に多く、不正との境界が見えにくい。悪意のないものでも信頼性をなくした論文を撤回扱いにするという COPE の規定が採用されているところと採用されていないところなど統一性がない。単純ミスさえも許さない高い基準の中で研究活動している人としていない人の温度差が非常に激しい。

63	
検索入口	白楽ロックビル
	Retraction watch
不正の種類	ねつ造
不正論文数	3件
不正期間	2011 - 2013年
名前	藤田 亮介
経歴	長崎大学薬学部卒業。その後同大学院で博士号取得。助手、助教授を経て、アメリカのコロンビア大学のアルツハイマー病と加齢脳の研究の Asa Abeliovich 准教授の研究室にポスドクとして留学。
性別	男

発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ コロンビア大学 ポスドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	神経生物学 アルツハイマー病
生年月日	不明
出身国	日本
概要	<p>コロンビア大学、アペリオヴィッチ研究室は神経変性疾患の治療法の確立をめざし、パーキンソン病の発症メカニズムの解明とその治療法の開発を研究していた。マウスや培養細胞を用いた疾患モデルの作成とその解析を行っていた。2009年より研究室に在籍していた藤田氏は、2013年頃データねつ造をしていたことが発覚。2014年、藤田氏が第二著者であった2011年 Cell で発表の論文が撤回された。</p>
	<p>2015年、大学の調査結果と ORI の調査により2つの論文と未発表論文1つの計3つの論文での故意の不正が認定され、三年間の締め出し処分となった。この発表時にはすでに大学を辞職している。</p>
	<p>2015年6月、2013年に Nature で発表された論文が撤回になった。データの再分析により、図1および2に示される ELISA および細胞下局在研究では、サンプル数、画像パネルおよびデータ点が不適切に操作され、不正確であることが示されたとなっている。</p>
動機	pressure
	<p>藤田氏の動機の原因となるコメントなどはまだ見つけられていないが、Cell の論文発表のプレスリリースでは遅発性アルツハイマー病につながる「重要な分子経路」を特定したと宣伝され、この論文が注目を集めている研究であることがわかる。そしてこの研究で将来的に2つの分子標的薬剤の可能性を指摘したとされることから薬学部出身の藤田氏へのプレッシャーは大きかったのではないかと推測される。</p>
	<p>藤田氏の不正が発覚したにも関わらず、研究室としてはこの論文研究の知見は正しいと信じて研究を続けると撤回報告の中で強調されている。実際は教授の仮説に見合うデータが得られないことから、求めるデータになるようにねつ造してしまった可能性がある。</p>
機会	opportunity
	Cell の撤回報告から研究室でアルツハイマー病に関連した病理学の分子解析を担当し

	ていたのは藤田氏のみであったようで、不正操作が可能な環境だったようだ。担当が一人でチェック機能がなかったということか。
正当化	rationalization
補足	etc

64	
検索入口	Retraction watch
不正の種類	ねつ造・改ざん
不正論文数	3件 撤回は一件、他訂正一件と未発表一件。
不正期間	2006 - 2009年 問題論文発表時から2009年に大学を去ったとされるまで。しかしORIの処分は2014年になっているがその間の情報は不明
名前	ヘレン・フリーマン
経歴	正式な経歴が見つからないが、イギリスのオックスフォード大学のイオンチャネルで著名な Frances Ashcroft 教授の研究室に所属。その後、ハーバード大学のポストドクをしていた。2009年に大学を去ったとされるがORIからの処分発表は2014年である。
	同じく2014年に2006年のオックスフォード大学に所属していた時に発表した論文二つの撤回と訂正の発表がある。オックスフォード大学のMRC's Mammalian Genetics Unit at the Harwell Science and Innovation Campusにも所属していたとされる。マウスを使っての遺伝子と病気の研究機関である。その後の経歴などは不明であるが研究には関わっていないとされる。
性別	女
発覚時の年齢	不明
発覚時の地位 (所属機関と国)	アメリカ ハーバード大学 ポストドク
医師免許の有無	無
博士号の有無	有
研究分野	糖尿病?
生年月日	不明
出身国	不明 イギリスかアメリカ?
概要	オックスフォード大学所属時に第一著者として2006年にインスリンに関する論文を2つ発表した。2014年、共に訂正と撤回になる。どちらもフリーマン氏の故意に画像

	<p>などを改ざんした不正が原因とされる。一つは撤回したが、どちらの論文にもフリーマン氏以外の関与はなく、外部団体および研究室での追試では論文の知見は変わりなく影響がないとしている。</p> <p>2007年にはフリーマン氏や Ashcroft 氏などと連名で糖尿病治療のための診断方法などの特許を申請している。その時の所属はすでにアメリカのボストンになっているのでハーバード大学に所属になっていたと思われる。</p> <p>2014年に ORI からフリーマン氏の研究不正の処分が発表された。ジャーナル誌 Nature に提出した NIH 助成の研究論文で三つの図、及びその説明文、補足のビデオ資料などでマウスに関して情報を故意に操作したとして三年間の締め出し処分を受けた。ORI の調査範囲にはオックスフォード時代の論文は含まれていない。</p>
動機	pressure
	<p>オックスフォードでの研究論文は結論に影響のない程度の不正で終わっているとされている。影響がない程度の微妙な改ざんやねつ造をしていた理由を示している文献は見つかっていないが、ハーバードでもこの習慣が抜けずにいたのか。してはいけないことだとは知っていたが、してしまったと報告されている。</p>
機会	opportunity
	<p>オックスフォード大学やハーバード大学で、同じようなマウスの不正であり、研究で必要とされるマウスの準備を任されていたのはフリーマン氏であり、これらの不正に関わっているのはフリーマン氏以外にいないとされるところから単独で作業する環境にあった、反対に単独なので作業量の負荷が大きかったのか。</p>
正当化	rationalization
補足	etc
	<p>オックスフォード大学の Ashcroft 氏の研究室ではフリーマン氏が関わっていない論文も不正により二つ撤回になっている。2007年と2008年に発表した論文でそれぞれ2011年と2012年に撤回となっている。不正をしたとされる人物は中国出身の Ma 氏のようなが、撤回時には帰国していたとされる。</p>